

特252

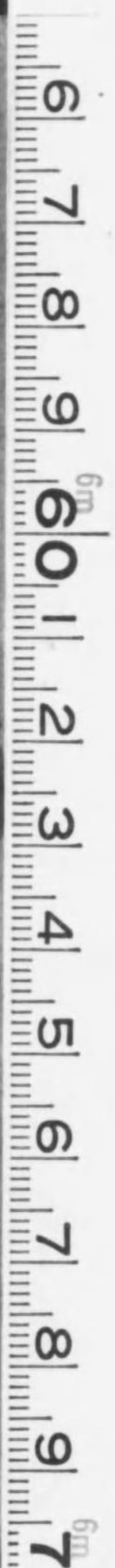
882

良書百選

第七輯

社団法人  
日本圖書館協會編

始





特252  
882

# 増訂 岩波 哲學小辭典

東京帝國大學教授  
伊藤吉之助 編輯

四六判一四一四頁  
クローズ装製函入  
定價七・〇〇送料・三三

## 徹底底的の改訂増補版

本辭典は理想的な小形哲學辭典として夙に絶大の信頼を得、廣汎に普及して來た。その實用を旨とせる小項目主義の採用、取材の現代的にして多面的なる事は、その解説の簡潔平易而も學術的なる事と相俟つて、本書を讀書子に不可缺の友たらしめたのである。然るに發刊以來既に七年、社會の變遷並に學問の發達には極めて著しきものあり、茲に吾人はそれらの進歩の線に沿うて本辭典の價値を遺憾なく發揮せしむる爲に、徹底的な増補と改訂とを企てた。即ち本増訂版は前版刊行以後新に登場した或は重要性を得るに至つた事項及び人名を中心として廣く新項目を採録すると共に、既掲の項目に就ても必要に応じて改訂乃至補足し、更に徹底的に改作された索引を添へ、その完璧を期したものである。斯くて本辭典は最新にして且つ手頃なる哲學辭典として我が國に於ける哲學的文化の普及と發達とに力強く貢獻し得ることを確信する。

### 特色

- 内容の豊富** 前版輯録の項目八千四百に千六百の新項目を増補し項目總數實に一萬
- 取材の最新** 最近の學界、思想界に登場した注目すべき新事項、新人名を悉く網羅す
- 領域の廣汎** 項目の採録は哲學的諸學は勿論、自然科學、社會科學等の諸領域に亘る
- 敘述の簡易** 小項目主義を採り、簡潔平易正確な解説を與へ一讀要領を得せしめる
- 説明の聯絡** 項目間の聯絡を緊密にして重複を避け關係項目を縱横に参照せしめる
- 検索の簡便** 本文項目はローマ字引き、巻末には完備せる人名索引事項索引を附す

### 序

わが日本圖書館協會は、昭和六年七月以來文部省援助の下に、社會教育上裨益するところある優良圖書の推薦を行つて來た。本協會はこれがために特に調査部を設け、調査委員十名をあげて新刊圖書の調査に當らしめ、毎月一回調査委員會を開いて慎重審議の上、推薦したる良書を、「圖書館雜誌」及「讀書」に發表して、一般社會人の圖書選擇の利便に供して來たのである。かくて昭和七年五月推薦圖書百種を選んだので、更に今回は昭和十二年四月より本年三月に至る推薦圖書を収録して、茲に其第七輯を刊行することゝなつたのである。幸にこれが讀書人にとつて圖書選擇上の指針となることを得ば本協會の洵に本懐とするところである。

なほこの機會に於て推薦文を執筆せられた各方面の權威者に對し、深く謝意を表する次第である。

昭和十三年三月

社団法人日本圖書館協會理事長

松本喜一

東京 神田 橋 岩波書店 振替 東京 〇四二六二



特252  
882

# 訂増 岩波 哲學小辭典

東京帝國大學教授  
伊藤吉之助 編輯

四六判一四一四頁  
クローズ装製面入  
定價七・〇〇送料・三三

## 版補增訂改の的徹底

本辭典は理想的な小形哲學辭典として夙に絶大の信頼を得、廣汎に普及して來た。その實用を旨とせる小項目主義の採用、取材の現代的にして多面的なる事は、その解説の簡潔平易而も學術的なる事と相俟つて、本書を讀書子に不可欠の友たらしめたのである。然るに發刊以來既に七年、社會の變遷並に學問の發達には極めて著しきものあり、茲に吾人はそれらの進歩の線に沿うて本辭典の價値を遺憾なく發揮せしむる爲に、徹底的な増補と改訂とを企てた。即ち本増訂版は前版刊行以後新に登場した或は重要性を得るに至つた事項及び人名を中心として廣く新項目を採録すると共に、既掲の項目に就ても必要に応じて改訂乃至補足し、更に徹底的に改作された索引を添へ、その完璧を期したものである。斯くて本辭典は最新にして且つ手頃なる哲學辭典として我が國に於ける哲學的文化の普及と發達とに力強く貢獻し得ることを確信する。

### 特色

- 内容の豊富** 前版輯録の項目八千四百に千六百の新項目を増補し項目總數實に一萬
- 取材の最新** 最近の學界、思想界に登場した注目すべき新事項、新人名を悉く採録す
- 領域の廣汎** 項目の採録は哲學的諸學は勿論、自然科學、社會科學等の諸領域に亘る
- 敘述の簡易** 小項目主義を採り、簡潔平易正確な解説を與へ一讀要領を得せしめる
- 説明の聯絡** 項目間の聯絡を緊密にして重複と避ける關係項目を縦横に参照せしめる
- 檢索の簡便** 本文項目はローマ字引き、巻末には完備せる人名索引事項索引を附す

## 序

わが日本圖書館協會は、昭和六年七月以來文部省援助の下に、社會教育上裨益するところある優良圖書の推薦を行つて來た。本協會はこれがために特に調査部を設け、調査委員十名をあげて新刊圖書の調査に當らしめ、毎月一回調査委員會を開いて慎重審議の上、推薦したる良書を、「圖書館雜誌」及「讀書」に發表して、一般社會人の圖書選擇の利便に供して來たのである。かくて昭和七年五月推薦圖書百種を選んだのであるが、更に今回は昭和十二年四月より本年三月に至る推薦圖書を収録して、茲に其第七輯を刊行することゝなつたのである。幸にこれが讀書人にとつて圖書選擇上の指針となることを得ば本協會の洵に本懐とするところである。

なほこの機會に於て推薦文を執筆せられた各方面の權威者に對し、深く謝意を表する次第である。

昭和十三年三月

社団法人日本圖書館協會理事長

松 本 喜 一

東京 神田 橋 岩波書店 振替 東京 〇四二六二



目次

第一 哲學・宗教

續思索と體驗	西田幾太郎	一
體系と展相	山内得立	二
現代支那人精神構造の研究	大谷孝太郎	二
今日に處するの道	深作安文	三
放處世信念	大倉邦彦	四
婦人世間道場	春山作樹	五
私の進言	嘉悦孝	五
報徳讀本	宮西一積	六
傳教大師	鹽入亮忠	七

第二 歴史・傳記・地誌・紀行

説圖 世界史話大成	仲小路彰	九
日本文化と佛教	辻善之助	一〇
歴史に輝く支那事變物語	大毎こども會編	二
東洋文化史概説	上野菊爾	三
アツシリア學概説	小栗襄	三
子を喪へる親の心	村田龍勤	四
明治維新と女性	鈴木安弘	五
伊能忠敬	布村安弘	五
回想の寺田寅彦	伊達牛助	五
吉田松陰	小林勇編	六
山・原野・牧場	玖村敏雄	七
	坂本直行	八



今日の支那

躍進支那を診る 中支から南支へ  
熱帯の旅  
歐羅巴東洋人の旅  
どらいぶうえい  
ナチ獨逸を往く  
隣邦 ロシア

小倉 章 宏元  
神田 正 雄三  
益澤 秀 雄三  
齋藤 清 衛三  
隈部 一 雄三  
大塚 虎 雄三  
秦 彦 三郎 函

第三 政治・法律・經濟・社會・教育

時局 政治學  
立上る政治家  
轉回期の政治  
現代支那の政治と人物  
祭政一致と臣民道  
國家構造論  
嵐に立つ支那  
日清役後支那外交

關 口 泰 云  
馬 場 恒 吾 云  
宮 澤 俊 義 云  
波 多 野 乾 一 云  
大倉精神文化研究所 元  
尾 高 朝 雄 云  
尾 崎 秀 實 三  
矢 野 仁 一 函

訂法 哲 學

憲法制定と歐米人の評論  
空襲と國際法  
現實國際法諸問題  
物の經濟  
經濟學入門  
現代社會思想講話  
優生と結婚  
日本農村婦人問題  
教育改革論  
教育行政摘要 改訂版  
生れる前から 子供の愛育讀本  
五六歳までの 科學的進歩的な  
親たるの道 愛兒の導き方  
母への教育報告  
兩親教育  
借行拾録

尾 高 朝 雄 函  
金子 堅 太郎 函  
田 岡 良 一 函  
立 作 太 郎 三  
太 田 正 孝 三  
波 多 野 那 元  
織 山 政 道 函  
大 島 正 滿 函  
丸 岡 秀 子 函  
阿 部 重 孝 函  
下 村 壽 一 函  
尾 高 豊 作 函  
上 村 哲 彌 函  
瀬 川 頼 太 郎 函  
本 田 正 信 函  
兒 玉 九 十 七  
借行社編纂部編 函

第四 自然科學・醫學

近代 科學  
續測候瑣談  
天文と宇宙  
長生きの科學

佐 藤 信 衛 函  
岡 田 武 松 函  
荒 木 俊 馬 函  
井 上 兼 雄 三

第五 産 業

新興日本の工業と發明  
日本建築史講話  
新農村の基調  
如何にして農村は更生するか  
農村の工業と副業  
趣味の森林  
工業化學讀本  
人造液體燃料工業

大 河 内 正 敏 函  
關 野 貞 三  
岸 田 日 出 刀 函  
那 須 皓 三  
横 尾 惣 三 郎 函  
大 河 内 正 敏 函  
清 水 潔 函  
西 澤 勇 志 智 三  
伊 木 貞 雄 三

解圖 商品の科學

第六 美術・諸藝

日本繪畫史讀本  
回顧七十年  
現代演劇論  
續團菊以後  
團菊以後  
能樂鑑賞  
能樂筆陣

白 崎 享 一 三  
佐 久 間 哲 三 郎 三  
岡 登 貞 治 函  
正 木 直 彦 函  
岸 田 國 士 函  
伊 原 青 々 函  
伊 原 青 々 函  
戸 川 秋 骨 函  
坂 元 雪 鳥 函

第七 文學・隨筆

書物の歴史  
文章讀本  
日本文學の精神  
萬葉の精神  
芳賀矢一文集

玉 城 一 函  
菊 池 寛 三  
久 松 潜 一 三  
中 河 與 一 三  
芳 賀 積 編 三  
三



文學讀本 春夏秋冬	長塚 節著 四	山 川 草 木	井 伏 鱒 二 六
文學讀本 春夏の巻	中山省三 郎編 四	朝食前のレセプション	戸 川 秋 骨 七
文學讀本 秋冬の巻	正 岡 子 規著 五	村 の 無 名 氏	水 野 葉 舟 八
明治代表詩人	河 東 碧 梧 著 五	秋 窓 記	阿 部 次 郎 九
短 歌 入 門	土 屋 文 明 著 六	旅 と 読 書 と	木 村 毅 十
萬葉集撰定時代の研究	德 田 淨 七	人 の 行 路	三 宅 雄 二 郎 十一
吉野朝の悲歌	川 田 順 八	面 と ベ ル ソ ナ	和 辻 哲 郎 十二
柿本人麿 評釋篇 卷之上	齋 藤 茂 吉 九	黎明を呼び醒ませ	賀 川 豊 彦 十三
晚 來 抄	川 田 順 八	撰 モ ン テー ニ ュ 隨 想 錄	關 根 秀 雄 譯 十四
現代俳句論	水 原 秋 櫻 子 十		
芭 蕉	齋 藤 清 衛 十一		
穢 土 寂 光	飯 田 蛇 笏 十二		
風 中 の 子 供	坪 田 讓 治 十三		
楠 正 成	武者小路 實 篤 十四		
國 木 田 獨 歩	福 田 清 人 十五		
大 地 第一 第二 第三 部	新 巴 爾 ・ 居 格 譯 著 十六		

# 良 書 百 選 第七輯

## 第 一 哲 學 ・ 倫 理 ・ 宗 教

西田幾多郎 著  
續思索と體驗

「思索と體驗」の出たのは大正四年である。このたび同性質のいはゞ妹姉編ともいふべきものとしてこれが出版せられたのである。本書にも論文、感想、雜纂の類が收められてあるが、感想の類も哲學に關するものが多いやうである。大體においてやはり哲學的エッセイ集といふべきものであらう。「取殘されたる意識の問題」「人間學」「歴史」「私の立場から見たヘーゲルの辯證法」といふ「一」から「四」までの専門の論文は既に著者の過ぎ去つた考へ方に屬する所が多いと

「序」に述べられてある。われわれ一般の人にはこれらの論文よりも、「希臘哲學に於ての『有るもの』」「プラトンのイデアの本質」「フランス哲學についての感想」「ゲーテの背景」などのやうなものが近づき易くもあるし、興味深いのである。周知の如く著者の哲學は世界的にも獨自の高所に位するものであり、われわれ一般人には容易に理解し得ないものであるが、それらのエッセイに親しみ啓發を受けたならば、西田哲學の殿堂にも次第に參じ得るやうになるかも知れない。われわれはこれらのエッセイによつて仄かながら、著者の清高な世界に接し得るのである。「十六」以下は著者の個人的な思ひ出・所懐等を綴つたものであつて、著者の人格的高風を偲ばしめる床しい讀物である。



山内得立 著

## 體系と展相

本書は著者がこゝ數年間に諸雜誌へ發表せる論文を蒐録したもので、主として獨逸學派に屬する哲學研究である。我國哲學界に於て新カント學派全盛の頃、カント學派とは全く異つた思想系統を歩むボルツァーの知識學、マイノングの對象論、ブレンターノの心理學よりフツセルの現象學へと歩む一派があつた。著者は此等の學派に親しみを感じて其研究に従事し、其結果生れ出たものが此等の論文である。其序に叙べて居る如く、此學派は單なる獨逸の哲學と異り、多分に獨逸太利的なる性格を加味して居り、恰もその國が獨逸の嚴密なる論理とフランスの繊細なる感覺を合せ有してゐる様に、この學派は豊富なる體驗に基礎を置いてゐるのである。

「哲學の出發」「超辨證法」「混合の論理」「意味的論學の意味」「辨證法と現象學」「現象學的領域」「美の對象性」「高次

の對象」等本書に收められたる論文は、著者の全くの研究論文で學究的なものであるが、先づ哲學的素養を有せるもの、ためのよき哲學書であり、特に現象學派の哲學に關心を有するものに取つては、見のがしがたきよき哲學書である。

(昭和一二、二、五 神田區駿河臺 弘文堂書房  
菊判 四六一頁 三・〇〇)

大谷孝太郎 著

## 現代支那人精神構造の研究

一國の國民性の把握といふことが如何に難業であるかについて、著者は次の如く述べて居る。

「支那國民に多少の關りある人々は、其の支那國民に就いての實踐的の至觀照的認識に於て、支那文化の原理に思ひを致さざらむとするも能はざるものゝ如く、或は支那國民性を捉へむとの念願に驅られ、或は支那國民性といふ概念によりて個別的支那歴史支那文化を理解し所謂支那問題解決の指針となさむと企て來つた。支那國民性なる言葉がかゝる人々の口の端に上らぬ日とてはない。然れどもかゝる人々、いはゞ、支那文化論者大衆、所謂支那通及び支那學者の念願も企ても若し卒直に言ふことを許されるならば、未だ五里霧中を低回

彷徨し殆んど光明に向つての進路を見出して居らない。支那歴史・史支那文化の個別研究並びに支那の自然研究の駁々たる進境に遙かに取り残されてゐる。」

と。無論我々は斷片的な支那國民性に關する文献を有する。しかし四億の人口を有する支那の國民性を把握することは唯一人の主觀的な獨斷によるを得ないことは當然である。

東亞同文書院に教鞭をとる著者は斯かる現状を慨し、十餘年間に互り支那國民性の把握に志し、致々として力め「どうか、私は支那國民性の全相貌を把握することが出來た」と述べ、この一大業績を發表せられたものである。

著者は哲學的人間學の立場に立つて、先づ一定の國民性概念、國民性と個人性格兩者の對立及び聯關の理念、國民性把握の方法を確立し、次に内外古今の主なる支那國民性論を紹介批評し、最後に著者の現代支那國民性の全相貌を描出して居る。

本書の描く現代支那國民性に對して著者は必ずしも客觀性を要求しない。しかしながら「本書陳ぶるが如き性格を現代支那國民に想定すれば現代支那歴史現代支那文化が其の根柢から統一的に理解せられるであらう」と自信を以て述べて居る。

支那國民性についての科學的検討の少く、支那國民性の理

解の必要なる折柄、本書の如きは十分に研究さるべきものと信ずる。

本書は昭和十年末の發行にかゝるものであるが時局と關聯し、明日の支那の建設に對する重要な一礎石をなすものである。

(昭和一〇、一二、五 上海、虹橋路百號東亞同文書院  
支那研究部 發賣所 丸善、三省堂、巖松堂等  
菊判 八七八頁 五・〇〇)

深作安文 著

## 今日に處するの道

昭和九年以來の多事多端なる我國現下の情勢に際會して、著者は幾多の論文・隨筆・パンフレット等を發表した。今其等の數々の思想上・政治上の意見をまとめて一卷となしたるものが本書である。本書に述べられたる著者の意見は穩健なる思想の中に普遍妥當の道を説けるもので、人倫の大道を示す倫理學者に相應しき數多の卓見が述べられて居る。

「今日に處するの道」「政治と公民教育」「修養」と大體三部門に分類して、第一の「今日に處するの道」に於て我國の國體・思想問題等に關する著者の意見をまとめ、第二部門「政



治と公民教育」に於て選舉肅正・政界淨化・政治の革新・公民教育上より見たる神道等の題目をかかへて、主として著者の政治上の意見を開陳し、第三部門「修養」に於て著者は現代生活の批判と反省・修養上より見たる現代日本、及び青年に對する幾多の小訓を述べて居る。

之を要するに、著者は小なき主觀が事物の判斷を誤る所以を明かにし、我々の實踐は常に事物の正確なる認識によつて指導せられなければならぬ事由を極力示せるもので、平明なる倫理學書として、又生活指導の方針を述べた修養書として本書を推舉する。

(昭和一二、四、二〇 神田區駿河臺三ノ一 目黒書店  
菊判 三二〇頁 二・八〇)

大倉 邦彦 著

### 放處世信念

著者は大倉精神文化研究所の創立者で、又現に所長である。往年左傾思想の盛んであつた頃國民精神の頹廢を憂へて大倉精神文化研究所を創立して以來今日迄、日本精神の闡明のためにつくされてゐる。氏の眞摯敬虔な信念の前には誰し

も頭をたれざるを得ない。

本書は同題名のラヂオの連続放送講演の速記を主としたものであるが、尙この外に同じくラヂオの放送講演である「青年と勤勞生活」、及び警視廳工場協會主催の職長修養會に於ける講演「日本精神と産業」の二篇が加へられてある。

主篇たる「處世信念」について云へば、「世渡りの術は欲を去るに在り」「無我の奉仕」目標を高く持て、「世間は道場也」「修養」「臣民道」の六講に分つて自利即ち利他の精神と奉仕の精神を説き、高い目標を目指すべきことを教へてゐる。そして結論として著者の持論であり、又信念である臣民道に導いてゐる。臣民道と云ふのは、我等の一切の行動は、天皇の臣民であると云ふ自覺の下に於てのみ可能なのである。従つて我等の一切の社會生活は、皇運を扶翼し奉ると云ふ一點に集中されて初めて有意義なのであると説くのである。斯う書いて來ると如何にも理詰めの議論の様であるが、本書そのものは決して理論めいたものではなく、極めて平易卑近な例話の中に巧みにこれだけの理論を織り込んでゐる。特に若き青年諸子に必讀の書として推薦し度い。

(昭和一二、四、二九 横浜市神奈川區太尾町大倉山  
大倉精神文化研究所 四六判 一九〇頁・八〇)

春山 作樹 著

### 婦人世間道場

著者春山博士は東京帝大文學部教育學科の主任教授で、殊に日本教育史の權威であつたが昨年逝去せられた。本書は教授歿せられて後に出版されたもので、この方面の學者としては珍らしく著述の勤い同教授の最後の出版で、序に依れば本書の整理編輯は教授生前に既に完成されてあつたとのことである。

本書の内容は極めて實際的・通俗的に記された婦人の修養書で、大部分は一般雑誌に發表せられたものでその數二十一篇に及んでゐる。一貫したものではないので、その一つ一つについて内容を紹介することは到底出来ないが、全篇を通じて窺へる所では、婦人の天職は母として又妻としての仕事にあるので、又婦人の道場は家庭であると説いて居られる。これは決して新しい説でもなく、珍らしい説明でもない。寧ろ讀む人は、それでは從來云ひ古るされた舊式の道德觀念ではないかと云ふかも知れない。だが本書の場合さうではない。日本は明治大正昭和と、物質文明のみならず思想方面に於て著しく歐米の影響を受けてゐる。そして歐米の婦人道に就い

ても一應は批判しつくされ、そのとるべきは採り、國風に合

致せぬものは退けられなければならない。本書の著者が舊式と思はれる婦人道を、こゝに力説する意味はそこに在るので最初から古來の道德觀念の中に封じ込まうと云ふのではなく廣く歐米の思想を批判して見て、結局我が國民性から見て最も妥當と思はれる處に落ついたのが本書と見るべきである。

本書には婦人の天職としての母として、又妻としての心組みを親切に説き示してゐる。教養ある婦人としての言語・行儀作法に至る迄まことに細心に注意されてゐる。子供の躰けはその家庭の風格の現はれであるとして云つて子供の教育法に迄言及してゐる。それがすべて實際的な記述の仕方だ、抽象的な或は又學術的なと云つた様な所は全然ない。中に一篇「本邦に於ける祖先崇拜の形式及意義の變遷」と題するものがあるが、これが稍々哲學的の記述である。家庭に入つた婦人、これから家庭に入らうとする婦人には是非一讀をすすめ度い。

(昭和一一、五、二 京橋區銀座二ノ五 大日本圖書株式會社  
四六判 二九〇頁 一・〇〇)

嘉悦 孝 著

### 私の進言

著者は本年七十二歳、そして三十年來終始一貫「減私奉公」



を説いて來られた。本書は著者が常に婦人に向つて呼びかけてなされた講演、放送、その他談話、手記の類四十數篇を蒐録したものであるが、いづれも著者長年の持論である「怒るな働け」と云ふ滅私奉公の進言の書である。四十數篇を類を以て「國難に直面して」「私の筆記帳」「家庭への進言」「結婚、離婚など」「豫算生活」「勤儉貯蓄」「回想録」等に分つてある。

その一つ一つについての紹介はとても不可能であるが、例へば最初の「國難に直面して」と云ふ項目の下に收められた四篇について云へば、大體現下の時局と、この時局に對する婦人の進むべき路を指し示すことを目的としたものであつて、國産品愛用と云ふ極めて具體的な問題に及んでゐる。著者の最も強い主張である「怒るな働け」と云ふ滅私奉公の思想は次の「私の筆記帳」の下に收められた十數篇に最もよくつくされてある様である。以下の「家庭への進言」「豫算生活」「勤儉貯蓄」等の項は所謂家政に關する具體的の問題を扱つたもので、最後の「回想録」は今年七十二の老婦が、その娘の時代を回想し、母を懐ひ、祖母を追憶したもので、ヴェールを通して物を見る様に又となく美しい。別段本書には新しい説や方法やが説いてあるわけではない。然し今日の若い婦人の方々に本書の如きを沁々とした氣

持になつて讀まれることを薦め度い。屹度大地をしつかりと踏まえてゐると云ふ心安さが感じられると思ふ。

(昭和一二、一〇、二〇 神田區駿河臺二ノ四 明治書房  
四六判 三一二頁 一・五〇)

宮西 一積 著

### 報 德 讀 本

二宮尊徳に關する著書は、相當數多く出てをり、本協會において推薦したものも二三を數へるのであるが、今またこゝにあげる一書は、別の意味でそれらの書に伍する價值があるであらう。著者は中央教化團體聯合會主事であるが、本書「自序」の中で「現代的理解に立ちて、平易簡明に、しかも體系的に、其の全貌を傳へるものは殆んどない。本書はこの闕を満たさんが爲、世の切なる要求によつて特に述作した報徳道概論である」といつてゐるが、まさに「讀本」の名の如く、尊徳の全貌に互つて簡明に叙述した好箇の案内書である。多くの著述は何れかに偏するか、煩簡よろしきを得ないといふやうな嫌ひがあるのであるが、本書はその點においてまさにその闕を満たしてゐる。

本書の内容は序論「日本精神と報徳思想」、第一章「二宮尊

徳の生涯」、第二章「報徳の哲學」、第三章「報徳の生活」から成つてゐる。序論は、日本精神と報徳思想は、成生發展と云ふ根本思想に於て一致してゐることを述べ、報徳思想の諸特性が、日本精神の諸特性と一致してゐる諸點をあげてゐる。

「生涯」は極めて簡略に述べ、「報徳の哲學」と「報徳の生活」の二章に力を入れてゐる。「報徳の哲學」では「天道思想」「人道思想」「報徳精神」の三節に分けて大要を組織立て、説いてゐるが、報徳思想を説いたものとしては簡明出色のものといつていゝであらう。近代思想と結びつけることは兎角牽強附會を免れないのであるが、こゝでは殆んど目立たない。「報徳の生活」ではいはゆる仕法を主として説いてゐるのであるが、初めに「基本的生活」として、かの勤勞・分度・推讓の三綱領を説明し、それから仕法と結社の實際をあらまし説いてゐる。

右のやうに、本書は二宮尊徳の精神を一般に理解せしめ普及せしめるためには恰好の著述であると思ふ。

(昭和一二、七、一五 神田區錦町三ノ二四 弘文社  
菊判 一八九頁 一・二〇)

鹽入 亮忠 著

### 傳 教 大 師

### 本 多 綱 祐

本書を手にして第一に喜んだことは、著者に其人を得たことであつた、著者は自ら語つて、大正四年に傳教大師の研究に従ふことが、我が一生の仕事であると決心したと云つて居られる位で、爾來今日まで二十三年、一方ならぬ苦心を積んで來られたのである、就中大正十年の火災及び同十二年の大震災とで、續けて兩度蒐集の資料を焼失し、一時は研究生活を中止するの止むなきに至つたが、それでも屈せず弛まず、昭和四年から個人で「傳教大師研究」を發刊し、小冊子ではあるが既に二十卷まで出して居る、この間には随分紆餘曲折を免れなかつたであらうが、或は淺草寺執事長として、或は駒込中學校長として、或は大正大學教授として、實に繁忙極りなき間にあつて、尙能く其研究を續けられたのであつた、加之大師の遺迹は廣く東西に涉つて實地踏査し、曾ては遠い印度に赴いて釋尊の靈迹を拜し、近くは遙かに支那に渡りて天台山上に登り、傳教大師求法の迹を尋ねるなど、周到なる研究を重ねられて、造詣頗る深きものがある、元來著者は幼年にして天台宗に身を投じ、傳教大師の法孫として活躍して居られ、大師とは始めより深重の關係があるので、其研究の如きも進んで大師の教學を實踐に遷さんとする熱意を有して居



り、現在では大師傳記の著作者として最も適し、押しも押されぬ地位にあるのである、昭和十年の始め早くも大師傳著作のことが傳へられたので、望みを囑して發刊を待つたのであつたが、著者は尙も自重して研鑽を加へる爲めか容易に刊行を見なかつたが、漸く今にして蘊蓄を傾けたこの書に接し、安心して讀める傳教大師傳を得て喜びに堪へない。

本書は四六判で一頁四十三字詰め十三行、本文が五二二頁外に口繪序文目次年表等があつて全卷五八〇頁ある、章を分つこと二十九、長き章は數段に分つて讀み易からしめてある、これだけ量のある内容豊富な大師傳は、今度始めて出たのである、從來重んじられて來た三浦博士の「傳教大師傳」に比して一頁で字數百十一字を増加し、本文のみで百七十六頁を増加して居る。

大師の事蹟を、生涯の始めから入寂の終りまで、大體年代を追つて順次に細く記述し、大師の著書及び「叡山大師傳」「一心戒文」の如き、根本史料と云ふべき記事は最も忠實に詳かならしめ、更に研究を要する事項に就ては考慮を加へ、傳説の如きは採らないやうにして、出来るだけ正確を期して記述されて居る、然しながら大師を長く我が大師として尊敬し千年の時間の隔りも超え僧俗貴賤の別もなく、等しく親みを感じ忘れ難き所以のものは、大師の外面の歴史的事實よりも、

寧ろ内面の思想教學にあるのであつて、傳記としても其事思想教學が相離れずに記述され蹟を傳ふると同時に、並せてなければならぬ、故に著者は、この書に於て大師の思想信仰の進展と、大師の鎮護國家の眞精神を、その行迹を辿つて明らかにしたつもりだと云つて、大に大師の思想教學の方面に力を込めて居られる、名も求めず利も追はずひたすら正法を以て國家の爲めに盡くした大師の生涯と、其生涯を通じて専ら求めて止まなかつた正法とを、それ／＼の時期にまともて、努めて簡明に記述されたのは、全くこの著者にして始めて爲し得た事だと思ふ、從來傳記の一としてこゝまで至つたものはないのであつた、行文は必ずしも平易ではないけれども、あらゆる事項を極めて丁寧に掲ひ、要點は典據まで示して、全卷行届いて居る、大師を知る上にはこの上もない良書なりと信する、それに大師の信念及び其行動は、千載の下尙光輝ある教訓を我等に垂れ、國民的教養に資すること疑ひを入れぬ、廣く本書の世に行はるゝとを念願するものである。

(昭和一二、五、一 京橋區京橋三ノ四 日本評論社  
四六判 五四八頁 二・〇〇)

## 第二 歴史・傳記・地誌・紀行

仲小路 彰 著

### 圖說 世界史話大成

内容見本に依れば本書は全十一卷各冊菊判五百餘頁然も毎月配本とある。一人の著作として果してこの大事業が可能なものであらうかと云ふことを第一の問題として既刊の四冊を取上げて見て、初めてあなたがち不可能でないことを知つた。本大成は次の十一冊から成つてゐる。

- 第一卷 原始篇 第二卷 民族創世篇
- 第三卷 民族興亡篇 第四卷 科學篇
- 第五卷 文化史話篇 第六卷 藝術史話篇
- 第七卷 社會變革篇 第八卷 戰亂篇
- 第九卷 教育・スポーツ篇 第十卷 民族總觀篇
- 第十一卷 綜合年表圖譜篇

右の中既刊の第一、四、七、八卷だけに就いて述べれば、各卷がそれ／＼相互に補成し合ふやうに編纂されてゐる。例

へば第八卷の戰亂篇を見ると、古代から現代迄の東西の主な戰爭だけに就いて年代的に記述されてあつて、その政治的の意味、經濟的の聯關、文化現象との關係と云ふ様なことには多くを觸れてゐない。著者の序によるとこれ等はそれ／＼の卷に割愛して重複を避けたと云ふことである。故に全十一冊と云ふのも、實は一冊の大部の世界史を項目に依つて十一冊に分冊したと云ふ形式になる。従つて「嘗つて詩人であり作家であり、そして哲學者であり、然も二十年に近い世界史書の漁書狩讀から鬱然とたちあがつて現代日本の史學界に一大巨彈を投下した」(翁久九氏の紹介)、と云ふこの著書に見れば當然結果すべきものが結果して十一冊の本となつたと云ふだけの事で、そこに何等の不思議もないことと思ふ。

本書の記述は、詩人であり劇作家であり同時に又哲學者でもあると云ふ著者の、美しい文章と思索とが巧に混成されたものであつて、極めて平易に興味深く書かれてある。又書名に「圖說」と冠してあるだけに極めて挿繪に富んでゐる。故



に程度から云へば中等學校程度と云ふことが出来るが、こゝに本書を紹介するに當つては寧ろこれを一般大衆に薦めたい。と云ふのは本大成十一巻の中、何人がどの一卷を取り上げて讀んでも、それはそれだけとして充分の興味を以て讀み通すことが出来、然もその項目に關する限り一貫した知識を與へられるからである。本書に依つて與へらるゝ處は決して専門的な知識ではない。謂はゞ歴史の常識である。それだけに本書を廣く一般大衆に薦め度い。

(昭和一二、五、二二 第一巻發行 芝區琴平町二  
虎ノ門會館内 高志書房 菊判 各冊二・五〇)

辻 善之助 著

## 日本文化と佛教

本書も叢書「大日本圖書」の一編である。本協會において既に本書中の二三編を推薦して來たが、本書刊行の趣旨は「社會各般に互る知識を最も平易に而も正確に普及する意圖のもとに刊行するものである」といふ。本書はその趣旨に完全に合致するものであるといつてよいとおもふ。

辻博士が佛教文化史方面の研究の權威であることは今さら申すまでもないことであるが、その博士によつてこのやうな

通俗書の著作せられたことを喜ばざるを得ない。「日本文化と佛教」との關係交渉を見ることは、少くとも日本文化史或は日本精神史の上における最も大きな主題たるべきものである。日本文化の現在及び將來を考へる場合においても、過去における佛教との交渉を抜きにして考へられないものである。われわれは本書の意義或は價値を重視せざるを得ないのである。

本書は佛教傳來以後江戸時代に至るまでの佛教の變遷發達と共に日本文化の上に及ぼせる影響或は佛教と日本文化との融合の次第を平易明快に叙説せるものである。全篇を十五章に分けてゐるが、時代を追うてそれらの様相を仔細に物語つてゐる。それは如何にも専門家的に豊富に、いろ／＼文献を引用したりして説いてゐるのであるが、物語つて聞かせるといふ調子のものである。ところ／＼傳説や逸話の類を持ちこんだりして、讀んでまことに面白いものとしてゐる。多分讀者を意識してのこととおもはれるが、通俗向の史書として成功した所以であらう。各時代それ／＼に面白いが、流石に鎌倉時代以後となつて、日本佛教の實現以來特に目覺ましいものがあるやうにおもはれる。「鎌倉時代前後に於ける地方文化の發達と佛教」「室町時代地方文化の發達と佛教」など、こゝとさら注目されるやうである。

全篇を通讀してみても今さらながらわれわれは佛教と日本文化並に生活そのものと密接不離な關係におもひ及ぶのである。

(昭和一二、六、二八 京橋區銀座一ノ五 大日本圖書株式會社  
新四六判 二九四頁 一・〇〇)

大毎こども會編

## 歴史に 輝く支那事變物語

陸軍歩兵中佐 大久保弘一

小國民に對し支那事變を極めて懇切に説明した良書である。正確豊富なる資料を一貫した方針の下に手際よく編輯し小國民讀本として相應はしき堂々たる體裁を整へてゐる。

之を通讀してゐると、次々に展開される戦況の目覺しき経過から、そこに織り出されて來る幾多の忠勇美談、或は其の時々の當局の動き等が澤山の寫眞や挿繪など、共に恰もニュース映畫でも見てゐる様に力強く印象づけられて來る。何人も此の生々しく迫力のある内容に大きな感激と、勇奮とを覺えないものはないであらう。

讀んで行く中に今回の事變が正義日本の斷乎たる出師であ

り、日本魂の雄叫びであることが適確に理解される様になつてゐて、次代の日本を代表する小國民に優しくして而も力強い日本精神を育成する上に大いに役立つものと信ずる。今や事變は支那側の自暴自棄的抵抗と、諸外國の背後に於ける策動援助等によつて、長期持久戦に入り、之が解決は極めて困難なる状態に立ち至つたのみならず、事變を繞る東亞全般の情勢は愈々複雑となり、將來如何なる事態を發生するやも知れぬ未曾有の難局に際會し、帝國は東亞の安定として其の高遠なる使命を達成する爲には愈々堅固なる精神を以て舉國一致邁進を続けなければならぬのである。

之が爲には何よりも先づ日本精神を振起し、全國民が悉く第一線に立つの覺悟を以て、國家の全能力を發揮して之に當らねばならない。殊に東亞今日の事態は一朝一夕に發生したものではなく、過去數十年來の歴史的且國際的事情によることを考へたならば、之が解決も亦簡單になし得るものではなく、従つて帝國は將來相當長期間に亘つて、困難なる國家的試練を受けねばならぬことを覺悟することが必要である。

此の間の事情は、日本の將來を背負つて立つべき第二の國民にも今日から充分認識させ、その心構へを養つて置くことが肝要で、その意味に於ても此の種の書物は重要な價値を有つものである。



尙本書に盛られてゐる幾多の忠勇美談は、何れも精選せられてゐて感激深く、單に子供ばかりでなく大人にとりても甚だ有益なることは言ふまでもないが、唯惜むらくは戦場の美談や目覚しき戦況等のみが主になつてゐて、銃後の美談や熱誠なる後援の状況等に關する記事のないことである。

今次事變に於ける銃後の熱誠は眞に涙ぐましきものがあり之が戦場將兵の上に如何に強く反映してゐるかといふことを知り、又凡そ銃後の後援といふことが戦時事變に如何に重要なものであるかといふことを考へたならば、この方面のことを相當に取り入れることも、銃後の小國民を指導する上に於て一層有效ではなかつたかと思ふ。

何れにせよ、本書は小國民を對象とした事變關係の類の中では最も優秀なるもので、江湖に推奨して憚らざるものがある。

(昭和一二、一一、二〇 神田區神保町三ノ二 盛光社)

菊判 二五八頁 一・五〇)

上野 菊爾 著

### 東洋文化史概説

今「文化」並に「文化史」と云ふ言葉の内容を嚴密に詮索

すれば、本書が果して嚴密な意味での文化史であるかどうかにはいさゝか疑義があらうかと思ふ。即ち本書は主として支那の思想の變遷を述べたものであつて、あらゆる文化財を背景とする社會的存在としての人間の全般的の活動を對象としたものではない。だが著者の序の最初に斯う述べてゐる。「支那及び印度の文化は世界文化の内、自ら一特色を爲した。即ち支那思想は常識的實際的でその文化は道德的政治的方面に特色を發揮し、印度の文化は夙に宗教的方面にその卓越性を示し、上古既に偉大な宗教の成立さへ見た。然るに近世以降兩者共に政治的事情に支配されて、その思想は枯渴し文化史は滅亡に瀕するに至つた。云々」と、そこで文化史を狹義に精神文化方面のみを扱ふものと解すれば本書に示された方法は許されようと思ふ。殊に支那は徳治主義をモットーとし來つた國で、道德生活即ち政治生活と見てゐる國柄である。故に思想史中心の文化史は、あの龐大な地域を領する支那に關する限りある程度の効果を納め得るものと信ずる。唯、上古・中古・近古・近代史までは一貫して思想中心に述べ來つたのに、現代史篇に至つて急に政治史になつて了つたのは木に竹をついだ感がないわけでもないが、未だ完全に歴史の時代に編入されて居ない現代、國際關係を離れては如何なる國も單獨に存在し得ない現代、殊に「思想は枯渴し文化は滅亡に瀕

するに至つた」現代支那を語るには、本書に於てとられた方法はあながち難するに當るまいと思ふ。記述は平易で、僅か五百餘頁によく支那文化の中心をなす思想の要をつくしてゐる。唯純粹な思想史としては稍々常識的に過ぎる感があり、又純粹な文化史としては思想史に傾き過ぎたと云ふ難はまぬかれ得まいと思ふ。因に本書の大部分は支那に關するもので、印度についての記述は少い。著者は富山高専學校教授である。

(昭和一二、一、三〇 神田區神保町三ノ五 清教社)

菊判 五二〇頁 三・八〇)

小栗 襄三 著

### アツシリア學概説

アツシリア學とはメソポタミアを中心とする古代文化の研究を目的としてゐるもので、從來斷片的にはわが國にも紹介されてはゐたが、その全般を傳へたものがないので、こゝに十數年來斯學に従事してをられる小栗襄三氏が、全蘊蓄を傾けて本書を上梓されることになつた。氏は米國プリンストン大學の出身で、斯學の研究のため基礎語學としてヒブル語・アラミア語・シリア語・アツシリア語・アラビア語を收め、

更に斯學の大家についてその指導を受けられた。又親しくシリア・アラビアに踏査旅行をされた。不幸シリアにて病を獲て、メソポタミアへは行く機會を失はれた由であるが、氏が斯學に於ける研究の深さを十分窺ふことができる。十九世紀に入つて、諸科學が勃興すると同時に、一方、未知の世界に對する興味が喚起せられ、こゝに從來、人類によつて全く忘却されてゐた、古代文化の研究が着手されることになつた。その端緒をなしたものはかの不可解なる楔形文字の發見とその判讀であつた。本書はまづスメル・アツシロ・パピロニア楔形文字判讀の歴史を述べ、次に英・米・獨の發掘隊による一八四三年より一九三二年に至る間のメソポタミア遺跡發掘史が書かれてゐる。

次にこれらの楔形文字及び出土品の研究によつて、次第にその全貌を現はしたメソポタミア考古文化の全分野に互り、詳細なる考證・研究の結果が收められてゐる。

これが政治史・宗教概説・法律概説・美術概説の四部に分たれてゐる。政治史は資料として記念碑文・泥文書等の出土文獻・埃及象形文字碑文・舊約聖書・希臘・古典文獻によつたもので、歴代王朝の興隆變遷の推移を叙し、波斯の入寇にまで及んでゐる。法律としてはスメルの法律・カムラビの法典の詳細な紹介がなされてゐる。全卷を通じて豊富に寫眞版



が挿入されてをり、懇切な叙述と相俟つて本書を完全なものとしてゐる。

昭和一一、一、二〇 麹町區三番丁一 第一書房  
菊判 四三六頁 三・五〇

村田 勤・鈴木龍司共著

### 子を喪へる親の心

世に親の子に對する愛ほど純真なるものがあらうか。然もその純真さは愛兒を喪へる場合に於て、其の極端に達するとさへ思はれる。この場合に於ける哀愁の情は、到底尋常一様の慰藉の辭を以つて醫せらるべくもない。

子を喪つた人々が最も感銘するものは、嘗て同じ經驗に遭遇した方の衷心より發する同情である。その人達と膝を交へて共にその悲哀を語りつゝ慰め合ふことが何よりの慰安である。涙の泉の盡きるまで泣いて泣いて泣きぬき、そこから活動の元氣を回復し、生存する愛兒や社會人道の爲めに盡さんとする決心を奮ひ起すものも少くはない。

本書は斯うした際に於ける悲哀の極にある人々の手記、或は親戚知友から贈られた慰めの文章・詩歌・俳句を集められたものである。收められた人々は、現代の文士・名士多方面

にわたるもので六十名に達する。

人は本書の如きを不吉の書とするかも知れぬ。卒讀に堪へぬ書となすかも知れぬ。死兒の齡を數ふる愚痴の書とするかも知れぬ。恐ろしき書と云ふかも知れぬ。然し死は人生の免るべからざる運命である。さうしてこゝに記された六十氏はその一少部分にしか過ぎない。思ひのまゝを發表し得ない世の不幸の親たちに、より多く悲哀の情の切なるものがあるかも知れぬ。又悲哀の極、度を失して半生を無爲に、不幸に終る人がないとは言へぬ。しかも斯うした運命は、すべての人の前にその黒手をひろげて居るのである。

數千萬言を費して親の愛の眞實を語るより、本書の一節が切實に人の心を打つてあらうことは、敢へて贅言の要を認めまい。若しそれ未だ親としての愛の純真さに徹しない人、兩親の愛に餓えて居る人があるとするならば、本書によつて自らの愛を醜態させるがよい。こゝには國家社會を動かす眞實の力が横はつて居る。

昭和一二、三、一〇 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店  
四六判 四九三頁 二・〇〇

布村 安弘 著

### 明治維新と女性

和宮様を始めとして、例へば野村望東尼の様に或は松尾多勢子の様に、その他數人の女性が維新史を飾つて居ることはわれ／＼も知つてゐる所である。だが夫等の女性は多く維新史の表面に現はれ出で、所謂志士と呼ばるゝ人々と行動を共にした人達である。その外に志士の母として、妻として、娘として或は市井の單なる一女性として、人情の忍び難きを忍び、女の身には堪へ難い重荷を負ふてこの大仕事を達成せしめた、謂はゞ維新史の裏面を飾る人々の相當數多くあつただらうことは想像に難くない。著者はそれ等の人々につき相當廣い範圍に亘つて史料を蒐集し、明治維新と云ふ一つの歴史的過程の中に配してその事蹟を記し、以て本書一卷としてゐる。

著者は長野女子専門學校教授として女子教育に従事する、關係上、本書執筆の動機をこゝに見出して居られる様だが、特にその爲に事實を誇張して迄女性の領域を擴張しようとする様な世にあり勝ちな態度は些しも認められない。相當豊富な史料を用意され、その史料探訪の爲には遠く長州から福岡

邊まで態々出向かれ、又この仕事の爲には文部省より精神科學獎勵金の交附をも受けて居られることが序の中に見えてゐる。

記述は平易であるが、所々に蒐集された史料が原文のまま引用されてある。然しそれとて多くは日記や書簡で理解に困難を感じる様な所は少しもない。

終に本書の中に現はれた主な人々の名を記して見れば、和宮様は云はずもがな、野村望東尼、村岡局(近衛家の老女)、川瀬幸子、黒澤登幾子、松尾多勢子、梁川紅蘭女史、土御門藤子、坂本龍子(龍馬夫人)、木戸松子(孝允夫人)、税所敦子、杉瀧子(吉田松陰母)、有村蓮子(海江田信義母)、藤田里子(東湖夫人)、梅田信子(雲濱夫人)其の他二百餘名に及んでゐる。

昭和一一、二、五 京橋區銀座西二ノ一 立命館出版部  
菊判 二九六頁 二・五〇

伊達 牛助 著

### 伊能忠敬

著者は伊能忠敬の郷里佐原町における佐原中學校に地理の教師として三十餘年間勤続せられ、忠敬先生の偉業に衷心傾倒せられてゐる方であるといふ。本書は伊能家主人の遺志に



より、忠敬先生事蹟案内書として編述せられたものである。

伊能忠敬に關する最も正確な記述は

『伊能忠敬理學博士長岡半太郎監修(帝國學士院藏版)』であるといふ。この書は大部分伊能家所藏の材料から採録したものであり、大判八百頁もの大著であるが、不幸震災のため今は絶版になつてゐるといふ。「本書内容の大部分は彼の書に基き是れに自分の調査した事項を附記して著した」ものであるといふ。

本書は十二編に分けられてゐる。初めに年譜・家系等を掲げ、第二編乃至第九編は生立より卒去に至る傳記であり、第十編は頌徳に關する事柄、第十一編は忠敬の人物・所藏の器具・著書・師友門弟等に關する記述、第十二編が結論といふやうになつてゐる。記述の體裁は全く案内書風であつて讀物形式を完備してはゐない。資料を適宜簡單に採録し、事の次第を正確に簡叙するといつた形式をとつてゐるが一見無味の如くしてさにあらず、簡叙せられた文字の間を入念に讀めば興味津々として盡きざるを覺えるのである。畢竟事實のもの無限の興味と感動である。

人も知る如く五十一歳にして三十二歳の師について學び、五十六歳最初の蝦夷地測量より七十四歳死に至るまでの十八年間、足跡日本全土に遍き大測量の至誠奉公努力忍耐のほど

は、まさに懦夫をして起たしめるものがある。

本書は忠敬先生事蹟訪問の人々への案内書として著はされたものであるが、弘く一般の人々に推奨して、このわが國の生める偉人を周知せしめたいと思ふのである。

(昭和一二、五、一七 神田區駿河臺二ノ一〇 古今書院  
四六判 一七二頁 一・二〇)

小林 勇 編

### 回想の寺田寅彦

本書には六つの回想記と外に看護婦の記録した病床日記、それに告別式に於ける諸家の弔辭が收められてある。六つの回想記と云ふのは、最初に「家庭に於ける寺田寅彦」と云ふのが、之には「御家族の方の談話筆記」と編者の註があるが、恐らく未亡人の語られたものと思はしく、家庭に於ける博士が誠によく描き出されてゐる。次には博士初期の隨筆「團栗」の中にも現はれてゐる長女に當られる森貞子氏の追想談「父の追憶」、令姉別役駒子刀自の談話筆記「寅彦の幼時その他」、令甥伊野部重彦氏夫人の「寺田の叔父さん」等近親の方々の追想談筆記が載せられてある。殊に親子程も年齢の違はれる令姉駒子刀自の追懐談には何となく目頭に熱いも

のを感じる。次の「學生時代の寺田寅彦」は土佐一中時代からの交友である間崎純知氏の談話、次の「御病室にて」は博士から大變に可愛がられたと云ふこの本の編者の小林氏の追憶文で、之は雑誌「思想」の寺田寅彦追悼號に一度掲げられたものである。平凡と云へば平凡であるが、穩やかな博士の人柄が小氣味よく浮び上つて洵に面白い本である。

(昭和一二、九、一〇 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店  
四六判 二八四頁 一・五〇)

玖村 敏雄 著

### 吉田松陰

「讀書尙友君子の事也」と士規七則にいひ、詩に「讀破す五車の書、英雄古より雨り」といひ、幽室文稿には「浩を養ふは讀書に在り」ともいつてゐる、松陰は讀書家であつた。日本逸史を讀み終つた時「時に蚊群屯を爲し、従つて揮へば従つて來る。而して孤燈獨坐眼魚の如し。卷を掩ふて快を稱す」と記してゐる。以てその讀書の有様が察せられやう。松陰は屢々獄裏の人とならねばならなかつたが、彼にとつて獄舎や幽室は決して呪ふべき苦難の場所でなく、寧ろ感謝すべき讀書の學び舎であつた。「後幸獄に投するを以て始めて頗る讀

む」などといつて、これ幸とばかり獄中で盛んに讀書してゐる。

しかも、松陰は、また一方に於て、如何に學問讀書をして、その心事・目的が誤まつてゐるのでは無益有害であるともいつてゐる。即ち彼の二十七歳の時に書いた「講孟餘話」に於て「今の士大夫學を勤むる者若し其志を論ぜば名を得んが爲と官を得んが爲とに過ぎず。然れば功效を主とする者に於て殆んど義理を主とする者とは異なり。思はざるべけんや。嗚呼世に讀書の人多くして眞の學者なき者は學を爲すの初其志已に誤ればなり」といひ、「更に名利の爲に初めたる學問は進めば進む程其弊著はれ、博學宏詞をもつて紛飾すと云ふとも、遂に是を掩ふこと能はず、大事に臨み進退據を失ひ節義を缺き、勢利に屈し醜態云ふに忍びざるに至る」と極言してゐる。然らば松陰は何の爲に讀書すべきであるとするか。曰く「人と生れて人の道を知らず、臣と生れて臣の道を知らず、子と生れて子の道を知らず、士と生れて士の道を知らず、豈耻づべきの至りならずや。若し是を耻づるの心あらば書を讀み道を學ぶの外術あることなし」と。そして「朝聞道、夕死可矣といふはこれなり」と教へてゐるのである。

これを別の言葉でいつて見れば、讀書は單なる知識を得ることのみを目的とすべきでなく、實踐的な人間の體系を作る



爲にするのでなくてはならぬのだといふことになるのであらう。

進んで、然らば如何にすれば讀書によつて人間の體系を作ることが出来るであらうか。

思ふに、その爲には、先づ心に内面的な問題を持つことである。換言すれば、學ばずには済まされない、讀まずには済まされないやうな切實な問ひを心に持ちつゝ、學び讀むのでなくてはならない。覺える爲に讀むのでなくて、人間になる爲に、人間として正しく生活する爲に讀むのである。讀んだことは忘れて了つても、いざといふ時に、その人間から生れ出て来るやうな讀み方でなくては眞の讀み方ではないと思ふ。

同じく講孟餘話中に「師を求めざるの前に先づ實心定まり實事立つて然る後往いて師を求むべし。凡そ學を爲すの要皆爰にあり。思ふことありて未だ達せず、爲す事ありて未だ成らず、是に於て憤慨して學に志し、而して師を求む。是實事ありといふべし。師を求めて後學び、學びて後行ふ、是皆虚事なり」と師道を論じてゐる。稍々前述の意に近いのであらうか。

實に青年を教育するの要諦は、青年の内面的な問題——生命の問ひに答へを與へてやることにある。かゝる問ひのない所に知識を與へることは、徒に物識りを作り得ても、實踐的な人間を作ることには出来ない。そして讀書がかくの如き意味で

人間を作ることには立派に役立つた實例をわが松陰に於て見ることが出来るのである。

無論松陰傳のわれ／＼に教へる所は決してこれのみに止るのではない。只こゝに「讀書」語上に本書を紹介するに當つて、特にこの點に深い興味と意味とを感じないわけに行かない。

(昭和一一、一二、二〇 神田區一ツ橋二 岩波書店  
四六判 三九七頁 一・五〇)

坂本 直行 著

### 山・原野・牧場

昭和の十年頃であつたか、神田の梓書房から「山」と云ふ品のよい趣味の山岳雜誌が出て居た。この雜誌は二年半程續いて惜しいことにも廢刊になつたが、この雜誌に坂本氏は一年餘に亘つて毎月「或る牧場の生活」と題する文章を寄せて居られた。筆者などは毎月待ちかねるやうにして之を樂しみ讀んだものであつたが、それは北海道は日立の山裾に牧場を營んで居るこの著者が、大自然の中に融け込んで行くやうな素朴な牧場生活を、それこそ何のけん味もなくすらすらと書き綴つたものであつた。如何にも素朴で然も詩情の溢れた山の生活が、時には苦痛と思はれる程の強い魅力を以てわれ

われに迫つて來たのであつた。この「或る牧場の生活」を一冊の本にまとめたのが「山・原野・牧場」と題する本書である。すべてさきに記した、山岳雜誌「山」に掲載されたものである。

著者は札幌二中から北海道帝國大學の農學部に遊び、その山岳部では北海道の、ことに日高の山の開拓者の第一人者であつたと云ふ。卒業してからすつと、日高に牧場生活を送つて居られるので、謂はゞ、生粹の道産兒と云ふ所であらう。従つて北の國の人情風俗、寒さに向つていよいよ冬の仕度にかゝらうとする頃のもの寂しさ、雪が消えて春立つ頃の落ちつきのない氣持などが、まことに氣持ちよく描き出されてゐる。挿繪も著者自身の手になるもので、裝幀も恐らくは氏の手になつたものと思はれる。牧場で自給自足の生活に馴れてゐる著者が自給自足で本を書いたと云ふ形である。北海道の風物を本書によつて獲ようなどと云ふ巧利的な考へを離れて本書の中に盛られた素朴さと詩情とが較度讀む人の胸に訴ふるものがあらうと思はれる。

(昭和一一、四、二〇 四谷區坂町七八 竹村書房  
四六判 二三二頁 一・二〇)

小倉 章 宏 著

### 今日の支那

今次支那事變によつて支那は果して何處へ行くかは輕々に豫斷を許さぬ。だが將來の支那は過去及び現代の支那の延長である限りこれを不問に附する譯には行かない。

本書は今次事變の初期に於て、著者が長年に亘る支那研究の成果を、「今日の支那」を中心にしてまとめられたものである。

この書に於ける著者の意圖は日支關係の悪化を憂ひ、一刻も早く、根本的に肚を決めて日支關係の再建に取掛らねばならぬ。それには支那の現状を直視して、その實體を把握し、日支の關係は何故恚う迄悪化したのか、支那各般の現状は如何、北支問題の重要性とは如何なる事を意味するか、歐米列強は、支那に對して如何なる立場にあるか、而して、支那將來の動向は如何

と謂ふやうな點について著者の觀察を述べたものである。

支那問題についての明確なる見透しをつけて居る圖書は寡聞にして見當らない。だが日本を中心とする一方的の見方だけに終始することの不當であることは言ふを俟たない。此處



に支那人の正しき日本観が必要であると共に、日本人の正しき支那観を必要とするのである。

暴支膺懲の聖戦は今や我に有利に展開し北支五省は皇軍の治下に明朗な天地を迎へんとして居る。爲政者は勿論、國民大衆は速に善後の工作に邁進しなければならぬ。

(昭和一二、八、一〇 小石川區宮下町 東興社  
四六判 四九二頁 一・五〇)

神田 正雄 著

### 躍進支那を診る (中支から南支へ)

曩に本會によつて推薦された「上海より巴蜀へ」「滿洲から北支へ」に續く最近支那研究の三部作の一である。

殊に本書の内容をなすものは民國の心臓部と稱すべき上海を振り出しに、首都南京を経て揚子江を遡り、漢口を視察して、更に江南に入り兩廣を訪ふたものである。

一知半解の支那通の旅行記と異なるのは三十有年以來の支那研究家であり、多數の支那人先輩知友を持ち、個人の資格で支那人と意見の交換の出来る點にあるであらう。今回の旅行中にも財政部長の孔祥熙、駐米大使の王正廷、中央委員陳立夫、大公報主筆張熾章、救國日報社長龔德柏等所謂歐米

派の要人と會見して居る。殊に西安事件の前後に於ける現地要人の動き等が相當つき込んで見られる。

著者は四十年間の支那研究の結果を總括して、第一期は團匪事件後の躍進期、第二期は武昌の革命を切っ掛けに、清帝を退位せしめ帝制を廢して、新に中華民國の構成せられた時代、第三期は蔣介石の北伐成功の後、滿洲事變の勃發の刺戟と國內統一の趨勢とによつて統一の曙光が極めて濃厚になつた時代として居る。

民國は今や著者の所謂第三期を發見して居る。著者はこの躍進途上にある支那觀察を綜合し、その弱點として次の六つを擧げて居る。

- 第一 支那の統一が全きを得て居らないこと
- 第二 財政の基礎が尙ほ確立して居らぬこと
- 第三 天災地變に對する防禦設備が何も出来て居らないこと
- 第四 産業が未だ幼稚の域を脱して居らないこと
- 第五 建設資金は之を外國に仰ぐより外に途のないこと
- 第六 支那の軍備は到底外部に當るに足らないことを認識して居ること

斯うした支那の弱點なやみに對する日本の態度、使命に就いては東亞の先進國民としての日本人が深く思ひを致し、そ

の協力に努力すべきであらうと述べてゐる。

右様の觀點から見られた中支・南支観には著者独自のものが尠くはないと信ずる。印刷・挿圖等には一段の工夫を希望せざるを得ない。

(昭和一二、六、一 淀橋區下落合三ノ一、三六七 海外社  
四六判 三五三頁 一・五〇)

澁澤 秀雄 著

### 熱帯の旅

「ワンサン・ワン・ゴツホ」といふ畫人が南佛アル、へ汽車の旅をしたとき、彼は硝子窓に額を押しあてたまふ、窓外に移りゆく景色に驚喜しつゞけたといふ。僕も自分の周圍に消長する出来ごとに、この畫人のやうな感激を見出してゆきたいと冀つてゐる男だ。……と思ひがけなくこの四月から二月ばかり熱帯といふ汽車の窓から、珍らしい風物を僕の目のまへに展開し出した。僕はゴツホに見倣つて硝子戸に額を押しあてた。そしてその所産がこの『熱帯の旅』なのである。」と

著者はこの本の序に書いてゐる。上海・香海・シンガポールまでは船の旅、シンガポールからバンコック・アランニヤまでは汽車の旅、アランニヤからブノンペン・サイゴンまで自

動車の旅、サイゴンからハノイまでは汽車による。

海峽殖民地・シヤム・佛領印度支那といふ諸地方を、珍らしいものを漁つて歩いたのんきな旅で、椰子の杜が靜かな海に投影する南洋風景から、鰐のゐる馬來カハンの川、ショホルの奥地、虎巨象等猛獸の出没する密林の旅行である。殊に「ジャングルの亢奮」と題する一章は猛獸の狩獵のスペクタクルスで、猛獸映畫をみるやうな手に汗を握せらる場面が展開されてゐる。また實際にも、チャング・ランゴ・ベンガルの東、プリング・エム・バツク・アライブ等の有名なジャングル映畫の助力者であるバサバ氏とシンガポールで會つてそのトリツタについて面白い話を傾聴してゐる。

讀者は著者と共に、西貢・河内・夢幻境アンコール・シヤム等の熱帯の町々を見物して歩くことが出来る。著者が繪を能くするだけにその叙述はパノラミックであつて、大いに快哉を叫ばずには居られない場面が多い。

(昭和一二、一、二〇 神田區淡路町二ノ七 岡倉書房  
四六判 二六三頁 一・六〇)

齋藤 清衛 著

### 東洋人の旅

本書は特異な國文學者たる著者の特異な歐羅巴紀行であ



る。「哈爾濱の朝」より始まる「ロシア横断記」、ポーランドを通つて獨逸に入り、ベルリン滞在の「ベルリン記」、北歐フィンランドに遊ぶ「北歐遊記」、「北歐よりドイツへ」、再び歸つて「西南ドイツの町々」を見、オーストリアを通過してイタリーに至る「南歐紀行」、更に「佛白を巡りて」英國に渡り、ロンドン・アイルランド・スコットランドの旅を終へて再びロンドンに歸り、アメリカに渡らんとするまでの紀行である。アメリカ記は他日を期して書くといふ。

「すでに何十種と出されてゐる歐米巡遊記の中ではこの貧しい紀行すら、なほ、特質を有するものであることを私かに自惚れざるを得ません」と著者がその「序」でいつてゐる。その「特質」とは何であるかといふと、同じ「序」のはじめでかういふことをいつてゐる。「今までの多くの旅行者がして歸るやうなあの名所遊覽式の歐洲旅行はこの際見なほしてよい點があるやうに思ひます。考へるとそれは餘りに歐米文明を恐れ、今一つには洋行と云ふやうなあり來りの概念に自分をくくりつけてしまつた弊によるものではありますまいか。

——歐米の人情風俗文化等を視察するためには、もつと本當に自分の目で見てくる機會を作ると云ふ覺悟が必要だと信じます。」この著者の目で見るといふのは、既成の概念に捉はれないといふ意味も無論あるのであるが、この著者の場合、出

來るだけ乗物を用ゐないで歩いて細かに物を見るといふこともあるのである。「觀察が濃かである」といふことが、この本の他に容易に見られない著しい特色の一つである。それから一つの著しい特色は「フィンランド、ブルターニュ、アイルランドの旅は特に私をして興味を懐かしめた地方です」といつてゐるやうに、日本人のあまりに行かない地方、而も努めて田舎を見て廻るといふことである。これはおそらく著者の人生觀に結びついてゐることであらう。本書においても著者は至るところで文明批評風の感想を漏らすのであるが、これなども本書の特色といつていゝかとおもふ。著者はロンドンの街の中でも地圖をたよりに歩き廻り人が數ヶ月を要するところを數日で大體の案内を知つてしまふ人である。南歐の草原で長時間寝ころんで異國にあることを忘れたり、アイルランドの片田舎の驛で若い驛長が鶏を追ひ廻すのに見とれたりするあたりは、やはり著者の面目が最も躍如としてゐるやうである。

本書を推薦する所以は以上の如き特色を有する紀行としてやはり知識階級の人たちの讀物といふべきであらう。

(昭和一二、五、二〇 日本橋區通三丁目 春陽堂 四六判 四三八頁 一・八〇)

### 隈部 一雄 著

#### どらいぶうえい

滞在中、歐洲大陸を縦横にドライブした著者が、歸朝後其の見聞録を纏めて出版したものが本書である。断片的には嘗つて新聞雜誌等に發表されたものであるが、寫眞スケッチなどが加へられ一層完備したものになつて居る。内容は旅行記・感想等が主で、著者は主として居る伯林にかまへ、瑞西・伊太利・丁抹・瑞典等へドライブして居る。別に目あたらしいヨーロッパ案内記ではないが、其の觀察はあかるい氣品のあるものである。

歐米では自動車旅行の壯快、便利な事が一般によく知られて居るので自動車専用道路の如きも何處の國でも盛に作られ就中ロンドン—コンスタンチノール間の自動車道、モンブランの腹を穿つて佛伊をつらぬく自動車トンネルは人の知る所で歐米人が相當の距離を自動車で旅行する事は稀ではない。

我國では未だ道路も不完全であり、一般に左程自動車に對する關心をもたず、遠距離の自動車旅行をこゝろみる者は少い。従つて自動車旅行の見聞記などあまり見あたらず。著者

### 大塚 虎雄 著

#### ナチ獨逸を往く

勞働ロシア、ナチ獨逸、ファツシヨイタリーの諸國はいろいろな意味において現在世界注視の的となつてゐるところであらうが、われ／＼日本人も切にその真相を知りたいとおもふ。そして知りたいのは、その「精神」やイデオロギーといふやうなものよりか、むしろその實情である。

本書はその著者と書名に見ても、レポート風の軽い讀物であることが豫想されよう。著者は東京日日新聞特派員としてナチス政權成立直前に獨逸に行き、その後三ヶ年滞在中、特派ニュースを送る傍、本書中の諸文を書かれたのである。従つてこれらの諸文はナチ獨逸のいろんな側面からのレポートであり簡単なスナップに過ぎない。しかしそれだけにまた、實際に動くナチスの面貌を此處彼處いき／＼と捉へて



ひるといふ反面の効果もあるのである。最初の一文「神聖ヒットラーの誕生」から「ドイツ女性氣質」「智謀ゲッペルス」、さては「ヒットラー氏の山莊を訪ふ」といふ紀行文などに至るまで、いかにも新聞人らしいきび／＼した筆で、巧にその風貌や氣分を書き出してゐる。

われ／＼は本書を通讀して、その後の獨逸の情況は知り得べくもないのであるが、かなり劇的な複雑多面なナチス政情並にその方向をも窺ひ知り得るやうな氣がする。本書のそこ／＼に見えてゐるのであるが、中でも「ナチス經濟とシヤハト博士」の一文などは、シヤハトその人の政治的社會的意義をおもひ偲ばせると同時に、ナチス政治のそれを暗示するものゝ如くにおもはれる。ナチスの主義綱領は今後幾多の變容を呈して、實際政治上に現はれて行くことであらう。それが實際政治の進化過程として一般的なことであらうが、いかなる國の政情にも増して、獨逸はジグザグの道を辿るのではないであらうか。本書の中には勿論それらの見透しがあるわけではないが、われ／＼讀者はそのやうな豫感をもつものであり、それにつけてもその後の實情を知りたくおもふのである。

(昭和一一、一二、一三 牛込區新小川町三ノ一四 亞里書店  
四六判 二一三頁 一・〇〇)

解に對して有害である。

この意味に於て、この書の讀書界へ與へた意味は非常に大きいのである。高度の知識人にまでもてはやされてゐる理由は、充分にあるのである。勿論この書の中には、著者の批判が自由に示されてゐる。またこの著者の見解が、獨斷であると思はれる點がないでもない。従つてジードの旅行記に憤慨したソ聯の指導者たちが、賛成するやうな見方では決してあるまい。しかしこの著者の軍人らしい率直さと眞剣に、ソ聯を探訪しようとするを、自己の職分とするところから生ずる判斷力の所産とは、必ずや大きくべき點がソ聯の當局者にも多々あるに違ひないと思ふのである。

本書の特徴は書き方が極めて具體的で、全篇が多くのエピソードと數多の實例をもつて埋められてゐる點である。實例によつて社會主義統制經濟の姿が映し出されてゐる。それは生き生きとした現實感を讀者に與へるに違ひない。そして著者の見解に賛成であると、必ずしも同感出來ない者であることを問はず、ロシアに對する興味を感じてあらうと思はれる。この點はこの本の最大の効果である。

内容は「ソ聯の正しき認識のために」「ロシア人を憶ふ」「移り行く市民生活」「變る農村」「現地に見る專制政治」「憲法改正の意圖」「赤軍とところどころ」「ロシアはどう動く」の諸項

秦彦三郎氏 著

### 「隣邦ロシア」真相記

尾崎秀實

秦大佐の「隣邦ロシア」くらゐ近頃讀書界にもてはやされてゐる新刊書はあるまい。新聞や雜誌の良書推薦の個所で、知名の知識人がこの書を賞讃してゐるのを屢々見受ける。

何人も陸軍大佐・陸軍省新聞班長の肩書から想像して、軍服の肩を張り剣をがちやつかせた議論を想像しながら、第一頁を開くに違ひないのである。さて讀み行くにつれて、そこに見出すのは、浴衣がけでうちくつろいだ一人のロシア通の姿である。それは眞に親切で面白い話しぶりなのである。

大佐はこの二十世紀における最大の驚異であるロシアの發展の姿を、つぶさに十數年間親しく觀察して來た人である。今日ロシアに對する國民一般の關心が、これ程高まつて來てゐながら、日本國民のロシアに對する知識は、まことに貧弱なものである。あるものは、ロシアに對するむき出しの敵意と惡意に満ちた歪曲か、無條件にうのみにされた地上の天國としての描寫か、いづれかである。それはともに、眞實の理

目に便宜的に區分されてゐる。「移り行く市民生活」の項は一つ／＼著者の切實な日常の生活體驗をもつて描かれてゐるので、ことに興味深きを感じる。

「ヴエイトロシアの軍隊内部のことにふれた「赤軍とところどころ」は、流石に他のロシア觀察者のかつて示し得なかつた適切などころを衝いてゐると思はれる。赤軍五人男——ウオロシロフ、トハチエフスキー、ブリユツヘル、ブジョンヌイ、エゴロフ五元帥——のことが書いたところなど、一般讀者に特別の興味を覚えしめるであらう。

著者は取り立て、ロシアの恐るべきを誇張して、これに對して準備せよと、絶叫するやうな方法をとつてはゐない。しかしながら軍人としての著者の意圖が、なるべく正確にロシアの眞相を國民の前に示して、かゝる實力ある國家と抗爭する必要の生じた場合に對する用意と心かまへとに、注意を喚起しようとするにあつたことは明らかであると思はれる。

(昭和一二、三、一〇 神田區小川町三ノ五 斗南書院  
四六判 三六五頁 一・三〇)



關口 泰 著

時局政治學

東京朝日新聞論說委員たる著者が最近二三年來新聞や雑誌に書いた政治時論中、内閣制度と議會制度、選挙法改正と貴族院改革及び中央地方の行政機構問題等、時々起つた實際政治の諸問題の論評を集めたものである。

「讀書」第七十回に紹介した宮澤氏の「轉回期の政治」が學者の筆になるが故に、主として政治形態の歴史的發展のありさまを原理的に考察し、従つてその普遍相を見るところに特色を見出し得るものとすれば、本書はジャーナリストとしての著者が、現代政治機構を實際的に論評し、従つて具體的的特殊問題を多く取扱つてゐるところにその特徴が認められていであらう。

二・二六事件以來非常時局の展開に伴つて、一時日本國民の政治的關心は異常に緊張し來つたかに見えた。が、しかし

それは實は不安に怯えた感情の現れに過ぎなかつたのであり、眞に國民的自覺に基いたものではなかつたから、やがて時と共にさめて來て、この頃ではもう大分政治問題にも飽きて來た形らしい。

昨今所謂官僚獨善主義政治の弊が屢々問題とされるやうになりつゝあるが、それには國民の政治に對する理解力と批判力の缺乏が大きな原因となつてゐることを思はねばならない。それは國民が知らないのではない。知らされないのだといふものがあるかも知れない、恐らく、それもあらう。だがわれわれはそれを自分がまい種だとは考へられないかと、一度問ひ度いのである。無論、今日の政治は愈々複雑となり、専門化する傾向にあり、一人の國民として政治の全部を知り盡すことなど思ひもよらぬ。しかし、われわれは國民としての生活面で、多かれ少かれ、必ず現代の政治とかゝはりを持つてゐるのであるから、少くともその限りで、現代の政治問題を眞剣に考へて見る必要があるといはなくてはならぬ。本書に取扱はれてゐる程度の問題は、その意味で日本國

民の誰でもが一應は考へて見なくてはならぬものだと思ふ。

(昭和一一、一二、二〇 麹町區丸ノ内二 中央公論社  
四六判 五〇〇頁 二・〇〇)

馬場 恒吾 著

立上る政治家

畏くも 明治天皇によつて確立せられた立憲政治である。それは飽くまでも守られなくてはならない。苟しくもこれと相容れない外國的なファツシヨ政治は斷乎として排斥されなくてはならない。それは日本國民たるものゝ奉公であり、忠誠である。

この頃、わが國の政治的動向に就て、國民の立場から勇敢にもものを云ふ批評家が少くなつたやうに思はれる。殊にアカデミックな立場の人々が、極く少數の例外を除くならば、近頃まるで唾の如く沈黙を守つてゐるか、或は動もすれば要領のいゝオツボチユニスト振りを發揮してゐるのは齒がゆい極みであるが、かゝる時勢の中にあつて本書の著者が、終始立憲政治擁護の爲め堂々筆陣を張つて一步も譲らず、ファツシヨ的思想排撃の爲めに果敢な闘を續けて呉れることは、意を強うするに足るのである。

本書は著者が二・二六事件この方書かれたものを集めたもので、議會か獨裁か、議會政治論、政黨論、獨裁政治論、軍部論、官僚論、廣田内閣論、庶政一新論、世界の日本、英國の研究、知識階級論、二・二六事件の十二章からなつてゐる。

この著書のものを読んで、いつも特に感じることは、この著者が時勢に對して實に無遠慮にものがいへる人だといふことである。といふのは、時局批判で相當辛辣なことをいつたり、人物評論でかなり人の痛いとこゝろに觸つたりしても、それがこの人の言葉である限り、徒らに相手の敵意反感を煽ることがないらしく見えるのである。これは恐らくこの著者の性格の野趣とでもいふべきものゝ徳によるのだと思はれる。これは何でもないのであるが、實は甚だ重要な意味を有つてゐるのである。何故なら、このことの故に、この人は他の人の言へない事も云へるし、他の人が云つたのでは相手に聞かれない事を、相手に聞かせるからである。そして、これによつて反對の立場の者をも反省させる機會が望まれるのである。出來るだけ多くの人が、この著者の言論を聞いて、そして敵も味方もなく、共に與に日本國民として日本の政治の正しき進展の地盤となつて欲しいと思ふ。

(昭和一二、二、五 麹町區丸ノ内二 中央公論社  
四六判 四六二頁 一・七〇)



宮澤 俊義 著

## 轉回期の政治

我が國體の下に於ては、ファツシヨ的獨裁政治は斷じて許さるべきではない。政府は常に正しき立憲政治の實現を國民に約束して、その意を表明してゐるのであるし、軍部も一部國民の誤解にもかゝはらず、その指導精神が決してファツシヨ的のものではない旨を折にふれて聲明してゐるのである。それにもかゝはらず、國民の多くは今尚ほ我が國の政治形態が議會政から獨裁政へと轉向の過程を辿りつゝあるものと信じてゐるらしい。政黨の或るものが、今次の總選舉に際し特にファツシヨ排撃のスローガンを掲げてゐるのは正しくこの事實の反面を示すものに他ならない。

こゝに「轉回期の政治」と云はれるのも、もとよりその意味である。そこでこの著者はこれを我が國政治の危機と認め、本書に於てその科學的な分析を行つて、國民の危機的政局の認識に資せんとするのである。

實のところ、所謂獨裁政を謳歌するものにも、またそれを排撃せんとするものにも、獨裁政の本質はまだはつきり把握してはゐないと思はれる。獨裁政はしばしばその自から否定す

二八

る筈の民主的扮装を身につけて現れる。しかし、如何に上手に扮装をしてゐても、扮装は所詮はんものではないのだ。眞實を求めるものはかゝる扮装をとりつけてその素顔に直面しなくてはならぬ」とこの著者はいふのである。

第一章「轉回期の政治形態」に於て、獨裁的政治形態の本質、その理論の民主的扮装並に議會制の凋落を述べ、第二章「轉回期の政治因子」として、官僚の擡頭、政黨國家から政黨獨裁への過程、政府と政黨との關係を考へ、第三章「轉回期の政治改革問題」として、行政機構の改革、貴族院の改革を論じ、第四章「轉回期のヨーロッパ政治」ではフランスに於ける國家的草論、國民革命とドイツ憲法等を取扱つてゐる。示唆するところ多き好著である。

(昭和一一、一二、二〇 麹町區丸ノ内二 中央公論社  
四六判 四〇一頁 一・八〇)

波多野乾一 著

## 時代支那の政治と人物

第一次上海事變以後より西安事件以後に至る五ヶ年間に於ける支那の政治情勢を相當詳細に記述したもので、左の九章から成つて居る。

上海事變後の政治情勢—福建革命の輪廓と動向—五全大會まで—支那ファツシステイと蔣介石—北支那局勢の考察—日支關係を検討す—中國共產黨、軍の研究—高漲する抗日聯合戦線—西安事件と國共兩黨の再婚  
本來隨時各雜誌に支那時事解説として記されたものの中から選擇編輯されたものであるから隨所に重複がある。又新聞電報等を基礎としたものであるから、判斷の過誤のあることも著者自ら認めて居る。

しかしそれ／＼の事件を平明に解説せんとする著者の執筆の用意は看取するに難くない。但し多くの内容をこの一書に盛らんがためにあまりに詰め込み過ぎたために、讀みづらい感と與へるのは惜むべきである。

(昭和一二、八、二〇 芝區新橋七ノ一二 改造社  
菊判 五六二頁 二・五〇)

大倉精神文化研究所編

## 祭政一致と臣民道

「祭政一致」と云ふ言葉は、林内閣成立以來頗る一般化された。然し本書は決して林内閣の政綱發表に刺戟されて出來たものではない。

大倉邦彦氏を設立者とし又所長とする大倉精神文化研究所は創立以來日本精神の闡明の爲につくさるゝに年あり、本書の編纂の如きも既に一年以前より研究に着手されたとのことである。昨年二月に編纂出版された「神典」は即ち本書の先驅であつて、神國日本の根本原理の闡明には正に基礎的要素であつたのである。本書は「神典」を敷衍して祭政一致の國體を明徴にし、臣民道を確立して世に問ふたものである。内容は二編に分たれてゐる。第一編は原理編であつて、神人不二神皇御一體の理によつて、現御神であらせらるる天皇の尊嚴を述べ奉り、皇運を扶翼し奉ると云ふことに於てのみ可能である臣民道を理論的に結論してゐる。第二編は「史的研究」として國史を貫く祭政一致の史實を、神代から最近世に至る迄述べつくして原理編を實證してゐる。  
序に——恐らくこの序は大倉所長の精神を最も簡潔明瞭に示したものであるが——この序に「或る者は言ふ、今日日本人として唯一人も、我が國體の萬國に比類のないことを知らないものはない。然るに今日尚ほ國體明徴の叫ばれる所以のものは、眞に我が國體を知らずして知れりと思ふ國民の存在すればこそである。善人國を亡すの諺の如く、危険は明白なる反國家の旗幟を翻へす惡逆の徒よりも、寧ろ知れりとなして誤れる人々に存するのである。」とある。大倉所長の

二九



眞摯敬虔の態度に、正に冷汗三斗の思ひありである。

(昭和一二、四、一九 横濱市神奈川區太尾町大倉山  
大倉精神文化研究所 菊判 二九一頁 一・五〇)

尾高 朝雄 著

### 國家構造論

「人間の思想の永い歴史を通じて見ても、國家の問題が今日ほど切實に人々の關心に肉迫しつゝある時代は、稀であつたと云ふことが出来よう。然し、國家の問題に對する今日の人間思想の態度は、それにも拘らず、一般に甚だ受動的消極的な色調を示して居る。即ち、行動人の單純な思想に追隨これ力める思想家はあつても、行動の指標たるべき独自の理念の確立に邁進する哲人は少なく、國家の實踐行動を拱手して傍觀する學徒は存しても、實踐行動態としての國家の眞相に果敢なる科學眼を向ける者は、必ずしも數多いとは云へない。行動と思想とのかくの如き跛行は、華々しき再建設の途上に於ける現代國家に伴ふ一つの病理現象であると共に、また、思想の實踐化を標榜する現代科學そのものの低調性の最も著しい實證でもある。現代科學の任務は、もとより、單なる行動への追隨、または徒らなる實踐の傍觀に盡るべきではない。

進んで國家現象の全貌を究明し、實在國家の生命を把握することは、言議を越えた科學者の第一線の活動でなければならぬ。本書は、此の科學者の第一線の活動に一兵卒として参加しようとする著者の念願から生れた。」と著者はその抱負を語つてゐる。本書の企ては、現象學的な立場に立つて、國家を前科學的な客觀的實存であるとし、これを社會法及び政治の三側面に互つて分析綜合を試みることに依つて、國家の立體的な構造を明にしようとするにある。

著者は一方に於て純粹法學の業績を充分に高く評價し、これを中心としつゝも、他方國家の社會的方面をとり上げて、これを現象學的實在の問題と牽聯せしめて考へ、更に法超越的な政治理念と結合し、しかもよく政治的實踐と區別して、飽くまでも一の理論科學としての一般國家學を樹立しようとしてゐるのであつて、この點全く學界に於ける新らしき試みであり、學界に貢獻するところが少くないであらう。

本書は學位論文として書かれたものであるから、相當むづかしいものではあるが、論理明晰で文章も平明だし、著者の哲學的素養の豊かなことにより、極めて精神的內容に富んでをり、一般知識人が讀んでも得るところが多いものである。

(昭和一一、一二、二五 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店  
菊判 五三五頁 三・二〇)

尾崎 秀實 著

### 嵐に立つ支那

轉換期支那の外交・政治・經濟

堀江 邑 一

現下の支那はまことに嵐の中に旋轉しつゝある。日本はすでにこの颯風圈内にあるが、今や全東洋のみか、全世界までそのうちに捲き込まれんとする勢ひがある。本書はその副題の示す如く、この轉換期支那の姿をその外交、政治、經濟の方面から描いたものである。

著者は東京朝日新聞社東亞問題調査會員として専心支那問題の調査に従事せられる傍ら、近來『中央公論』『改造』其他の諸雜誌に生氣潑刺たる支那關係論文を續々發表し、その觀察の鋭利と分析の透徹とはすでに定評がある。本書は著書が大體過去二年間に發表したこれら諸論文を集めたものである。

今次事變勃發以來、支那問題に關する著書は市場に氾濫し、玉石混淆、讀者をして、取捨に迷はしめてゐるが、それら多數の類書の中から、本書が今回圖書館協會によつて良書として推薦されたことは、現在の如く支那に對する正しき認識が何よりも必要とせられながら、それが全く混亂してゐる時代

にあつて、わが讀書界のために慶びに堪へない。けだし複雑極まる支那の政治、外交、經濟をかくも鮮やかに描き出してゐるものは、極めて少いからである。

本書は全編二十二論文を、『支那と列強』八、『日支關係』五、二年間に纏起して重大な問題が殆んど網羅されてゐる。しかもこの二年間こそ日支關係を今日の大破局に導くべきあらゆる重大問題が踵を接して發生した時代である。著者がこれらの問題に向ひその全力をあげて取組んでゐる姿は、どの論文にもよく現はれてゐる。加之、その際著者は過去の支那觀を排し、正しい科學的方法を應用せんと努力し、大いなる成果をあげてゐるのである。著者が序文のうちで

『多少の讀み辛さを我慢してこの書を読み通してくれる人があるならば、必らずや今日支那が立つ颯風期の惱みの根源がいづこにあり、従つてまた、日支關係の破局が如何にして來つたかについて諒解されるであらう。』

と述べてゐるのは、著者の自惚ではなくて、問題に對して如何に眞摯に取組んだかを自白してゐるものと思はれる。

筆者も亦この書の著者と同様、過去の觀念的支那觀にあきたらず、新しき立場に立ち、飽くまで現實支那を直視しつゝ、支那問題研究の驥尾に附しつゝあるものとして、この著者の



勞作はそれらが發表されるその都度、精讀し來つたが、今これらの論文が一冊の著書に纏められ、多少の體系を備へたものを通讀し、本書を一貫して著者の支那問題に對する態度に關し、次の如き特色を發見するものである。

1 從來の支那研究方法の缺陷は茫洋たる支那の姿に囚れて、事態を靜止的、固定的に觀て、生起する問題を、自己の先入主觀によつて説明せんとするか、精々その間に登場する指導的人物の個人的性格やそれらの人物の個人的關係に歸して説明せんとするか、この著者は現實の事實を客觀的に直視し、立論を常に事實的基礎に置き、從つて統計資料を巧みに利用すると共に、事態を飽迄發展的、動的に觀んとしてゐる。

2 普通の支那研究家は支那問題をたゞ支那内部の問題として、外界との關聯を全く切離して觀察するか、少くともこれを甚しく輕視する傾きがあるが、この著者は常に支那を世界の一環として見、支那内部に起つてゐる問題の觀察に當つても、常に當時の世界情勢から眼を離さず、特に支那の環境就中列強と支那及び列強相互間の諸關係との關聯を重要視してゐる。この特徴はどの論文にもよく現はれてゐるが、就中『戰爭の危機と東亞』、『最近の段階における日支關係』、『轉換期支那の基本問題』等に現はれた著者のこの方面における力量は、他人の追隨を許さざるものがある。

3 本書の第三の特徴は全卷を通じ、著者が常に『支那民衆の姿』を直視し、支那社會の進展におけるその役割を重要視した點である。著者は九七頁に次の如く述べてゐる。

『支那を繞る國際關係を論ずるに際して我々は支那における中央政權たる國民政府とこれら列國との入り込んだ複雑な關係を注視することも勿論重要な仕事ではある。然しながら更に重要にして根本的な任務は直接動きつゝある支那の民衆の動向を察知することである。』著者のこの關心は彼の論文の然るところに容易に得難き生彩を添へてゐる。

常に生々しき現實の問題を取扱へる著者は諸所において大膽なる豫斷をなす必要に迫られてゐる。その最もよき一例は著者が昨年十二月十三日西安事變勃發の報を受取つた即日一氣に書き上げた『張學良クーデターの意義』であり、今之を讀んでもいかによく的中したものだと思はれるが、これは前述の如き著書の支那問題に對する方法的鋭さと、豫斷の根據の正確なる把握に歸すべきものである。同様に日支關係がこの悲しむべき破局に突入した今日の事態を前にして、本年六月十日の論文を最後とするこれらの諸論文のうちには、我々は幾多の示唆に富む主張を發見するのである。今その二三を示せば次の如くである。

(1) 本年四月に書いた論文『戰爭の危機と東亞』のうちで『戰

爭の破口は將來或ば支那に求められるかも知れない。しかしその場合においても終局的決定的な戰爭……行はれるであらう。だから……充分發展し、支那民族運動が成熟し

きつた瞬間に行はれる可能性が多いと思はれる。』(二三頁)

(2) 昨年十二月二十日の論文『支那における國際關係の新局面』のうち『支那における人民戦線はなほ現在において、充分強力なものと云ひ難い。それは現南京政權の母體である國民黨の未だ僅少部分を獲得してゐるに過ぎない。充分強力な抗日勢力たり得るためには、國民黨をもその全運動の中に捲き込んでしまはなければならぬ。今日まだ事情はそこまで進んでゐないことは明かである。しかしながら現に日支間に介在する幾多の事情は今後の事態の推移次第で、民衆をしてかゝる方向に驅り立てるおそれなしとしない。』(六一頁)

(3) 本年五月十六日の論文『イギリス』の對支政策の新段階において『たゞこゝにアメリカの對支政策の前進を可能ならしめる條件がある。その一つはイギリスとの對支政策における共働の可能性である。英米兩國は今資本主義世界に横はる最大の基本的對立ではあるが、しかしながらその極東政策においては、一方においてももしも日本によつて脅威される状態が持續せられるに於ては、アメリカがイギリス

の政策に従屬する可能性をもつのである。』(八七頁)

(4) 本年二月六日の論文『支那とソ聯邦』において『これらの段階を経たならば、露支兩國は進んで太平洋に集團的保障を確立するために、佛ソ相互條約と同性質の「相互援助」條約を締結するのである。佛ソ兩國は國情を異にしてゐるしかも相互の生存のために提携したのである。西洋において佛ソにとつて眞であるところのものは東洋においてもまたソ支にとつても眞でなければならぬ。支那の立つ危機の重要さはかゝる條件の締結を急速に必要とする。しかし情勢はソ支が相互に協調することを要請してゐる。』

支那の現實そのものはまことに複雑でありその認識把握はまことに困難である。從つて本書の叙述の如きにも、いさゝか難解なところもあり、讀み難い箇所もあるであらう。しかしこれを精讀し、研究するものにとつては、必らずや無限の興味を與へるものがあることを信ずる。支那問題に關する稀なる卓越した書物として推賞し度い。

(昭和一二、九、二二 牛込區新小川町三ノ一〇 亞里書店)

四六判 三四〇頁 一・五〇)



矢野 仁一 著

### 日清役後支那外交

(東方文化學院京都研究所  
研究報告第九冊)

前著「最近支那外交史」につぐもので日清戦役後より北清事變後露西亞の東三省占領に至るまでの外交史である。

この間に於ける支那外交史は言ふまでもなく日清戦役後に於ける對日外交即ち下關條約、遼東半島還附、露支密約、露西亞の旅大租借、續いて團匪事件であつて全く支那にとつては對日、對支外交史である。これを日本側より見れば日本が亞細亞の日本として列國に認識せられ、來るべき日露戦事外交の基礎を作る極めて重要な時期を包含して居るものと言ふことが出来る。

本書は元來著者の多年に亘る研究の結果であつて、資料を廣く博く内外の文献にとつた所謂博引旁證、詳細を極めたもので決して一片の讀物ではない。寧ろ純學術書である。

しかしながら、我帝國發展の黎明期に於ける支那の對日、對露外交を回顧することは時局重大の折柄極めて緊要の事に屬すると言はなければならぬ。

本書は固より學問的に標題の示す事實の脈絡を辿ることを目的として居るけれども、又隨所に透徹せる史眼によつて、彼我の外交に對して對切なる批判を加へて居る。

目次、下關條約前清國の諸外國に援助を懇請せし顯末・下關條約後の批准換約期限延緩問題、遼東還附條件減讓問題、清國と露西亞と秘密同盟條約を締結するに至りし事情、露西亞の旅順に大連灣を占領しこれを租借するに至りし當時の外交上の紛糾・義和拳匪亂當時の東三省擾亂及び露西亞の東三省占領

(昭和一二、一、一五 京都市左京區北白川小倉町五〇  
東方文化學院京都研究所 菊判 七四七頁 五・〇〇)

尾高 朝雄 著

### 改訂 法 哲 學

本書初版は昭和十年十二月に出た。當時本誌上にも推薦し、其後文部省からも社會教育に裨益ある優良圖書として推薦せられ法學讀書界でも頗る評判のいゝ本として廣く讀まれたが、今回それに全面的な改訂を加へ分量も六十頁程を増して改訂版として世に送られた。

一體、法哲學はいふまでもなく、法に關する哲學であり、

本質に於て哲學であつて、法學の一部門ではない。しかるに從來わが國の法律哲學(或は法理學)は専門的法律學者のみに依つて取扱はれて來たに過ぎなかつた。無論それ等の法律學者達もそれぞれの程度の哲學的素養を備へ、哲學的態度を以て彼等の法律哲學を説いてはゐたけれども、彼等自身本質に於て眞の哲學者ではなかつた爲め、その法律哲學(法理學)は、或は西洋の既成法哲學の概觀または祖述に過ないか或は一般法學たるに止つて、全體として眞に創造的なる哲學の名に價するものは甚だ少なかつた如くに思はれる。

それ故に從來の法律哲學(法理學)がその哲學的外觀の故に却つて、パンの學のみを求めて汲々たる法律學生に何等の魅力をも示さなかつたばかりでなく、人間存在の問題、社會的歴史的實在の問題等哲學上の生きた問題の探究に情熱を抱く眞面目な青年達の關心からも甚だ遠いものであつたことに理由がないのではなかつた。

そして本書が法哲學といふ書名を以てしてなほ、かくも多くの青年達の間で愛讀されたといふのも、本書の著者が本質に於て哲學者でありつゝ、しかも充分の法學的政治學的素養を兼ね備へた學者と見られるところに根本的な原因があるのだと解してよいであらう。

ともあれ、本書の如き精神的内容の豊かな法哲學が青年達

の間で廣く讀まれるやうになつたことは喜ぶべきことであり、こゝに舊版よりも一層内容と體系とを整へて現れた改訂版が更に多くの青年達に熟讀されることを熱望してやまないのである。

(昭和一二、一、二〇 京橋區京橋三ノ二 日本評論社  
四六判 三七二頁 二・〇〇)

金子堅太郎 著

### 憲法制定と歐米人の評論

明治九年九月六日 明治天皇は時の元老院議長有栖川宮熾仁親王を御學問所に召されて、次の様な勅語を賜ふた。

朕爰ニ我カ建國ノ體ニ基キ廣ク海外各國ノ成法ヲ斟酌シ以テ國憲ヲ定メントス 夫レ宜シク汝等之カ草案ヲ起創シ以テ開セヨ 朕將サニ之ヲ撰ハントス

我が帝國憲法は 明治天皇のこの叡慮に基いて起草されたことは申すまでもない。今日憲法學説をめぐつて色々論議せられ、特に國體の明徴が問題とせられねばならぬ事態にまで立ち至つた折柄、憲法起草者の一人であられる金子堅太郎伯爵に依つて本書が出版されたことは、憲法を論ずる上にこの上もなく貴重な資料が與へられたと云つてよいと思ふ。



に逸話の類を挿んであつて読み易い。本書の如きをこそ本當に良書として一般に普及させたいものである。

(昭和一二、一一、一八 四谷區霞ヶ丘 日本青年館  
四六判 三九五頁 一・三〇)

田岡 良一 著

### 空襲と國際法

空襲に關する國際法はまだ一般的に確立してゐるものと言ふことが出来ない。一九二三年の海牙法律委員會の採擇した空襲法草案も其後各國政府の採用するところとならなかつたから、これによつて空襲に關する國際法が確定したものは認められない。

今次の支那事變は世界大戰以來大規模な空襲の行はれた最初のものであつて、空襲に關する國際法の解釋に極めて重要な意味を有するものと考へられる。

戰爭に當つては勝つこと自體が正義であり、國際法など一片の反古に等しい。従つて國際法の研究は無駄なことだといふやうな考へ方は、世界大戰の際しばしばなされたことであつたし、今日に於ても往々にして却つて知識階級の人達の間にかれる言葉であるが、支那事變に於けるわが軍の空襲が

本書は序文にもある通り、元來は昭和十年七月文部省に於て開催された憲法講習會に於ける伯爵の講演を基としたもので、この講演速記はその後伯爵の校閲補訂を得て小冊子として出版せられ、當時本欄にも紹介推薦されたのであつたが、この講演は炎暑の候僅々二時間半を限つてなされたもので、本書序文に伯爵自身も「十分其の詳細を演述すること能はず、己むを得ず之を省略したり」と云つて居らるゝ程である。本書は右の様な事情で曩に省略された部分を細大漏さず増補記述して攻めて劊劊に附せられたもので、量から云つても前版の講演速記に比して數倍以上に及ぶものである。

内容は「憲法制定篇」と「評論篇」とに分たれてゐる。前者は憲法制定の由來から書き起されて、起草に至る迄の經過起草の苦心、起草中の色々の思ひ出、そして最後に欽定憲法が愈々發布さるゝに至る迄の事情が記されてゐる。因に憲法起草のことに當られたのは伊藤公を始め井上毅、伊東已代治及び金子伯(當時書記官)の四人であつた。「評論篇」の方は憲法發布直後伯爵は伊藤公の「憲法義解」の英譯を携へて歐米諸國を巡歴されたが、その折歐米諸國の知名の憲法學者や政治家より直接徴せられた意見や評論を蒐録されたもので、之亦貴重な資料たるを失はぬ。

記述は講演を土臺としてあるから極めて平易で、且又所々

最も嚴正に國際法を重んずる精神を以て行はれたことに就て、われわれは人類の名に於てわが空軍に感謝すべきであると思ふ。空襲に際し、國際法の要求する軍事的目標主義を嚴守し、非戦闘員に損害を與ふる事を極力避けんとしたことの爲めに、わが空軍は如何に慘憺たる苦心と、多くの犠牲とを拂つたことであらうか。

國際法は嚴存する。わが空軍の行動を見よ。かく言ひ得ることはわれ等日本國民の大なる光榮でなくてはならない。

本書は眞に行はるべき空襲に關する國際法が何であるかを明にせんとするものであつて、その方法として既往の戰時國際法の歴史的研究をなし、よつて國際法が交戦者の武器の選擇に干渉する事の眞に可能なる限度を究め、此の限界を超えざる範圍に於て新武器の威力を制取し、其の慘禍を減殺する法規を見出すことに努めてゐるのである。

蓋し國際法を定立する場合、實際上或武器の軍事的效用を無視して、これを人道主義の檻の中に拘禁せんとする企は、却つて國際法の權威を傷ける結果となること既に戰時國際法の歴史が示してゐると考へられるからである。しかしながら一方に於て、一朝空襲を受けた場合、わが國の有する防空上の弱點(都市家屋の構造、産業中心地の位置等)は、空襲に用ふる武器の威力を及ぶ限り制限する方向に國際法を解釋す

る所謂「法的防空」の達成を望ましいものとする。

今次の事變に於けるわが空軍によつて行はれた空襲を見るに、軍事的目標主義の嚴守されたことは前に觸れた通りであるが、その軍事的目標物の範圍の解釋も可なり嚴格な立場のとられてゐることが看取される如く思はれるし、また都市空襲に際し、甚だしい軍事的な不利益と、場合によつては多くの犠牲をさへ覺悟しつゝ、その豫告を行つてゐることは、寧ろ人道主義的傾向の強く現れたものであり、また前述「法的防空」達成の爲めの實踐であるとも見られるのである。

それ等の點に關し本書の著者の解釋は必ずしも、わが空軍の行動と一致するものではないが、要するに空襲に關する國際法はまだ確立せず、その確定は今後の學說と實例とに俟つのである。此の方面に關する研究の乏しき今日、本書は貴重な貢獻であると思ふ。

(昭和一二、六、一五 神田區神保町二 巖松堂書店  
菊判 三六四頁 三・七〇)

立 作 太 郎 著

### 現實國際法諸問題

東京帝國大學に於て行はれた國際法の特別講義を収録した



これ等は多少専門的な嫌はあるけれども、元來國際法の理論は如何に六ヶ敷いといつたところで、教養ある常識を以てするならば決して近づき難いものではないのであるから本書を知識階級に薦めることは失當ではあるまい。

(昭和一二、六、二〇 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店  
菊判 一六一頁 〇・八〇)

太田 正孝 著

### 物の經濟

著者はいふまでもなく、現大藏政務次官であり、本書は出版以來普く世に喧傳せられてゐるところである。現内閣成立とともにわれ／＼は經濟三原則なる重大政綱を示され、それにつれて物の豫算、物の經濟なる言葉を聞くやうになつたのであるが、本書はまさにその聲に應じて現はれたのである。著者がお話し上手、筆達者の太田博士である。著者の現地位と併せて世に響かない筈はないのである。

しからば物の經濟とは何であらうか。抑々が金よりか物が肝腎なのである。要るだけの物はどうしても調へなければならぬ。それが現下の戦時状態に當面し緊迫の問題となつて來たのである。軍需品並に國防充實のためには是非とも要る

ものである。この特別講義は國際法に關する理論的及び實際上の實要問題を對象とし、一般講義よりも一層深い知識を與へることを目的とするものとされてゐるから、元來一般讀者ではないかも知れないが、その内容を見ると何れも、苟くも今日の時局に無關心でない知識階級ならば誰でもが興味を有すべき問題ばかりである。即ち第一講に於て、國際法上の制裁を説き附説としてイタリヤに對する聯盟規約上の制裁に觸れてゐる。これは我國にとつても滿洲事變に際し、また今次の支那事變に當つても、所謂「九ヶ國會議」に於て問題となつたところであるし、國際法が法なりや否やといふ根本問題に就ても、制裁は常に問題とされるのである。第二講で、國際法上の承認及び附説としてステイムソン主義を説くのであるが、これが滿洲問題に關聯し、また最近わが國がスペイン叛亂軍を承認したことは、讀者の記憶に新なところであらう。第三講では内亂の場合に於ける國際法關係が取扱はれ、これに最近のスペイン内亂に關する諸問題が附説されてをり、第四講では、國際法上の戦時中立を説明し、アメリカ合衆國の中立法並に海洋自由主義及びモンロー主義が添へられてをり、第五講では、常設國際司法裁判所の決定に現はれたる國際法上の主要觀念及其學說上の背景として國際法の不完全性、國際法の主體、國家の主權等の諸問題が扱はれてゐる。

だけのものを需めなければならぬ。更に國民の生活必需品や輸出工業原料を得るためにも必要な限りの物はなければならぬ。豫算の金額よりも問題はその必要な物である。本書はまさに、その問題を提げて街頭に向つて説き出したものである。本書は第一章の「總説」においてその問題の概要を説き示してゐる。日本ではどれだけのものが要るか、日本ではどれだけの物が生産され又は生産可能であるか、日本に足らざるものは何であり、如何ほどであり、如何なる國の供給を仰がねばならないか等々の具體的な事柄について第二章以下五十三品目に互つて一々數字をあげて懇切明快に説いてゐるわけである。試みに第二章以下の項目をあげてみれば、鐵鋼、非鐵金屬、纖維工業原料、化學工業製品、食料品、ゴム、皮革、動力及び燃料、完成品、金の順となつてをり、をはりに「結語」がある。そこでかういつてゐる、「こゝに注意しておきたいことは……『物』に對する『心』の問題が残されてゐるといふことである。」「……筆者は『心』の經濟につき他日論述の日をもちたいと思つてゐる。」と。

(昭和一二、九、五 麹町區丸ノ内丸ビル内 中央公論社  
四六判 三三三頁 一・三〇)

波多野 鼎 著

### 經濟學入門

この書は經濟原論の書である。しかし普通の經濟原論とはまるで形も様子もちがつたものである。この書は昭和十一年九州帝大主催の夏期講習會で「經濟機構の解剖」といふ題で講演されたものである。その題名の示してゐるやうに、現代經濟機構の解剖を示した經濟原論なのである。だから本書の構成も「序論」「個別的生産機構」「全體的生産機構」「金融機構」「國際經濟機構」といふやうな章別になつてゐる。かういふ章名を見るといかにも難解の書のやうに思はれるかも知れないが、そのときの聽講者は中等學校程度以上の人々であつたといふから、出来るだけ砕いて解り易く説いたものである。しかし經濟學の知識のないものにすら／＼と理解されるといふわけには行かない。

この經濟原論の書の特徴は章別にも大體現はれるやうに、經濟の仕組みを全體として理解させやうとしたものである。「個別的生産機構」といふところで、一つの企業を中心にして商品、資本、貨幣、價格、利潤といふやうな概念を全體の中から理解させる事なのである。「全體的生産機構」といふところでは、生産部門、カルテル、統制化といふやうなこ



とを、理解させるのである。このやうに全體の中に生きてゐる概念として理解させようとするのであつて、普通の經濟理論のやうに、概念を概念として説明してかゝるといふ仕方とは全然ちがふのである。第二の特色は現實の經濟事象に觸れつゝ説いてゐるいふことである。日本や世界の生きた事情が經濟原理に結びついて理解されるのである。それから第三の特色は、理想とか政策とかを全然言つてゐないといふことである。あくまで現實の經濟機構の解説であつて、それだからどうしよう、どうしなければならぬといふことは一切ふれないのである。この種の名著として推奨されてゐる。

(昭和一二、二、一〇 京橋區京橋三ノ四 日本評論社  
四六判 二三六頁 一・五〇)

蠟山 政道 著

### 現代社會思想講話

本誌上で、嘗て同じ著者の「現代社會思想」を紹介したが、本書はそれに若干の修補、並に略三倍になる程の増補を加へ、全く面目を更めてこゝに新版として公刊されたものである。新版に於て改められた主な箇所はファツシズムの研究に於て、伊太利のファツシズムの他に、更に獨逸のナチスをも批評

したと、新たに増補されたものは、「日本のファツシズム」「政治改革」「憲政本義」その他最近に於ける具體的な政治、經濟、社會問題に關する論評十數項である。かくて本書は、現代我國に行はれる複雑極まる社會思想の全貌に、鋭利にして明快な理解と批判とを與へてゐるのである。

この著者もまた、もとより立憲政治の擁護者である。立憲政治を否定する共産主義を排撃するは勿論、ファツシズムもそれが動もすれば、我が國の光輝ある欽定憲法の精神に悖る思想を含むことに於て非難されるべきものとするのである。日本のファツシズムなどといはれるものもわが國民一般の立憲政治に對する無智冷淡を逆用するところに生ずる「非常時」的暫定的政治現象に過ぎないものと考へられる。しかし立憲主義は決して現状維持を意味するのではない。新らしき時局にテストされ、それに順應し得る弾力性に富む立憲政治の再建は可能であるばかりでなく、それこそ、「非常時」的政治現象解消への原動力たり得るものと解せられるのである。たゞ、しかしこの如き立憲政治の再建は、國民一般の立憲主義に對する正しき理解と熱意とを地盤とするのでなくして不可能である。

本書がこの方向に向つて國民の自覺を促すに役立つことを望むものである。

(昭和一二、五、一六 神田區一ツ橋二ノ三 高陽書院  
四六判 三二三頁 一・六〇)

大島 正滿 著

### 優生と結婚

近時「優生」と云ふ言葉がしきりに用ひられるようになったが、この言葉が近代語として識者の間に浮び上つて來たのは重大な意義がある。と云ふのは、昔は到底生きることの許されなかつた様な病弱者も、近來る醫術はどしどし之を救ひ上げて立派に生活せしめて居る。然もその病弱な個人を生活せしめただけではなく、子孫を残すことを許してゐる。この様に残された子孫が親の體質を承けて虚弱であることは云ふ迄もない。この事實は何を意味するかと云ふに、國民の體位はこの爲に著しへ低下して行く。そして之は、單に肉體的の病弱者だけの問題ではないと思ふ。

そこで新しく問題となるのは良き子孫を次代に遺すと云ふことである。言葉を代へれば、國民の素質を向上せしめて國本を培ふと云ふことである。これは吾々國民の自覺に待つより外に方法があるまいと思ふ。「優生」の問題が一つの社會運動として、新らしく識者の間にとり上げられるようになつ

た理由もこゝにある。

本書はこの優生の問題の基礎である遺傳現象並にその教育、環境との關係、結婚の問題、優生學に基く産兒制限の問題等を平易に、特に良き母たる婦人の伴侶たらしむべく記述されたもので、著者は「人生改良の鍵は婦人が握る」と迄云つてゐる。まことに國民一般に、殊に若き人々に是非一讀をすゝめ度い好著である。

唯この種の本でいつも不満に思ふのは、遺傳學者は遺傳現象を餘り強く主張して、教育とか環境の支配とか云ふことを稍々軽く見過ぎる所がある。本書に於ても若干その感なきにしもあらずであるが、吾々は本書を讀むに際しても、遺傳現象の恐るべきことを知ると共に、後天的な教育、環境の支配と云ふことに、相當の重大さを意識して、運命的な考へ方に陥るの弊から遁れ度いと思ふ。

(昭和一二、五、二七 京橋區銀座一ノ五 大日本圖書株式會社  
四六判 二七〇頁 一・〇〇)

丸岡 秀子 著

### 日本農村婦人問題

一切の炊事と縫物と育児と洗濯と、これだけでも都會の婦



人には相當な労働であると云ふことである。その上に農村の婦人には田や畑に出るの耕耘の仕事がある。養蠶がある。その他こまごまとした農事の雑役は、労働時間から云つても労働力から云つても決して男子に劣つては居ない。そののみか主婦としての家内に於ける労働、母親としての特殊の心遣ひ等を考慮して見るとき、農村婦人の日常は男子にもましてまことに痛ましとも悲惨とも云ひようがない。それも、それだけの苦勞に對してそれをつぐなふだけの慰安の設備でもあればまだしも、唯働いて働いて、そして老いて死んで行く。

本書はこの悲惨な農村婦人の生活を、一つの社會問題として取り上げ、事細かにその實狀を調査記録したものである。従つて本書目録には農村婦人問題に對する何等かの對策と云ふものが講ぜられてゐるわけではなく、唯農村の出身にして現に産業組合中央會に職を奉じて居られると云ふこの著者が、婦人らしい細かい心づかひを以て農村婦人、殊に家庭の主婦としての、又母親としての農村婦人の實狀を各方面に互つて詳細に調査記録したもので、謂はゞ農村婦人問題の重要な素材と云ふべきものである。

内容は「主婦としての農村婦人」「母性としての農村婦人」の二章が最も根幹であつて、この二章には農村主婦の主食物副食物から被服住居と云ふ細かい具體的なこと、或は産前産

後の休養と労働状態と云ふ様な、婦人にして初めてよく語り得ると云ふ様な所がある。その他「農村婦人と文化」の章下には農村に於ける保健衛生の文化的施設の不完全さ、託兒施設の未發達の状態、娯樂慰安の不備等についての現状報告がなされ、最後に「農村主婦の諸團體」として婦人團體の一般狀況、農村産業組合との關係などについて概説されてある。統計的の數字が相當多く用ひられては居るが、記述は平易で読み易い。又類書の鈔いと云ふ點でも本書を高く價值づけ得ると思ふ。

(昭和一二、三、一〇 神田區一ツ橋二ノ三 高陽書院  
四六判 二一九頁 一・二〇)

阿部 重孝 著

教育改革論

學校卒業者の就職難、或は一般にインテリゲンツィアの無氣力等が著しく目立つて來るにつれて、學校教育に對する不信任の聲が高くなり、教育機構の改造の問題がいよ／＼焦眉の急務として考へられるやうになつた。

もとより學制改革の運動は今に始まつたことではなく、從來も屢々問題となつたのであるが遂に今日に至るまで實現の

機を得なかつたことは人のよく知る通りである。

それが何故にかく實現の機を逸して來たかは、一概に論斷することは出來ない。それが黨略の具として左右されたといふやうな不純な場合は論外としても、一方に於ては、爲政者の側に於ける用意の不足、或は問題の本質に對する理解の缺乏にもよつたであらうし、他方に於ては國民一般この問題に對する正しい認識と、熱意とが缺けてゐたことも有力な原因であつたに相違ない。

いふまでもなく教育は、一國文化の消長に深く根を張る人間の活動であつて、その改造の問題は、思ひ付きや功名心によつて取扱はれるにはあまりに重大である。多くの内閣がこの問題に手を染めながら常に失敗を繰返したに過ぎなかつたことは、この問題自體の性質に基くとも考へられる。近衛内閣が學制改革の必要を強調しながら、しかも慎重の態度をとつて、その實現の時期を約束しなかつたことは賢明であつた。しかしそれだからといつて、今日この問題が一刻も早く實現の希望されるものであることは忘れられてはなるまい。官民は一致協力して、この問題の研究に力め、その實現の一日も速かならんことを念とすべきである。

こゝに推薦する「教育改革論」の著者は、東京帝國大學の教育學の教授であり、また教育行政の實際にも經驗を有つて

をられるのであつて、一方に於ては既成改革論に捉はれざる廣い立場から問題を理論的に展開しつゝ、しかも、その理論の展開を、我國教育制度の歴史、現制度の實狀及びその教育精神の傳統等を具體的且分析的に研究することによつて實證的に基礎づけ、こゝに最も信頼すべく、しかも甚だ多くの卓見に満ちた教育改革論を示してをられるのである。

(昭和一二、四、三〇 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店  
四六判 三七五頁 一・八〇)

下村 壽一 著

教育行政撮要 (改訂版)

教育とは人間を作ることであり、人間は現代社會に於ての人間であるとすれば、教育の機構が社會の進展につれて不斷に變遷することは當然である。わが國の教育制度が從來法律制度化されること少く、主として勅令、省令等の命令を以つて定められてゐたのも、それが議會に於て政争の具に供せられることを虞れたのに因るであらうが、一面また特に順應性の要求される教育制度を、比較的固定性の強い法律によつて膠着せしめることを避けんとしたことに、相當の理由が認め



められるのである。

かくて著者も序文で述べてをられる通り、「立國の基礎を固め國際間に優勝の地歩を占めんとする國々の教育制度は、目まぐるはしき程に動きつゝある現状であり」、「我國も亦固より其の例に漏るゝものではない。」

それ故に教育制度に關する参考書は常に新しいものでなくては用をなさないのである。

本書の初版は昭和八年に刊行せられ、その際本會よりも推薦紹介したのであつたが、今回これに全面的な修正を施し、尙ほ若干の増補を加へて面目を一新し、改訂版として世に送られた。今内容を一瞥するに、修正は殆んど各項目に互り、且極めて最近の改正をも考慮してをり、新たに増補されたものは、總論に於て、教育法規の説明、補習教育のところ、青年學校、それに新たに章を設けて國民精神文化研究所の説明が加へられてゐる。

本書の特色は極めて把握的な叙述を以て、わが國の教育制度の要領を盡し、併せて歐米各國の制度の概要をも示してゐることである。徒らに教育法規を羅列したに過ぎない教育行政の著書はあつても、簡潔にして要を得た参考書に甚だ乏しい際、本書は充分頼るに足るものと信ずる。

實務家、教育家、學生々徒諸氏に好箇の参考書として薦め

る。

(昭和一二、九、一〇 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店  
四六判 二〇六頁 一・二〇)

尾高 豊作 編

### 生れる前から子供の愛育讀本 五六歳までの

誕生前から五六歳までは、一個の生物が人格をそなへた人間にならうとする境目に相當する時期で、育兒上最も注意すべき時期である。

本書は此の間に於ける子供の身心の發達過程を記述し、これに對する親の態度について詳細に叙述されたものである。子供の出生の問題としては「家庭とは何か」「子供を中心」に考へた場合の家庭の問題「家庭教育」「どこまで遺傳で、どこからさきが環境か」「人生第一歩―胎兒期、新生兒」が記されて居る。この中最も興味あるものは一番上の子供―仲の子供―末つ子―獨りつ子の取扱ひであらう。

「愛情と躰けのバランスをとれ」「家庭は子供に權威の存在を始めて教へる所でないから居る。」  
といふ點は特に詳細に説明が與へられて居る。

次は幼兒期を生後一ヶ年内、第一年、第二年に分ちて、この間に於ける感官の發達及びこの期の取扱方法を、次に三歳から五歳までの幼年期について述べ、最後に子供の社會的性的發達について物語つて居る。

わかりきつた公式的なことも、もとより少くはない。然し世の母親の多くはあまりに育兒について無知でありすぎるやうに思へる。愛兒の從順な心の發達を助長しやうとはせずして、より多く現はれた結果について消極的な態度を示す場合が多い。兩親は將來の國家を双肩に荷つて立ち、我々自身の後繼者のために眞の愛育の道を見出して行かなければなるまい。

下段に載せられてゐる小論文は育兒に關する「ヘアレント・マガジン」の抄譯であるが、短い中に育兒の要諦を提示して居る。

(昭和一一、一二、八 神田區駿河臺三丁目六 刀江書院  
菊判 二五〇頁・九〇)

上村 哲彌 著

### 親たるの道 科學的進歩的な 愛兒の導き方

「白金も黄金も玉も何せんにまされる寶子にしかめやも」と云ふ古歌がある。親子愛の絆を表はしたものとて、昔から我國人には愛誦されてゐる。だが一足實際の家庭に踏み込んで見ると、一圓か二圓の茶器や井鉢よりも粗末に取扱はれてゐる子供が案外に多い。著者はこんな親に對して「子供よりは財産の大切な父」と云ふ皮肉な言葉を以て痛棒を喰はしてゐる。

又著者は「世の中には甚だ不心得な父親が多い。自分では疎懶不規則な生活をし乍ら、彼らはそれを惡徳の生きた標本として、それによつて子供達にはその反對なものを教へ込むことが出来る」と盲信してゐます。彼らは常にその子女の頭を撫していふのです、『お前はなアお父さん見たいに呑んだくれになるのではないぞ、酒は毒だぞ、御父さんがよい手本だ、酒呑んでろくでなしになるのではないぞよ』と云ふ例話を引いて、子供等の示範としての父親たるものに猛省を促してゐる。勿論之は父親の飲酒をとがめてゐるのではない。自らの缺點惡癖な子供に示して説教する卑屈な態度を痛快にこき卸したまでのことである。

家庭は子供の温床である。人格の苗圃である。そして兩親は子供の人格的生命的の培養者である。そう考へると親たるものは決して安閑として居られないだけでなく、考へのない



父親や母親を見ると、彼等を安閑と放つて置けないと云ふ熱情に馳られたのが本書の著者であらうと思はれる。著者は滿鐵參事兼總裁室福祿課長と云ふ公職を有たる、傍、日本兩親再教育協會を設立してその主幹をつとめて居られる。同協會には「いとし兒」と云ふ機關誌があり、著者は主として之に執筆されてゐるが、本書にはこの「いとし兒」に掲載されたものも大分あるが、半分以上は「家庭教育の中心としての父親」「理想の母」「父に贈る言葉」「母に贈る言葉」「兩親に贈る言葉」「母からの贈物」等の公開講演並にラヂオの放送講演の速記である。従つて記述は平易である。内容は副題目にも示されてある通り、何れも「科學的進歩的な愛兒の導き方」を主眼としたもので、特に子供の家庭教育に於ける父親の責任の重大さについて述べられてゐるのは、母親中心の家庭教育に比して力強いものがある。それに一貫して少しのゆるみのない態度が讀者に大いに信頼を與へる所がある。特に知識階級の父親母親に一讀を薦め度い。

(昭和一二、六、一九 目黒區下目黒二ノ三七二 第一出版社  
發賣 四六判 三九二頁 二・三〇)

瀨川頼太郎・本田正信著  
母への教育報告

教育を學校の專賣の如く考へて居るらしい世の父兄も、小學校に入らうとする子供、中等學校に進まふとする兒童を持つ頃になると、今更のやうに狼狽し始める。それよりも更に悲しむべきことは、今の學校の殆んど全部が、各それ自身の目的を忘れて上級學校への準備教育場の如く考へられて居る點である。これは一面制度の弊でもあらうが、又學校當局は勿論、父兄自身も三思を要する問題である。眞の教育は單に兒童の知的向上を目的とするものではなくて、學級といふ小社會に於ける兒童相互の關係、教師と兒童との關係、家庭及び社會との交渉に於ける兒童の身體並に精神の調和的發達に貢獻するものでなくてはならぬ。このためには、教師と家庭とは最も緊密なる聯絡提携をはからなければならぬ。本書は多年實際教育に従事する著者が、多年注意して取扱つて來た類型的兒童を左の數項に分つて詳細に觀察記述し、これに教育的意見を附加へたものである。優秀兒井澤佐兵衛—學習と生活—明るい劣等兒—物言はぬ子供—盜癖兒の教育—わがまゝ者とその周圍—學級の病弱兒—うその常習犯—信教の自由—あきらめとのぞみ—先生のゐない學級遠足—豫期しない發展—學級總動員の吃音矯正—健康教育—街頭の兒童

我々の愛する兒童は殆んどすべて、この中の何れかの類型に屬して居る筈である。記述も頗る暢達で興味深く讀まれ、愛兒の教育上幾多の示唆を含んで居る。  
(昭和一二、一、一二、三〇 京橋區銀座八丁目五 學藝社  
四六判 四八八頁 二・〇〇)

兒玉 九十 著  
兩親教育

著者は城西成蹊學園に教鞭を執ること滿十年、大正十四年辭して歐米の學校を視察し、歸朝の後私立明星中學校を創立し、初代の校長として今日に及んでゐる。その教育方針は單なる知識の注入によらず、生徒の自發的活動に基く體驗を重視されてゐる。普通の學校では小使の仕事になつてゐる便所掃除その他の雜用は、私の學校では最も尊い作業の一つとして、教師と生徒が協力してやることになつてゐます。寄宿舎にも、炊事係を備つてゐるだけで、掃除、洗濯その他一切の雜用は、何から何まで全部、生徒の手でやらせます。……  
それも、たゞ考へなしにやらせるのではなく、どうすれば無

駄な骨を折らずに水が汲めるか、どうすれば石炭を少く使つて早く沸すことが出来るか、さうしたことを、常に科學的に工夫させるやうに指導してゐます。學んだことは必ず行へ、行ふことによつて習つた知識を確實に我が物とせよ。と、これが體驗教育の具體的な表現である。本書はかゝる立場から知識偏重の學校教育、愛兒の眞の教育を忘れんとしてゐる兩親への反省を促されたものである。盛られた要項は、親の有り難さを知らぬ子—家庭では何を教へたらよいか—實行力のある人間を作れ—自ら工夫する習慣を養へ—我が子を成功させる道—子供はなぜ親の思通りにならぬか—何のために子供を學校へ入れるか、等々十八に分れて居り、豊富な實例をあげ、極めて平明に述べられて居るから、小學校を出た許りの兩親にも容易に理解される。附録の「成績不良の子を如何に導くべきか」「我が子の宗教教育を語る會」の座談會記事も、愛兒の教育上必讀すべき好題目であると信ずる。  
(昭和一二、一、一二、八 五版 神田區駿河臺 主婦之友社  
四六判 三五〇頁 一・二〇)



借行社編纂部編

### 借行拾録

或は北支戦線に、或は上海戦線に、赫々たる感動を發揮しつゝある皇軍の威力は、内外人の齊しく驚嘆するところである。だがその感動の反面には幾多の悪戦苦闘があり、これを突破するに足る我が民族精神と、平時に於ける純乎たる精神教育のあることを牢記しなければならぬ。

本書は明治二十一年七月以來、借行社記事に載録された記事中より軍隊教育・精神教育に資すべきものを拾録したものである。

内容は精神教育に關する注意(秋山騎兵少佐) 統卒に就きて(大庭大將) 戦時兵卒の心と上官の心得(清野歩兵大佐) 岐阜縣震災派遣中の實驗及所見(田中一等軍醫) 將校團と交

際(獨逸兵事週報) 獨逸兵學界に於ける沙河會戰の批評(獨逸兵事週報) 夜戦と敵對國(丹野歩兵中尉) 軍隊教育に就て(田中少將) 福島歩兵少佐遠征刺殺(參謀本部) 涓滴録(井染少將) 等、その中明治時代のもの七篇、大正時代のもの二篇、昭和時代のもの一篇であるが、何れも具體的で、興味津々たるものがある。

殊に後半を占むる涓滴録は井染少將が聯隊長としての實際経験を記述されたものであるが、その周到なる注意は一般人の取つてもつて範となすに足るべきものである。かゝる綿密なる聯隊長によつて鍊成される皇軍にして始めて累次の戰闘に常勝の榮譽が勝ち得られるのであると痛感せしめられる。従つて本書は單なる軍隊教育資料にとどまらず、一般教育の好資料と信ずる。

(昭和一二、七、二五 麹町區九段一丁目 借行社  
四六判 四八五頁・八〇)

## 第四 自然科學

佐藤 信衛 著

### 近代科學

本書は現代哲學全集の一巻で、近代科學の思想的基礎を考察したものである。著者は思想を培養するものとして、科學の精神を云ひ、明治以後吾人が科學を學ぶべき理由として、この折々顧憂された三つのことがあるとする。一つは知識として(儒學や國學などの知らなかつた最も知識らしい知識として)、二つは技術として、三つは弘く新しい人心を耕鋤する合理主義の典型として擧げてゐる。この最後のものが本書に於て強調され、検討されてゐる。

本書は最初の部分に於て純粹な科學の眼や心を鍛へるものとして、近代科學の方法について述べてゐる。即ち科學を眞に作り、またこの精神を正しく知るには、科學活動の結果に過ぎない個々の知識よりも、科學活動そのものを己に教へて、知識はそれによつて自づから生ずるやうにしなければならぬといふ見地から、人はどうして科學者たり得るか、どう見、またどう考へるのが科學なのかを詳しく考察してゐる。次に現代の自然觀の基礎となる物理學について、この最近の發達と、その導いた思想を述べてゐる。即ち原子論・光學

史・相對性理論・波動力學・量子力學等最も新鋭な科學原理を概論してゐる。

高級な意味に於ける「科學入門書」として、本書は明晰な記述を持ち、今日の科學精神を考へ、併せて最新科學の認識を深める上に、必要な條件を備へた良書であると思ふ。

(昭和一二、九、二八 京橋區京橋三ノ四 日本評論社  
四六判 三二八頁 二・〇〇)

岡田 武松 著

### 續測候瑣談

五年前以前「測候瑣談」を出された著者が、同じ様な経路を経て出来上つた本書を「續測候瑣談」として出版された。同じ様な経路と云ふのは、前著も今回のも共に神戸海洋氣象臺の同人雜誌「海と空」に執筆された短かい文章を蒐めて上木されたもので、「測候仲間の逸話や測候事業の挿話などを書いた」ものである。

著者は「元來この逸話や挿話は、單に測候部内のものゝ興味をひく位が關の山であつて、部外の諸君には、頓と面白味の無いものと思ふから、こんなものを寄せ集めて本にしたところで無駄なことをする様な氣がしてならないが、友達から



軽い讀物として薦め度い。

(昭和一二、八、二〇 神田區一橋二ノ三 岩波書店  
四六判 二九三頁 一・〇〇〇)

荒木 俊馬 著

### 「天文と宇宙」を讀む

鈴木 敬 信

版にしろと煽てられ、遂その氣になつてしまつた」と遠慮して居られるが、どうして筆者などは、測候とは凡そ縁もゆかりもない仕事に従事して居るが、まことに面白く通讀させて頂いた。

本書にせよ前著にせよ讀んでみると、著者の所謂測候仲間と云ふのは如何にも仲よく、そしてユーモアに富んだ人々が多いようである。或はこの著者の筆を通ると、みんなこんなユーモリストになつて了ふのかも知れないが。兎に角、世界の氣象學界に名を轟はれてゐる大博士から氣象臺の給仕君、出入のそば屋の出前持ちまでが、話題にとり入れられて居るが、それ等の人々が皆一様に一個の人間として、いや一人のユーモリストとして取り扱はれてゐる。

「測候事業の挿話」と著者が云つてゐる稍々専門事項にわたることは、數量から云つて全卷の半分にも及んで居ないと思はれるが、その多くは測候技術官養成所を卒業した若い測候技手に呼びかけたものらしく、測候史上の挿話、測候精神とも云ふべき職業精神の鼓吹に力めたものが比較的多數である。勿論門外漢の吾々が讀んでもよく分り、又啓發せられる所も多い。

右の様な次第で、前著を讀まれた方は名前を聞いただけで、直ちに讀む氣になられるであらうが、そうでない人々にも、

我々を包む宇宙は、どんな構造になつてゐるか、そして又この宇宙は如何にして誕生し、如何に成り行くかと言ふ事は、時の古今を問はず、洋の東西を言はず、常に問題となつてゐたものである。古い時代にはそれに相應した宇宙觀があり、新しい時代には新しい宇宙觀がある。現代に於ても物理學者はその子より中性子、續いて陽電子と、微細な世界に觸手を伸ばして陰方面を明らかにしつゝあるに對して、天文學者は太陽系より銀河系、銀河系より星雲、そして星雲より星雲へと探索の手を延ばして、宇宙の構造を探りつゝある。

宇宙の研究は今世紀に遡入つてから俄然盛になつたが、時を経るにつれて益々盛で、新しい研究が續々發表され、宇宙の構造は愈々明らかになつて來つゝある。この時に當り荒木博士

の著はされた貴重なる書「天文と宇宙」を得たのは、洵に意義ありと言へるであらう。

この書は博士が十年來講演に又科學雜誌に執筆されたもの八篇を選集し改めて上梓したもの、一つの目的のために書き下したものでないから、天文學全般と言はず、宇宙論だけに ついても初めから一貫した體系をなしてゐないが、各篇毎に問題が異つた觀點から検討されてゐるから、問題の核心を掴むのは反つて都合がよからう。

内容の八篇を列挙すると、第一篇「天文學の起原」は東洋特に支那に材料を採つて古代天文學の起原を論じたもの、第二篇「學藝復興と近世天文學の黎明」は歴史的に學藝復興期に於ける天文學の活躍を論じたもの、ニイチエの精神三轉化など引用し、之と天文學の發展など結びつけてゐる。第三篇「天文學の基礎知識」は他篇と聊か系を異にし、標題通り基礎知識を解説してゐるが、宇宙論と格別密接な關係があるわけでもない。

本書の核心をなすと思はれるのは第四篇以下であつて、第四篇「現代の宇宙觀」はその概論をなすもの、第六篇「太陽の黒點」に於ては太陽の謎「黒點」について詳述し、第七篇「星辰の内部構造」に於ては、恒星の内部構造が明快に畫き出されてゐる。韓退之の文「大風物不得其平則鳴」を引用し

て、平衡状態を説明するあたり、著者の心憎いまでの巧妙さを見る。「星辰進化の問題」は第五篇に於て平易に説き、宇宙を形づくる一要素「恒星」の進化について教へる。第八篇では之等恒星に關する問題から離れて、古代民族の宇宙觀より始めて、太陽系より銀河系、續いて問題の星雲に至り、相對論による膨脹宇宙にまで及んでゐる。

全體を通じて著者の平易な書き振りは、著者のねらつた効果をよく擧げてゐると思はれる。書中所々に見出される英獨或は支那の古典は、見事に使ひこなされて、『動もすれば無味乾燥になり勝ちな科學書に幾分の情味を添へんとする』著者の目的を充分成功させてゐる。又この書では哲學的説明をしてゐる部分が可なり眼につく。之は第八篇の後半部など殊に著しい。著者の所謂『天文學の思想を取扱つたもの』と言ふ所以であらう。

天文學に素養のない人が讀んでも一應は了解され、現代の宇宙論が如何なる結論に達してゐるか、樂にその成果を味ふ事が出來ると信じて疑はない。著者に深甚なる謝意を表する次第である。

さて本書は如上洵に結構な書であるが、仔細に検討すると多少缺點があるかに思はれる。之等は天文臺の石井博士が天文月報第三十卷第四號に記されてゐるから再び述べないが、



石井博士の指摘された以外にも、小さな事乍ら冥王星の発見者 Tombaugh が Tombo になつてゐたり(二八〇頁)、エ

ラトステネスの測定した値が一圓周の五十分の一即ち $\frac{1}{12}$ であるべき筈の $\frac{1}{10}$ 、になり、アレキサンドリのとシエネ間が五クスタヂアである筈のが五百クスタヂアになつてゐたりする。(二五五頁、しかし結果として出した一、五六二

軒だけは正しい數値を用ひて計算した結果と一致する)。その他渦状星雲の後退最大速度として毎秒四萬二千軒と言ふ最新の値を掲げ乍ら(三四一頁)銀河系の直徑として二十五萬光年、その中心と太陽間の距離として六萬光年(二九六頁その他)と言ふ舊い値を掲げたのは如何なるものであらうか。アンドロメダの大星雲なども直徑二萬一千光年と言ふ舊い値が載つてゐる。之等は他日再版の折に是非訂正して頂きたいものである。

それからもう一つ、著者に希望する所は、卷末に索引を附して頂きたい事である。索引なき科學書は「灯なき燈籠」の如く、その價値を半減する。人によつては詳しい目次があれば充分と言ふかも知れぬが、目次は目次、索引は索引用途は全く違ふ。是非つけて頂きたい。筆者の如きは、索引のなくともよいのは小説だけと思つてゐる。

(昭和一二、三、五 京都市河原町二條下ル 人文書院  
四六判 四一五頁 二・五〇)

井上 兼雄 著

### 長生きの科學

書名がいさゝかエキセントリックであるが、要するに、本書は平易に營養學を説いたものである。義に鈴木梅太郎博士とこの著者との共著「營養讀本」なるものを推薦したが、本書は更に之を讀み易くしたものと云ふ感がある。元來本書は「東洋經濟新報」に「財界人の營養心得」として連載されたもので、従つてそれだけ讀み物風の興味が加味されてある。本書の特徴とも云ふべき所は、中年以上の、しかも豊かな生活をして居る紳士淑女を目あてに書かれたと云ふ點であるが、之については左に著者の言葉を引いて見ることにする。即ち初めの方の「營養の重要性」と云ふ所で著者は

「吾々が一般大衆に營養問題を話す場合には中産階級以下の人々を對照とするから、味ひの點等は或る程度まで度外視して、専ら經濟を主とした營養論に傾いてしまつて、勢ひ、ますい半搗米や鯛の粉などを推奨したりする様になる。ところで本篇は、主として都會に生活する中産階級以上の

紳士淑女を目標とした營養心得を、出来るだけ平易に書いた積りである。就中近來益々増加しつゝあるアパート生活者や、日夜美食によつて娛樂を求めてやまない人達に警告を發すると同時に、一方壽命延長の工作に努力を拂はなければならぬ年齢の人士に、力強い聲援を與へたい意圖のもとに、その主力を美食弊害論に注いだ。」

と云つて居る。全くその通りで、本書の内容は「蛋白質の卷」「脂肪の卷」「炭水化物の卷」「無機鹽類の卷」「ビタミンの卷」「ホルモンの卷」等に分れてゐるが、どの項を開いて見ても中産階級以上の日常食を中心として、その日常食を營養學的に最も効果のある方面に導かうと努力されてゐる。であるから例へば酒を好む人に對しても、僅かの理由を楯に絶對禁酒を強ふる様な書き方はしてゐない。酒の利と害とを公平に記し、體質とアルコールの適量を極めて融通無礙の態度で示してゐる。故に聰明なる讀者は之によつて自らのアルコールの適量を定めればよいのである。すべてがこんな態度で書かれてあつて、決定的な禁止條項が比較的少い。従つて讀んでゐても何となく氣が樂である。併しこんな所は案外著者が中年者の心理をよく呑み込んでゐて—無論著者自身も中年者らしく思はれるが—本稿を書かれたものと思はれる。と云ふのは、そろ／＼身體のことが心配になり出した中年以上の人

人には、本書の様な内輪の書き方でも、それが専門家の筆であるだけに相當身に沁みるものがありはせぬかと思はれる。又本書を興味方面から見ても、通俗に書かれた醫學書は誰しも一應は心惹かれるものであるが、それが本書の様に營養學の最近時の花形ビタミンとホルモンの爲に約半數以上の頁が割かれてゐるのは、何と云つても讀者を引きつける爲には効果百パーセントである。又酒の話であるが「食物によつて酒の害は緩和される」と聞いたら讀者の眼はどう輝くか。「脂肪の過食によつて早くも大切な頭がおぼろ月化して來ることもある」と聞かされて、初めて納得の行く讀者もないわけではあるまい。だがこれ等の興味的な書き振りを、著者の學殖と相俟たなければ何の意義もない。その點では本書は記述と云ひ内容と云ひ、鬼に金棒と云つても云ひ過しはあるまい。

こんな様なわけで本書は主となして中年以上の人々の爲に推薦すべく推薦文を書いたのであるが、もつと廣い意味で云へば國民體位向上と云ふことが問題となつてゐる折柄、一般大衆に營養常識を教ふる上に好個な良書であると云へる。

(昭和一二、一〇、三〇 日本橋區本石町三ノ二  
東洋經濟新報社 菊判 二四三頁 一・五〇)



大河内正敏 著

新興日本の工業と發明

同じ著者に依つて昭和九年四月「農村の工業」が出版せられ、本會にても之を推薦してゐる。本書は論旨に於て前著と變りはないが、前著が論文集の形であつたのに對し、本書は首尾一貫した記述に依つてゐる。又前著では題名通り、主な觀點が農村の工業化の問題に極限されてあつたが、本書では著者の抱かるゝ産業問題に關する種々の抱懐が、廣い範圍に互つて陳べられ、就中精密機械工業の現状並びに將來についての論述、及び發明とその發明の工業化の問題についての論述に大いに力が至されてある。

著者は十八世紀末から十九世紀にかけて起つた所謂産業革命、及びそれに依つて結果した産業界の資本主義に對して、現在を第二産業革命と稱し、資本主義工業に取つて代るに、智能主義工業を以てすべきを力説してゐる。この論旨が明快

に力強く本書を一貫してゐることは、前著「農村の工業」に於けると全く同様である。そしてこの近代的な智能主義工業の最もよき例として「一塊の石炭、一升の石油も産出せず、一噸の鐵も自給出来ない天然資源貧弱なる山間の小國」としての瑞西の機械工業のすぐれたる現状を述べて、他山の石としてゐる。尙著者は自らの學殖と經驗とを基礎として、我國現在の科學界と事業界とを以てすれば、外國で成功してゐるあらゆる工業は、我國に於ても必ずや成功すべきことを力強く主張し、この意味で自由通商論を單なるイギリス流の受け賣り論として斥け、寧ろ關稅保護による國內工業の振興策に好意を寄せてゐる。

又發明及びその工業化の問題に關しては「發明や研究をどう云ふ風にして實際化せしめるか、一つの發明が如何にして工業化或は實用化するか、と云ふ問題は、多くの場合に於て發明そのものより遙かに六ヶ敷いものである」と云つて、發明とその工業化といふことが全く別個のものであることを述べ、我國に於て往々見らるゝが如き發明家が、同時に事業化

たらんとすることの非を唱へてゐる。そして「發明家が一寸の思ひつきで大きな發明をした様な顔をしてゐるのは、眞の大發明となる爲には未だ／＼ほんの序の口である事を知らない爲であらう」と云つてゐるあたり、如何にもこの著者らしい、發明家に對する警告の辭である。

要するに科學・發明・合成化學・精密機械等を打つて一丸として、智能主義工業を力強く表明したものであつて、勿論個々の論述には種々問題はあるであらうが、産業の合理化・國內工業の振興について論じた、卓抜なる一具眼者の主張として、我々國民の一讀を要するものではあるまいか。

(昭和一二、一、四谷區霞丘町 日本青年館  
四六判 二八九頁・九〇)

關野 貞 著

日本建築史講話

本書は日本建築史の權威である故著者が武蔵高等學校に於てなされた十時間に亙る特別講義を同校教授が筆記整理し、著者の門下生が嚴密なる校閲を施したものである。

あらゆる日本文化がさうであるやうに、建築の分野に於ても我國は古今東西のあらゆる様式を取り入れ、今尙これを隨

所に遺して居る。これは我が國の地形・地質・氣候等の天然的素因と、國體・宗教・國民精神・社會狀態等の人為的素因とによるものである。

殊に支那朝鮮等に於ては氣候は非常に乾燥して居つて、木造建築の保存には非常に適當して居るにかゝらず、支那に於ては一千年以上を経過した建物は一つもなく、朝鮮に於てはわが鎌倉時代に相當するものは唯一棟存するに過ぎないのに反して、我國に於ては法隆寺の中門・金堂・五重塔・廻廊の如く、一千三百年以上も経過して、猶嚴然として古今の偉觀を誇つて居るものがあり、鎌倉時代の建物の如きは三百年餘も経てゐるといふことである。これは我が國に革命の變亂なく、外國の侵略を蒙つた事のない結果であつて、偏にわが國體の賜物である事は著者の特に注意する點である。

著者は序論に於て我國特有の建築様式の發達を概観し、次に原始・飛鳥・寧樂・平安前期・同後期・鎌倉・室町・桃山・江戸・明治大正の十時代に區分し、夫々の時代に於ては時代の概観をなし、宮殿・神社・佛寺・住宅・城廓・靈廟建築等に分つて、其の特色を代表的な遺構によつて極めて平易簡決に説明して居る。

尙卷末の附録には「日本建築重要遺構一覽」をあげてその要項を表示し、「建築用語解説並附圖」「建築用語索引」を附



して居るから、古建築を中心とする、所謂名所舊蹟の探訪には、無二の好伴侶である。權威者によつて、この種の啓蒙的の圖書の出版されることは、眞によろこばしいことである。

(昭和一二、七、二九 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店  
四六判 二五八頁 一・二〇)

岸田日出刀 著

薨

岡田 三郎

建築家の隨筆集であるから、従つて内容も建築に關するものが多い。それも専門的な述作といふより、建築を一つの文化問題として取扱つたものが多く、「薨」といふ書名も單に建築に縁のある文字を選んだまで、深い意味があるのではない。由來、藝術のうちで文化の相が最も著しく現はれるのが建築であるといはれる。わけても或時代、或社會の作り出す住居建築には、端的にその時代の社會相が示されてゐる。ところで、我國の現状では、建築は他の藝術例へば繪畫や彫刻と同じ意味で、また同じ程度で、一般に鑑賞されたり、

批評されたりすることは尠い。そして國民一般の建築に對する無關心——、少くとも批判力の缺乏は、わが國の建築の在り方に大いに關係を有つてゐるものと思はれる。

今日、日本の建築——殊に都市建築を見て、誰でも氣付くことは、その様式の不統一、混雜といふことであらう。それが今日の日本文化の相そのものだといつて了へばそれまでのことだが、若し東京市民に今少し建築に對する批評眼が出来てゐたなら、われわれの東京市は多少にもせよ整然たり得るのではあるまいか。かく考へるとき、われわれは國民一般の建築常識の向上を計ることに相當深い意味を認め得ると信ずるのである。

本書はこの目的に向つて、完全に應へ得るものとはいへないかも知れない。既に建築に關して多少の理解を有つものには、稍々喰ひ足りない感じのすることは否めない。しかし一般に建築に關する常識のレベルが、今日の如きわが國の現實に對しては、本書の如きものゝ方が、却つてよく建築常識の向上に役立ち得るものといへる。

本書は隨筆集であつて、全體として「一貫した主義主張を盛つたまとまつた」ものではないので、その内容の梗概を示すことは困難であるが、この著者の建築に對する根本的な態度を見ることが出来れば、内容の一々に就いての説明は大して

必要ではないと思ふ。先づこの著者がつれづれ草の兼好法師の建築觀に深く敬服してゐることを指摘して置くことは、この著者のひととなりを知る上に無駄ではあるまい。

著者は建築に於ける傳統といふものを重視する意味で、桂離宮や、法隆寺などの古建築にしばしば言及してゐる。古典建築の精神は現代日本建築の中にも生きてゐなくてはならぬものと考へられてゐるのである。但しこの考へ方は最近わが建築界に流行の所謂日本趣味建築を無條件に肯定するものではなく、生活内容の變化に應じ、新材料の發見に伴ひ日本建築が本質的に發展することを希つてゐる。徒らに「古建築に使はれた末梢的手法」を平面計劃や建築材料との深い聯關を考へずに近代建築借に用する事は無意味である。赤瓦を取り合せた所謂和洋折衷に至つては「實に嫌ひだ」と嘆じてゐる。それでは著者がほんたうの日本建築と考へるものは何んなものか。「日本の氣候風上と今日の日本人の精神生活及び物質生活をその根柢まで極はめ、建築の本質を明らかにすることによつて具現される建築」でなくてはならないとされてゐる。稍々抽象的で把みにくいのが、大體著者の傾向を知るに足ると思はれるのである。

(昭和一二、八、一六 日本橋區通二ノ四日本橋ビル 相模書房  
四六判 三二〇頁 二・三〇)

那須 皓 著

### 新農村の基調

日本青年館發行「新興日本叢書」の一編である。那須博士は人も知る農業政策の權威であつて、而も單なる學究に止まらず、常に實際的改革的な見地に立つてゐられるのである。本書も新農村の基調を架空の計畫として求めるのではなく、あくまでも現實に即して、現實の中に生れ出づべき新農村の基調を探究せんとしてゐるのである。

それゆゑ本書はまづ「農村現狀の鳥瞰圖」を與へ、次に「農村問題の史的發展」を示し、次いでその重要問題たる小作問題・農産物價格問題・農業信用と負債整理問題・農業經營の問題・人口移民問題等の諸問題について論述し、更に「農村經濟更生運動」を論究し、最後に農村文化問題に説を及んで結論を與へてゐるのである。

著者の探求した新農村の基調たるべきものは、結局協同の精神といふことになるであらう。それは現實の農村においては未だ萌芽的發現に止まつてゐるのであるが、各方面におけるその成長發展によつて新農村は樹立せられざるを得ない、といふのが著者の見解である。これに對しては讀者もお



そらく同感せざるを得まい。それゆゑ著者は、結局農村問題の基礎を農民の人間問題におくのである。前述の如く、本書の最後において、農村文化問題に論及してゐるのであるが、それは末尾に附加せられて論じられたものではなくて、最後に来るものは、實は全體の根柢となつてゐるものであることを、讀者は了解しなければならぬ。

農村問題の全般を概説し、現在より將來への動向を現實的に探求したものと、かくも簡潔に明快に叙説した著書は少い。農村青年は諸君の地位役割を自覺する上において讀むべきであり、その指導の任にあるものは勿論、一般國民も現代農村問題の生きた解説書として一讀して然るべきである。

(昭和一二、五、五 四谷區區役ヶ丘一 日本青年館  
四六判 二七五頁・九〇)

横尾惣三郎 著

### 如何にして農村は更生するか

著者は自序に

「如何にして農村は更生するか」の一卷は、農民講道館の建立を決して以來四箇年に亘る著者の觀察であり、沈思であり、判斷であり、工夫であり、斷案であり、汗であり、膏であり、血であり、肉であ

り、生命であり、魂である。信じて疑はざる確信の産物であり、刻して動かざる人生の記録である。

と述べて居る。以つて著者の本書に於ける態度が窺はれる。その叙述は、言々句々悉く憂國興村の至情より發して居る。農村更生の鋒火が擧げられてから己に數年を閉し、全國到處に調査計劃の歩は進められて居る。これ等の調査計劃は固より必要である。然しながらこれを運営する指導者直接勤敏をとる人々の間に、時局に對する正しき認識と努力なくしては、眞の更生は望まらるべくもない。

斯かる見地から著者の取扱つて居る問題は、

名醫の眞價は診察にあり—農村疲弊の根本原因—革新の根本義—農村教育革新の具體案—町村行政革新の具體案—農業經營革新の具體案—有畜農業革新の具體案—農業經營の鐵則—産業組合革新の具體案—農村人口問題解決の具體案—農家負債整理の具體案—蠶絲業革新の具體案—小作問題解決の具體案—農村更生の具體案

の十四章に亘つて居る。著者の熱誠は往々奇矯の語となつてあらはれて居る處がないではない。微温的であり、概念的な農村更生策や、農村指導者・農村教育及び農村教育者が、火を吐く著者の鋭鋒の血祭りにあげられて居る處も尠くはない。茲に多少世の不興を買ふ原因が伏在するかも知れない。然しながら現下の狀勢は農村のみならず、あらゆる方面に眞の革新が要求されて居る。従つてこの確信と實踐なくしては、こ

れを突破することは不可能である。非常時は對外的であるよりは、寧ろ人心の弛緩の危機である。敢へて本書を推す所以である。

(昭和一二、二、一八 埼玉縣與野町農民講道館内  
農民講道館流汗會 四六判 四六四頁 一・八〇)

大河内正敏 著

### 農村の工業と副業

著者は昭和九年「農村の工業」なる一書を著し、當時本協會より推薦せられ、又文部省の推薦圖書ともなつてゐる。爾來著者は科學主義工業論を唱へて、今日の行詰れる資本主義工業に取つて代るべきものとしてゐる。こゝに科學主義工業と云ふものは工業の科學化の意味で、この著者をして云はしむれば、十八世紀の産業革命は地方に分散した家内工業・手工業を奪つて一定個所に工場工業・機械工業を新たに形成した。この新しい工業形態が今日の資本主義工業に迄發達したのであるが、資本主義工業は豊富な資本と優れた熟練工とに依つてのみ良品の製産が可能なのである。然るに現代工業では、單に良品であると云ふことのみならず、如何にして廉價の生産をなす可きか、今後の盛衰を握る鍵でなくてはなら

ない。こゝに巨額の資本と長年の經驗を必要とする熟練工とに依存してゐる資本主義工業の終局が見出される。然して之に代るべきものが科學主義工業であると云ふのである。謂ふ所の意味は「熟練」に代ふるに「科學的機械」を以てせんとするのである。即ち長年の經驗に依つて初めて獲得される「熟練」は、單に機械の操作を會得するだけでより以上の能力を發揮し得る「科學的道具」の利用によつて交代さるべきだと云ふのである。斯くすれば工業労働は都會の熟練工の獨占的労働ではなく、農閑期に於ける農村の餘剩勞力を以て之に充當することが出来ると云ふのである。之がこの著者の農村工業論の由來する所で、本書に於ても説かるゝところである。

然らば如何なる工業が農村に適當であるかの問題であるが農村としては農産物の加工工業が最も適してゐるやうに一應は考へられるが、實はそうではないので、寧ろ一般には不適當と思はれる精密機械の部分品工業(この中には兵器の部分品製造も含まれる)こそ、却つて最も適した農村工業であると論じてゐる。

然し著者は、嘗ての持論であつた農村の工業化と云ふこと(前著「農村の工業」によく現はれでゐる)を本書に於ては「非常な誤りであつた」と云つて訂正し、農村はあくまでも農村として成長せしめ、唯その餘剩勞力を本來の農村労働に支障



を来さない仕組の下に、即ち著者の所謂科學主義工業と云ふ組織の下に發達せしめて良品廉價を第一條件とする近代工業に参加せしめ、延いては一旦緩急ある場合には農村工業を總動員すべきを論斷してゐる。すべて著者を長とする理化學研究所に於ける實例を土臺として述べられたもので論旨明快である。

(昭和一二、一二、二(第四版) 麹町區有樂町一ノ二  
科學主義工業社 四六判 一四三頁・九〇)

清水 潔 著

### 趣味の森林

本書の著者は父の業であつた山林植伐事業を受繼いで、職業を趣味として經營し、研究してゐる人であるといふ。本書は、昭和十年に出版したものを増補して世に出したものである。本書は産業上、また國民生活上、重大な意義を有する林業に關して、國民一般の理解認識の乏しきを憂ひ、趣味としてまた常識としての立場から著はされたものである。

本書の特色は森林に關する萬般の事柄が平易に碎いて書かれてゐるといふことにある。普通の林業に關する著書は殆ど凡て教科書式のもので、一般の讀者に適したものは無いとい

(昭和一一、八、一〇 大阪市西區南堀江通三ノ四二  
清水土地植林株式会社 四六判 三二三頁・二〇〇)

西澤勇志智 著

### 工業化學讀本

序によれば、本書は「現代工業化學界の全般を展望し、初步の人にも了解される程度に解説したもの」と云ふことである。従つて稍々繁雜の感はあるが、工業化學の可成廣い範圍に互つて記述されてあり、記述されてあり、記述の方法も如何にも常識的で、純粹理論に深く觸れてゐない所、書名通りの讀本風である。内容は、水素、空氣、酸素、炭酸ガス、空中窒素の固定、酸とアルカリ、石油、石炭の乾溜、人造石油、コールタール、コールタール染料、火藥、セルロースとその製品、プラスチック(可塑物)の十四章に分たれ、例へば酸素とか炭酸ガスとか酸、アルカリとか或は空氣とか水素とか云ふ、謂はゞ工業化學の中でも原素的ものはその性能及び效用を述べることを主とし、又空中窒素の固定とか、石炭の乾溜、コールタール染料、火藥とか云ふものについては、其等の化學製品の製産過程に重點を置いて説明されてある。何れにしても記述は平易で専門學術的の所はないから讀むには大

つていい。その點本書は比較的近づき易い書きぶりのものである。しかしながら大體において、教科書的な編述に陥つてゐるといふはなければならぬ。その間にとま／＼「森林隨筆」とか「森林と文化」「趣味の森林」とかいふやうな隨筆風なものが介在して、憩ひの場所のやうになつてゐるのである。本書の著者のやうな人にはむしろ隨筆風に書いて、森林に關する百般の事柄にふれてもらひたいと望んでいゝのではあるまいか。例へば「我が國に於ける主要なる造林地帯」などは、著者が實際に行つて觀察研究した記録にしていゝのである。各事項があつさりしてゐるけれど、形式的な記述になつてゐるのは遺憾におもふ。今後はもつと事項を限つても、實地觀察の記述に充ちたものが欲しいものである。一般讀者としてはこのやうな要求を出してもいゝとおもふし、またそのやうなものによつてこそ、國民の愛林心を養成することが出来るのだとおもふ。例へば保安林・國有林といつても、その概念さへ知らぬ國民もあるのであるから、勿論法規的説明もなければならぬのであるが、それだけでは郷土の保安林愛護の觀念を盛んにすることは出来ない。しかし何といつても、本書は一般人に近づき易い本であるとおもふし、著者の愛林の心は明かに看取される本であつて、著者のやうな人の所産としてふさはしい著述である。

變業である。従つて實際化學工業に従事してゐる人が、自分の關係してゐる以外の方面を常識的に知らうとする時、或は一般人が我が國の化學工業の全般について大觀しようとする時には、極めて便利であらうと思ふ。就中、これから化學工業界に出發しようとする一般學生諸君にとつては、一部門一部門について云へば、多少喰ひ足りないといふ感はあるにしても、我國化學工業界の現勢を全般的に瞥見しようとする爲には、役に立つ本である。

(昭和一二、八、二五 麹町區元園町一ノ五一 太陽閣  
菊判 二九〇頁・二・五〇)

伊木 雄貞 著

### 人造液體燃料工業

液體燃料の重要さは、それが特に現今の様な戰時體制時に於て痛感せざるを得ない。世界に於ける石油の產出量は、その大部分を米露英の三國に占められてゐる關係上、この天然資源を有しない我國を始め、獨伊佛等の諸國は、各々その國情に從つて石油國策を樹立してゐるが、人造液體燃料も亦その中の重要問題たるを失はない。

著者は明治専門學校教授であるが、昭和九年より十一年に



わたり、人造石油研究の中心地である獨逸を中心に歐米諸國を巡遊して、液體燃料工業の實情を見聞されたのであるが、本書はこの視察を基礎にして、最近の液體燃料の生産過程を概説したものである。従つてこの方面の専門家に對して、人造液體燃料工業の歐米に於ける近狀を具體的に概説したものであつて、決して一般讀者に、燃料國策の問題を抽象的に示したのではないことを承知され度い。

(昭和一二、九、一五 神田區旅籠町三ノ四 工業圖書株式會社 菊判 二八三頁 二・七〇)

白崎 享一 著  
佐久間哲三郎 著

### 解 商 品 の 科 學

「本書は商品及び産業の技術的並に自然科学的方面を平易に解説するを目的とし、其の編輯は學術に偏せず實際的なることを主眼としたものである。」故に書名は『商品の科學』であるが、内容は『産業の科學的解説』とも云ふべきものである。」

第一編 燃料(燃料と人生)、第二編 電氣(電氣知識の常識化)、  
第三編 金屬(金屬研究の大勢)、第四編 採製資料(原料と材

料)、第五編 工業藥品(工業藥品製法の今昔)、第六編 加工資料(資料の區分)、第七編 窒素(窒素工業の發展)、第八編 油脂と加工品(蠟油と動植物油)、第九編 可塑品(人造材料)、第一〇編 纖維と製品(衣料と纖維問題)、第一一篇 肥料と飼料(肥料と最新化學工業)、第二二編 食料品(營養素と糧食)、第二三編 酵素と醸造品(酵素と醱酵現象)、第一四編 國防資料(國防と産業)

以上十四篇百十三項より成る事典式著述である。毎頁寫眞を載せ圖解を示し、一目瞭然たらしめてゐる。

試みに「ステープル・ファイバー(人綿)」の項を開いて見れば、ステープル・ファイバーの如何なるものなるかを説明し、次いで「今日の國産ステープル・ファイバーの製造」「ステープル・ファイバーの得失」といふ三項目を掲げて三頁に互り説明してゐる。

右のやうに殆んどあらゆる産業に互り、主要商品を網羅し、主要科學製品を列擧してをるから、知りたいと思ふものについて一通りの知識を得るには便宜この上ない著述である。本書發行所國勢社からは、著名な「日本國勢圖會」「帝國資源總覽」等のほか各種年鑑が出版せられてゐるのであるが、本書もそれらに伍して極めて便利有益な著述として推奨に値するものである。いはゞ現今日本産業の百貨店とでもいふべきものである。

の、一本を備へておいていゝものであらう。卷末には十六頁に互り索引がある。

(昭和一二、四、五 京橋區京橋三ノ一第一相互館内 國勢社) 菊判 四三八頁 二・七〇)

## 第六 美 術 ・ 諸 藝

岡登 貞治 著

### 日本繪畫史讀本

日本美術品の海外流出防止については、近時相當鋭敏な注意が拂はるゝやうになつたし、古美術殊に繪畫の展覽會は都會に於ては頻繁に行はれて、一部國民の美意識及び美的感情を満足せしめて居る。然しながら眞に作品の眞價を知らんとするものは、作家の時代、作風の特質につき、又代表的傑作の構圖・筆致・色彩等についての豫備知識を養つて置く必要がある。

本書は斯うした目的のために、先づ上代より明治時代に至る日本繪畫の變遷を一瞥し、次に各時代に於ける重要な作品・作家をあげて居る。本書に収録されてゐる作品・作家は上代—銅鐸の繪畫

飛鳥時代—玉蟲厨子須彌座繪

等明治時代を合し六十畫人でその逸話、作家小傳、代表作品、



作風、代表作の解説を軽快な致を筆以つて約六・七頁宛に叙述して居る。

著者は東京美術學校圖書師範科の出身、多年中等教育の實務の経験から斯の種の述作の必要を痛感し、編述されたものであるから、簡単にその要領を得るには適切な書と信ずる。

(昭和一一、一二、八 麹町區九段二ノ一 東邦美術協會  
四六判 三八一頁 二・〇〇)

正木 直彦 著

## 回顧七十年

矢代 幸雄

圖書館協により良書として推薦せられた本書に就きて、余は紹介の筆を執るに、甚だ不適當である。何となれば、余は學窓を畢えると共に東京美術學校に奉職し、爾來二十幾年正木校長を戴き、その下に教授として働いて來たのであるから、余は全く正木先生に育てられた者である。加ふるに、余は本書の中にも、過分なる記述を以て引合ひに出されて居るので、尙更本書に就いて書くのは憚る可きである。然るに松本帝國圖書館長より是非にといふ御依頼あり、一應は不適當

といふ形に見えても、正木先生に近いだけに、他人に知れざる價值を本書に見出す點もあらう、と切りにすゝめられるので、茲に敢て一文を草する所以である。

東京美術學校長として在職三十二年、正木先生は、新日本の美術上の發展を、殆ど全部自ら中心人物として體驗せられた、と言つて過言ではない。否、正木先生は美術學校長になられる遙かに以前、堺市に生れられた家柄よりも、また大學卒業後若き中學校長として赴任せられた郡山が、奈良法隆寺に近かつた關係よりも、夙く日本の優れた古美術に深き關心と理解とを持たれ、先生の生涯は文部官吏として形式的には美術に直接の關聯を持たれなかつた期間をも通じて、實に美術こそ自ら先生の眞の生命をなしたのであつた。然も、先生の遭遇された時代は、日本美術にとりて、千載一遇の危機であり、また大發展の好期でもあり、初めは西洋崇拜の風潮に祖國の貴き美術が單に野蠻未開のものとして破壊蹂躪されんとし、やがて復興の氣運起り、國粹主義の主張となり、或はその間に西洋美術の輸入、その行き過ぎたる流行と之に對する反動等があり、實に狂瀾怒濤、何處が日本美術の進む可き目標か解らぬやうな状態にあつた。正木先生は恰度この困難にしてまた多望なる一大時期に、日本唯一の官立美術學校を握つて居られたのであつたから、職名は學校長であつても、實

は我國の美術行政全般の中心に他ならなかつた。天才的な岡倉天心の創業の後を承けられたる美術行政家としての正木先生の功績に關しては、見る人によつて意見が分るゝであらうが、美術界全般が先生に負ふ所多きは、今日先生が殆ど總ての美術家美術關係者より「正木先生」と仰がれ、「正木さん」として親まれて居る事實によりても、明瞭である。

斯くの如き珍らしき時代に生れ、斯くの如き經歷を持たれた正木先生の側に居て、如何か先生の憶ひ出を詳しく聴き度い、と希つたものは、余のみではない。而して先生は驚くばかりの記憶力を持つて居られたから、先生御自身が、貴重な文献に他ならなかつた。先生が老巧なる大茶人の如き風格を以て醇々と説かる座談は、何人も思はず傾聴せらるゝので、先生は何れの席に於ても自ら會話の中心になられた。余も先生の御話を筆記して置き度いと、幾度か計畫したことがあつたが、未だ果さざる間に、同感の士があると思つて、曩には「十三松堂閑話録」となり、今また「回顧七十年」となつて、その一部分が出たのであつた。

余は近時の日本の出版界を見て、常に不満に思ふ點がある。それは回顧録的著述の少いことである。面白き時代に生れ而して經驗多く且つ記憶よき人の卒直なる回顧録ほど、讀むに面白く、讀んで爲めになるものは尠い。是は、回顧録或は日

記類好きの英國流の讀書趣味に養はれたる余の嗜好の致すところかも知れないが、余の體驗より言へば、斯くの如きつまざる事實譚は、最も尊き時代の記録でもあり、また人生の記録でもある。芝居が、つた興奮を以て讀まざるも、思ひ且つ學ぶところ最も深い。また是等に傳へられたる事實は、歴史の基礎的なる素材である。余は豫々より記録的文献が日本にもつと獎勵されてよい、と感じて居る者であるが、この正木先生の好著に接して、更に所感を新たにするのである。

而して茲に附記す可きは、正木先生の生涯の主なる貢獻は美術上に在り、従つて本書の價值もその方面に在ること言ふまでもないが、然し正木先生の經過された時代は美術以外にも重要であり、而して先生の接觸された範圍は決して美術界に限られたもので無かつた。——先生が美術界を背負つて立たれた代表者であつた爲めに、猶更、當代の政界學界財界等の名流と密接なる交渉を持たれたので、先生の回顧にのぼり本書に浮び出て來る明治以來の不思議なる社會相、多數の名士の風心心境等は、驚く可く廣いものである。即ち本書の興味を美術上に限局することは本書にとつて、頗る不當であつて、讀書界一般に訴へるところ多きは、何人も直ちに認めざるを得ないのである。

余は、本書紹介の筆を擱くに際し、なほ健在なる先生が、



この回顧録の續篇を、口述出版されんことを希望して已まな  
い。何となれば先生の豊富なる経験は、本書のうちに盡され  
る筈はなく、余の如きが先生の曾ての談話より記憶するとこ  
ろでも、まだ／＼材料が山ほど残つて居るからである。

(昭和一二、四、二五 荒川区日暮里町三ノ一九六  
學校美術協會出版部 四六版 四一八頁 二・五〇)

岸田 國士 著

### 現代演劇論

現代演劇論といふ標題はあるけれど、學問的に論究した演  
劇論ではなく、「演劇に關する評論、感想、ノオトの類」を集  
めたものであることは、著者の名からも豫想されやう。しか  
し内容はかなりよく系統的に配列されてゐる。「演劇本質論」  
「現代演劇の諸問題」「裸の舞臺」「人と作品」「近代劇論」の五  
篇に集められてゐて、相當注意を拂つたことが窺はれる。こ  
れら五篇にふくまれてゐる長短數十におよぶ論説は、一貫し  
て「なぜ日本の新劇は健康に育たなかつたか」どうしたら日  
本に新しい演劇が生れるか」といふ問題に對して、あらゆる  
方面から答へやうとしたものであるといふ。

本書を読むものは、著者があの一種清新な独自の戯曲をも

つて、現代戯曲界を驚かした人であるといふことを、まづ念  
頭におく必要があるやうにおもふ。

本書巻頭の論文「演劇の本質」はやはり最も重要な、最初  
に讀むべき論文とおもはれるが、著者の新スタイルによる  
戯曲をおもひ浮べることによつて、最もよく具體的に理解す  
ることが出来るであらう。それはおよそ從來のドラマトルギ  
イの觀念を打破するものであり、演劇を一種の詩たらしめる  
ものであるといふことが出来やう。演劇は「魂の旋律」を  
現はすものであるとし、從來の見る芝居より聴く芝居に轉化  
したもののやうである。著者によれば新劇の發達は、まづこ  
の演劇本質の徹底的理解から出發しなければならぬのであ  
る。さうでなければ現代人に面白い芝居も、現代大衆劇も生  
れることが出来ないのである。

本書にはいはゆる劇評はない。「裸の舞臺」篇は舞臺の實際  
について論じたものではあるが、劇評ではなく、また個々の  
劇團・俳優について論ずることもないのである。

總じて本書は現代演劇の根本論であつて、實際的指導的な  
意味は稀薄なやうにおもはれる。しかし演劇當事者もこれに  
よつて幾多貴重な暗示を與へられるであらうし、一般讀者も  
現代演劇の本質、その動きに關聯して種々得るところがある  
であらう。

(昭和一二、一一、一五 神田區小川町三ノ八 白水社  
新刊 四七三頁 二・五〇)

伊原青々園 著

### 團菊以後

### 續團菊以後

兩書共同著者の前業「明治演劇史」に引き續くべき勞作  
で、同書が九世團十郎・五世菊五郎の相踵いで歿した明治三  
十六年頃を機に、一まづ擱いた筆を、再び此の兩書に於て書  
き續いだもので、凡そ大正改元頃で終つてゐる。乃ち以上三  
書が纏つて初めて一貫した明治演劇史が完了するわけであ  
る。本書は「明治演劇史」と同様、氏の得意とする劇評集で  
はなく、當時の劇界の消息を、親しくその渦中に生活して來  
た著者が思ひ出す儘に書き綴つたもので、著者の言に隨へば  
「劇界の太平記」であるといふ。尙叙述については「演劇  
史」のやうに堅苦しくなく興味本位に、寛いで昔の芝居を語  
る讀物といふ企畫でなされたといふ丈に、淡々たる筆致の裡  
に深い滋味を汲めるあたり、流石と思はしめる。「明治演劇  
史」は俳優本位に傾き過ぎてゐた點、同じ著者の更に前の大

著「日本演劇史」の殘滓めいた調子が窺はれて、あれでは興  
味を持てる人の範圍が極めて狭められる性質のものであつた  
が、此の兩書の如きは決して芝居に關心をもつ人丈に限らず、  
何人がいかなる角度から讀むとしても、興味を持ち得ると思  
ふ。先頃某新聞紙上、正宗白鳥氏が何か隨筆めいたものゝう  
ちに「下手な小説や、下らぬ文藝評論などを讀むよりも伊原  
氏の「日本演劇史」を拾ひ讀みする方がよつほど面白い」と  
例の調子でいつてるのを痛快な思ひで讀んだが、それより一  
層讀物にしてある兩書の内容は略々推し測られやう。

芝居といふ、語られてる世界は特殊で狭く、その時代は幾  
昔も古いが、然も本書の持つ興味の廣さと新しさは、時代を  
最も鋭敏に端的に反映する劇界の消長といふものを通して、  
興隆期の日本の色々な面が生々と覗かれる爲めで、全く下手  
な風俗史や經濟史等を読むより興趣は深い。編中屢々當時の  
新聞記者が出て來るが、明治から大正にかけて特異な劇評を  
以て好劇家の間に人氣の高かつた饗庭篁村の事が語られてな  
かつたのはどうした事であつたらう。ともあれ、吾が國歌舞  
伎劇最盛期の消息を傳へる人として、批判の中正と史眼の犀  
利な氏を、その雰圍氣の眞中に在らしめた事は、劇界の幸と  
しなければならぬ。恐らく引續き大正・昭和の演劇史にも及  
ばれる事と思ふが、氏によつて完成されんとしつゝある吾が



演劇史の金字塔は、同種の事業のうちにあつて最も信頼し、最も景仰さるゝ高さと充實に永く輝くであらう。

(昭和一二、四、一八 四六判 二七九頁)

昭和一二、七、一三 四六判 二七六頁

日本橋區通二丁目四 相模書房 各二・〇〇)

戸川 秋骨 著

### 能樂鑑賞

鑑賞といふことは素人には出来ないといへるかも知れないし、また素人にこそ出来るともいへるかも知れない。著者は後の方を信ずる人であらう。本書の隨筆篇の中で「名人の藝——世阿彌の言」を紹介して、名人の藝は何も知らない人にもわかるといふことばに、著者は絶対の信頼をよせてゐるのである。つまりは、愛好といふことに根ざしてゐるのである。『たゞそれ能樂に對する愛着に至つても同様不變であるのは、自分ながら喜んで居るところで、これは實に十年一日の如くといふ事が幸ひに長所となつて居るのである。』と「序言」にあるやうに、著者の能樂愛好心は、根強く深いものゝやうである。それなればこそ本書に見られるやうな濃密な鑑賞も出来るわけであらう。いはゞ素人にして専門家の域に達した

のであらう。だから素人の導きの書としてはこれぐらゐい、本はないのではあるまいかとおもふ。まづ著者の執拗なまでの愛着心が讀者に感染するであらう。鑑賞篇の中に「國産藝術」といふのがある。能樂こそ純日本國産の藝術であり、文化綜合の所産であるといふことを説くのであるが、どういふ意味でさうなのか誰にでもよくわかる。隨筆篇に「日本精神と謡曲及び能樂」といふのがある。日本精神なるものがどういふ風に現はれてゐるか、誰にでも明瞭によく解る。さういつた調子に何でもなくお茶呑み話風に淡々と語つて、しかもその眞實を了解させることは實に手に入つたものである。名人の藝とでもいへるのかも知れない。「喜多六平太論」といふ一篇がある。これも論といふやうなしかつめらしいものではない。たゞ喜多氏を語つてゐるに過ぎないものであるが、喜多氏を知らない讀者までが、ついつりこまれて喜多氏を名人と思ひこんでしまふかも知れないのである。それほど著者の話術は何氣なくうまいのである。だから、本書を讀んだら、謡曲をちつとも知らない人でも、能樂を一度も見たことのない人でも、好きになるかも知れないし、見たいといふ氣持をおこすかも知れないし、或はわかつたやうな氣持になる人があるかも知れない。とにかく、素人に最も親しめるこの種の本として奨めるに躊躇しないのである。

(昭和一二、一、一〇 神田區神保町三ノ六 謡曲界發行所  
四六判 二二七頁 一・九〇)

坂元 雪鳥 著

### 能樂筆陣

巻頭に「日本精神研究資料としての謡曲」と云ふ一文がある。が、之は決して時局に刺戟されてあわただしく出来上つたと云ふ様な巧利的な場當りのものではない。昨年の秋國史回顧會に於てなされた講演であつて、謡曲に六百年の生命を保たしめ、而も今日それが終局に立至つたのではなく、今尙ほ活き／＼として貴賤老幼男女の間に生命を保たしめて居るものは何か。著者は之を説明する物に日本精神をもつて來てゐる。然しこゝに謂ふ所の日本精神とは、決して強い積極的な目的意識を持つたものではなく(言葉は代へて云へば時局向の日本精神ではなく)もつと落ちついた日本の民族精神と云ふ様なものである。この日本民族精神に培はれて、と云ふよりも謡曲そのものがこの日本民族精神をベツクとして生れ、そして發達したものであるが故に、斯くも長い生命を保ち得たとするのがこの著者の論調である。そんなやうなわけで、此の一篇は仲々の大論文であると共に、本書一卷としては

計らずも緒言の立場をなすもので、この一篇に謡曲に對する著者の態度がまことによく現はれてゐる。その他本書には「萬葉集から謡曲へ」「現代の能より見たる世阿彌」「能樂師の社會的地位」「能樂鑑賞の早期教育」初め十數篇が收められてあるが、何れも既に雑誌などに發表されたもので、殊に雑誌「能樂」に出たものが多い。書名の「筆陣」に對して「そんなに凄く闘争的なのではない」と評する人もあるが、やはり一流の能評家らしい颯爽とした所があつて「筆陣」必ずしも悪くはないと思ふ。殊に本書には能樂拜見記と云ふ様なもの、或は個々の能樂師の演能に對する批評等は一切載つて居らず、能論・能の歴史的研究・能評論等を主としたものであるから、その意味でも「筆陣」の名に合ふたものと思ふ。

(昭和一二、九、二五 神田區神保町三ノ六 謡曲界發行所  
四六判 三〇七頁 二・二〇)



イリオン著 玉城肇譯

## 書物の歴史

この本は元來子供の爲に、或は知識程度の餘り高くない労働者の爲に書かれたもので、既に一度同じ譯者に依つて譯出されたものである。が、前譯は子供の讀み物としては譯文が餘り適當でないと云ふ理由の下に、今回改譯をして出版されたものである。

昔、未だ文字も發明されなかつた勿論紙も印刷術も發明されなかつた時代に、日本でも語部と云ふ部曲があつて、不思議な物語りを父から子へ、祖父から孫へと語り傳へられた。その時代には人々は字を書くことを知らなかつたが、その代りこの語部が、今日の書物と全く同じ役目をしてゐたのである。この様な事實は日本だけではなく、世界の何處にでもあつた事柄である。之を本書の著者は「生きてゐる本」とか「人

間書物」とか呼んでゐる。

この本では書物の歴史の一番古いところを、この生きてゐる本「人間書物」に持つていつてゐる。それから文字が發明され、紙が發明され、紙が發明され、最後に印刷術が發明されて今日の様な書物が出来るのであるが、本書では紙の發明までが記されてゐるが、印刷術の發明までは及んでゐない。唯前譯書では原文に從つてこゝで終つてゐるがこの改譯本では、附録「現代の書物」として、更に「日々」に作られる書物「新聞」「書物の母」印刷「書物の宿」圖書館の三項目が設けられて、近代印刷文化に關する記述が譯者の手に依つて補充されてゐる。原著者の自ら描いたと云ふ挿繪は仲々興味を添へるが、時々出て来る横文字は（之は日本文字に直しては意味のない場合が多い）日本の子供の本としては稍々理解に難いと思はれるかも知れないが、こんな場合は極く少く、假令出て來てもそんな横文字は飛ばして讀んでも一向差支ない。相當高級な知識をこれ迄に平易に書いたものは餘りあるまいと思はれるから、是非一讀さるゝことを薦め度い。程度

は大體中學初級生向と云ふ處である。

（昭和一二、一〇、一八 豊島區長崎町三ノ四六二 扶桑閣  
四六判 一七〇頁 一・〇〇）

菊池 寛 著

## 文章讀本

本書は昨今世に喧傳されてゐるものである。本書を通讀して誰しも菊池氏の力作とおもはないであらう。あまりにあつさりしてゐて、氣の抜けた感じのものである。この中に菊池氏の平素の持論なり、もしくは氏の性格なりが出てゐないわけではない。明瞭に出てはゐるが、それが力の籠つた現はれ方ではないといふまである。このやうな著作は或は氏を俟つまでもないといへるかも知れない。しかしながら翻つておもふに、氏の如き多年の文學修業をした人にして、而も遂にかくの如き平々凡々たる文章道の大道に立たれることの意義はまことに大きいのである。本書を奨める意義も全くこゝにかゝるのであつて、常識として一蹴されないのである。文章について、世人さらに文學者が如何に誤つた考へに陥つてゐることか。平明、簡潔、適確といふ文章道の大道が如何に實際において忘れられてゐることか。それゆゑ本書の「文章鑑

賞篇」においても文學作品の文章によるよりも、むしろ新聞、雑誌等日常世人の眼にふれ易いものに文例を取つて、或は名文を紹介し、時には悪文を指摘した方が一層ふさはしくもあり、有効でもあつたのである。本書に「書翰文指導篇」のあることも、實用を主とする本書の趣旨に基いて大いによいとおもふが、單に書翰ばかりでなく、日記とか感想文とかに至るまでの指導が欲しかつたとおもふ。

とにかくいろいろの不備不満はあると思ふが、本書が「文は人なり」より出發して、また「文は人なり」の結論に還るまでの論旨は、全く同感といふのほかないであらうし、著者の淡々として語る文章の大道は、世人の誤れる文章觀を破壊することに、大いに役立ち得るであらうと思ふのである。

（昭和一二、六、一 麹町區内幸町大阪ビル モダン日本社  
菊判 三七七頁 一・五〇）

久松 潜一 著

## 日本文學の精神

自序によると「この書は精神史としての國文學を研究の態度とする日本文學史の體系への一つの試みである。體系の完成は今後にまたなければならぬが、さういふ立場による一つ



の體系を念頭に置いて見えざる縁によつて貫かうとした」と述べられてゐるが、著者は本書に於て特に「日本文學の精神」として、外國文化の影響を受けない古典によつて純粹日本的なるものを究めることに、日本的なるもの、内容を求めず、更に外國文化の影響をうけて、而もなほ創造されてゆく日本的なるものは何かといふことを明らかにすることがより重大であると力説してゐる。著者はこの日本的なるもの、國民が創造してゆく方法或は態度を名づけて民族論理、古典精神と云つてゐる。そしてこの古典精神を明らかにすることが、本書の目的の第一である。

その一例として、著者は平安朝文學にける「ものゝあはれ」を論じ、この精神は形象を異にしてはゐるが森鷗外の作品にあらはれてゐる。即ち西歐的な浪漫主義の影響を受けながらも、そこに「あはれ」の傳統が見られる。明治の浪漫主義は「あはれ」の現代的様式であると述べてゐる。

かくの如く日本的なるものを考察する態度を述べた後、一步を進めて日本的なるものを創造せしめる一つの態度ともいふべきものをあげて、日本文學の一つの特質として、形象と精神との關聯の上から見て、最大の内容を最小の形に表現しようとする所に、日本的なるものを見ようとしてゐる。

又、日本文學の思想性として、日本文學の主情的・情趣的

なるものゝ中に思想が存し、非論理的に、もしくは非體系的な形として現はれてをり、そこに綜合的・一元的な思想形態をみることなし、日本文學の道德性・宗教思想・國家思想・自然への參入をあげてゐる。

以下、各時代の文學の基調をなしてゐる文學精神、即ち奈良朝における「まこと」、平安朝における「あはれ」、室町時代における「幽玄」等を考察し、これによつて各時代の作品を論じたものである。

(昭和一二、九、二九 京橋區銀座一ノ五 大日本圖書株式會社  
四六判 二八六頁 一・〇〇)

中河 與一 著

### 萬葉の精神

日本が新しく發展しようとするこの機に於て、我が國の有する古典から民族精神を感覺しようとする運動が叫ばれてゐる。それは日本の文化性格の認識に立脚して、文學の傳統の中に屹立する精神を求めた。かくて、我が國の最も高揚せられた文化と美の象徴を萬葉集にのみ、萬葉の精神に見出すのである。この思想的立場より、諸雜誌・新聞等に發表した著者の論說・隨筆の類を集めたのが本書である。

著者は現代の小説家として、千九百三十六年度の文壇が、病氣への禮拜に終つた事を思つて、今日の時代に於ける最大の象徴をそこに感じたのである。それは現實主義の最も悲惨なるゆきつまりであり、健康な世界を憎惡する者への禮拜に行きついたかの如くであつた。恐らくこれは最も激しい文學の衰弱の徴候として、文化意識を拒否したものととして、文學史上に特筆すべき現象にちがひないと云つてゐる。この惡時代に於て、過去ではなく現在に生きる力として、古典に觸れ、吾々の血に流れる民族の意識を感じて、健康な同胞觀念を取りかへさなければならぬ、と云ふのである。

著者に依れば、日本の文化は常に外國の文物を攝取し滋養として發展してきたのであるが、その底には恒に貫くものがあつた。それは「ますらをぶり」の日本的性格であり、ひたむきの心懷であり、民族としての高邁な精神である。日本文學の美の血統は萬葉に於て元始を見出されるとし、そこに最も登りつめた文化の美を感じ、日本人の最も高揚せられた美の系譜を見てゐるのである。眞淵も新古今から萬葉に歸り、宣長も源氏物語から遂に萬葉に歸つたと云つてゐるやうに、この著者もまた近代の小説から雄大な萬葉の精神に廻らうとしてゐる。そこに高揚された時代の眞の藝術精神への郷愁を感じるのである。

この意味から、「萬葉ギリシヤ」「民族と文化」「美の傳統と新日本主義」「萬葉への思慕」「萬葉浪漫」「萬葉名歌解」等の文化的乃至文學的批評が爲されてゐる。民族主義的な思潮を把住し、謙虚に「萬葉の精神」を闡明し、その藝術意蘊を今日に生かさうとする「決意」の書として、知識階級者の一讀に價するものである。

(昭和一二、七、二一 京橋區京橋交又點第一相互館内  
千倉書房 新四六判 三一五頁 一・三〇)

芳賀 檀 編

### 芳賀矢一文集

芳賀矢一博士は明治の國文學の先驅者であつた。博士の生涯は近世の國學の傳統に根ざして我が國文學・日本學の啓蒙樹立に捧げられた。その國學の開拓に當つては、西歐の學問にも精通し、總てを綜合する博覽強記の人であつた。今度、博士の没後十週年に當り、それを記念するために刊行された「芳賀矢一文集」は先生の巨大なる足跡を追慕させると共に、この一代の國學者の功績を再考させるものである。

本書は千頁に垂んとする大冊であるが、雜誌に講演に發表された國語・國文學に關する論文あり、外遊の隨筆あり、漢



詩・和歌・俳句等あり、また未発表の日記・書簡の類まで集  
輯されて、この一巻にしてよく博士の聲咳に接するが如き感  
あらしめる。その國學に寄する熾烈なる情熱と、古典に對す  
る該博なる蘊蓄と、國を思ふ忠誠と、人に寄する厚情とを、  
隨所に窺ふことが出来る。

就中「國學とは何ぞや」「當代國學者の一任務」「和歌と近  
古小説」「萬葉集を經典とせよ」「國學普及の必要」等の諸論  
文には、博士の抱懐する思想と創見とを知り得、「國文學にあ  
らはれたる狐」「今昔物語中の犬」「七福神の話」等口碑傳説  
に對する興味ある研究攷證の類あり、又近世國學者の遺業を  
尊崇記述してゐる。追憶文・詩歌・書簡等は情の人としての  
先生を偲ぶに足るものである。日本精神の檢討される今日、  
本書の刊行は、實に時期を得たる良書である。

(昭和一二、二、六 神田區神保町一ノ三 富山房  
菊判 九九一頁 三・五〇)

長塚 節 著

### 文學讀本 春夏秋冬

本書は第一書房刊行のいはゆる文學讀本の一編をなし、同  
郷のロシア文學研究家である中山省三郎氏が多年に亙る節研

究の結果編纂せるところのものである。例によつて月別に按  
配され、據るところは節全集以外の新資料にも及んでゐる。  
小説・短歌その他の文章によつてゐるが、何といつても短歌  
が最も多く、小説は名作「土」によるところ最も多い。本書  
には齋藤茂吉氏の「序」があり、卷末には中山氏の懇切な「あ  
とがき」がある。

節は短歌において晩年、氣品冴えといふことを唱へた人で  
あるだけに、短歌においても、小説文學においても、高雅な  
氣品と清澄な冴えとを感得することが出来るのである。「土」  
はあまりにも有名であるが、今日においていよ／＼尊重せら  
れるかの奇觀を呈してゐる。短歌においては晩年の作品「誠  
の如く」二百餘首は最も珍重せられるところであるが、なん  
といつても古今の逸品たるを失はないのであらう。本書には  
月別に適宜題名を附してその全貌を掲げてゐる。その繊細透  
明清澄な作風は、短歌愛好者を今更に魅惑するのであらう。

節は旅行好きであつた。その著名の足跡の普きことは屢々  
旅行家をさへ驚かすほどであつたが、それが到る所短歌とな  
つて現はれてゐるのである。本書によつて、それら旅の歌を  
楽しむことが出来る。

節は三十七歳の短生涯であつたが、あのやうに貴重な文學  
的功績を残すことが出来た。本書は優にその功績を壓縮して

示すに足るものであるとおもふ。文學讀本として好箇の一編  
であると信するのである。

(昭和一二、九、二〇 龜町區三番町一 第一書房  
四六判 四〇一頁 一・五〇)

正岡 子規 著

### 文學讀本 春夏秋冬の卷

數ある第一書房文學讀本中の正岡子規の分である。本協會  
においては、さきに島崎藤村の分を推薦した。おもふに斯の種  
の文學讀本は教科書讀本式の形式のものであるから、第一に、  
内容に變化がなければならぬ。次に讀んでおもしろくもあ  
り、かつ一つ一つが何かしら纏まつた感じをあたへ、全體と  
してその人の全貌が窺ひ知れるといふやうなものでなければ  
ならぬものとおもはれる。それには詩歌文學の人のものな  
ど最も好適なものはあるまいか。小説の一節一節を並べたよ  
うなものとはなく散漫な、とりとめのない感じをあたへ、  
結局成功しないのではないかとおもはれる。

子規はいふまでもなく明治俳壇歌壇の巨星であり、今日の  
源泉として輝く存在であるが、その著作は、俳句・和歌・詩・

小説・隨筆・俳論・歌論・評論等多方面にわたつてゐるので、  
その編纂はたしかに興味あるものと豫想されるのである。  
編者は河東碧梧桐氏であるが、おもへば碧梧桐氏も今はなく、  
この書も思ひ出の種となつたわけである。

この春夏・秋冬兩卷にわたつて見るに、まさに子規の全貌  
を窺ひ知らしめるに足るといつてよい。たゞ歌人としての子  
規に幾分薄いの感じはあるが、これも編者が俳人であること  
から止むを得ないのであらう。とはいつても、有名な「歌よ  
みに與ふる書」も全部「春夏秋冬の卷」三月の部に出てゐるし、  
子規が短歌革新論者としての風貌を知るには、全篇を通じて  
さほど不足はないのである。たゞ今すこし短歌の抄録を多く  
やるべきであつたとおもはれる。しかしながら、子規の面目  
は、結局は俳句の革新者にあつたのであらうから、これとて  
も不足はいへないのかも知れない。俳人としての子規は十二  
分に打出されてゐるといつてよい。この二卷を讀めば、充分  
に子規に親しむことが出来る。

(昭和一一、六、二〇 龜町區三番町一 第一書房  
春夏の卷 四六判 四九七頁  
秋冬の卷 四六判 四六八頁 各一・五〇)



河井 醉名 著

### 明治代表詩人

詩壇の耆宿河井醉名氏が身みづから経験した明治詩壇の回顧から、島崎藤村・蒲原有明・薄田泣菫・山田美妙・宮崎湖處子・中西梅花・北村透谷・横瀬夜雨・伊良子清白・兒玉花外・前田林外・三木天遊の十二名の日本詩人を撰んで記述したものが本書である。

大體明治の詩人達は何ういふ仕事をしたか、何ういふ生涯を送つたか、また何ういふ詩の變遷を來たしたかといふことを知るには、本書は便利な本で、著者自身も亦「文庫」派の詩人として明治の代表的詩人に加へられて然るべき詩人であるだけ、それらの詩人達と交友の關係もあり、その生涯と交渉のあるものがあつて、流石に明治詩壇の雰圍氣をぢかに讀者に感じさせるものである。

日本の詩が西歐の詩風の影響の下に「新體詩」として始まつて以來五十年に垂んとするが、この初期に當る明治の詩人達の氣魄にも風格にも飛躍的なものがあり、その独自の野心ある詩風を開いて行く道には、生活的にも思想的にも、苦難の多いものであつた。彼等が何ういふものから詩歌の心持を

培養し、如何なる方向を示したかを、個々の詩人の場合に應じて記述しながら、その環境に身を置いた人の理解と同情を述べてゐる。

本書の中には尙代表的詩人として加へられて然るべき四五人の人が洩れてゐるが、それは著者の今後にまつとして、兎も角明治詩史として見るべきものである。その潤ひある平明な筆緻は、大多數の詩歌に志す初心の人々に、啓蒙の資となるものであることは疑ひない。

(昭和一二、四、一五 麹町區三番町 第一書房  
四六判 三七二頁 一・五〇)

土屋 文明 著

### 短歌入門

短歌入門といふやうな本は澤山あつて、それこそ汗牛充棟であらうが、感心されるものはあまりない。いはゆる宗匠式なものが多いのである。土屋氏のこの本はそれらの中で嶄然光つてゐるのである。近來出たものの中では、おそらく一二といふべきものではないかとおもふ。

本書に收まつてゐる諸篇は、それぞれの場合にそれぞれの形式で話されたり、書かれたりしたものであつて、一貫して

(昭和一二、四、一〇 神田區駿河臺二ノ一〇 古今書院  
四六判 三五六頁 一・五〇)

徳田 淨 著

### 萬葉集撰定時代の研究

本書は萬葉集の撰定時代といふ特殊の研究である。著者のいふ如く萬葉集撰定時代の上下はわが國文化發達の遲速といふことを意味するのであるから、國民文化史上重要事項であるにはちがひないが、普通一般の人にはあまりに特殊研究でありすぎるかも知れない。しかるにも拘らず今回これを推薦する所以は、萬葉集が國民的古典として世界に誇るべき一大歌集であることは無論のことであるが、わが國民で一般に歌を愛することおそらく世界無比であり、加ふるに今日古典文化の再檢討期に際して、意外に多くの人々が古典に心をよせつゝある現状を顧みて、この種特殊の研究を推薦することも意義あるべしと考へたからである。

本書が學問的に優れた業績であることは、例へば『文學』十一月號森本健吉氏の紹介にも明かである。専門的見地からの論評はそれらの紹介文に譲り、こゝでは本書の中特に

纏めて書いたといふものではないが、全體としてよく短歌入門の體をなしてゐるとおもふし、その内容からいつても入門書として盡してゐるやうにおもふ。配列の工合などでも「短歌手ほどき」「短歌の味ひ方作り方」「添削と批評」「初心者のために」「應募歌選評ラヂオ歌壇」といつたやうに、前半はほんの初學の手引きにし、後半には「短歌概論」とか「現代短歌指針」とかいつたやうな高級なものを配してゐるのである。前半についていへば、行きとどいたよゝい指導であるといふのほかない。實作について示しながらよく初心者の心眼を開くやうに導いてゐる。もとより著者はアララギ派の重鎮であるから寫生説によつてゐるのであるが、現代短歌の主流が寫實にあることはおふべくもないことであるから、この指導の立場は當然であり、また短歌といはず藝術の本道が究極において實寫の道であることにも疑ひないであらうから、著者の立場はこの意味も是認してよゝいとおもふ。後半の「短歌概論」は曾て短歌講座に執筆せるとき賞讃を受けたものであるが、まことに簡にして要を得、内容充實せる堂々たる力作といはなければならぬものである。しかし初學者に充分理解出来るかどうかは問題であらう。「現代短歌指針」は明治以來の短歌史を簡単に語つたものである。そして現歌壇の諸派の作風



一般人に興味あるべき部分についての紹介にとゞめよう。

本書「主要篇」中最後の「萬葉集の成撰事情」一篇は一般の人々の就いて讀むべきものである。こゝでは本研究の結論を叙説してゐるのであり、普通の人にも充分に興味あり、得るところ多きものである。諸詩集・歌集の撰集は史書の成撰と歩を共にして行はれたものであり、萬葉の選定も三度を數へることが出来るといふ説はまことに秩序整然としてをり、いろいろ示教に富むものである。「参考篇」の三篇、これまた何れも専門的論攻であり、同じく緻密丹念を極めたものであるが、それぞれ讀んで多くを教へられるのである。例へば短歌形態の成立を支那歌謡の絶句との關係に結びつけて詳論したり、反歌を都會知識歌人の技巧と見たり、高橋蟲麿を天平中期末期の歌人と考證しなりするなど、少くも歌を好む人たちは、無限の興味と示唆とを與へるものである。

(昭和一二、九、三〇 神田區駿河臺三ノ一 日黒書店  
菊判 四〇二頁 四・〇〇)

川田 順 著

### 吉野朝の悲歌

「皇國の興廢を決する大事が、私等の眼前に展開しつつあ

る。」「此秋、適切なる題目に向つて一心を凝集したならば、日本民族の傳統的精神を昂揚する上に、大海一滴底の供物には成り得ようと考へた。かうして、着手した仕事は吉野朝廷の君臣が血を吐く如き倭歌の粹を抜いて、それらへの解説及び感想を述べた小著を公にする事であつた。」(緒言) 歌人川田順氏の熱血おもふべしである。

本所に所載の歌の作者は、後醍醐天皇以下六十六人、歌數百九十三首に及んでゐる。多きは後醍醐天皇御製二十三首、宗良親王御歌三十首、臣下では藤原師賢十一首、藤原師兼七首、藤原冬實並に花山院長親五首等である。

本書を草するに當つて著者はまづ正史たると野史たると物語たると傳説たるとを問はず、これを讀破して當時の時勢を知り、和歌の蒐集に當つては新葉和歌集と季花集とを最大必要の資料とし、更に其の他の歌書を涉獵した上、歴史物の中に挿入された和歌の全部に眼を注いだといつてゐる。その精力思ふべく、その勞苦察するに餘りある。本書にはなほ「吉野朝和歌概説」「宗良親王御紀」「吉野朝文學年表」等の附録がある。

宗良親王は新葉和歌集の撰者であらせられ、季花集はその御家集である。著者は親王を俊成・定家以來の大歌人であらせられると讃仰し、「宗良親王御紀」は讃仰の誠凝つて成れる

力篇である。著者は作家にして史家に非ず、不備誤謬が多いに相違ないと卑下するも、或は十分に史家の一研究資料たるに値するものではないかとおもふ。もしそれ、歌の採擇及びその解説に至つては、著者の作家としての眼力並に學識に、十分信頼してよいものである。

本書は哀切極まりなき吉野朝の名歌に國民を親ましめる、まことに時宜を得た好著述である。

(昭和一二、二、一 龜町區三番町一 第一書房  
四六判 二八九頁 一・五〇)

齋藤 茂吉 著

### 柿本人麿 評釋篇 卷之上

本書は昭和九年十一月、同じく岩波書店によつて上梓された「柿本人麿・總論篇」に次ぐもので、人麿の全作歌の研究である。收むるところは萬葉集中、柿本朝臣人麿作歌、柿本朝臣人麿歌と題詞にある長歌短歌、右柿本人麿作、或云柿本朝臣人麿作と左注のある長歌短歌及び藤原宮之役民作歌、藤原御井歌一首並短歌、日並皇子尊宮舍人等働傷作歌二十三首の作者不詳ではあるが、人麿の作歌的關係ありと云はれるもので、此等に評釋を加へたのである。

評釋は、題意・語釋・大意・鑑賞の四部に分けられてゐる。最も注目すべきは能ふる限り古今萬葉學者の學說・文献の記載に努めたことで、以て萬葉學發展の経路を知る上に貢獻すると同時に先賢の學德に敬意を表せんとしたものである。このことは從來の諸注釋書のひとしく怠つたところであるが、自著を以て「人麿百貨店」となさんとする氏の熱意を裏付けるものと云ふべきである。なほ氏はこれに止めず、更に外國人の手になつた外國語翻譯をも記し、翻譯歌に關心ある者の利便に資せんとしてゐる。尙ほ著者が本書を世に送るに當つて抱懐する自信の程は、其の序文の中の一節に見られる。

人麿の歌を味ふに、歌のうへを慌しく驅歩し駈抜けては味ひ難いといふことがある。これは幾たびか低徊し、往反し、執着し、肉迫して味ふことが必要である。吾等が苦澁するやうなものではないが、人麿は作歌に際して全力を振つてゐる。ゆゑに鑑賞に際してその苦心の幾分にも參ずることが必要である。吾等はこれまで餘り安易に歌の上を通過して來た。人麿を歌神と敬ひ歌聖と尊びながら、人麿の評價が常に動搖して止まなかつたのは鑑賞の覺悟がいまだ微不至なためであつた。若し人々が本卷の評釋の如き煩瑣繁縟なる記述の中に入りつゝ、不意識のうちに人麿に近づき積聚の力が養はれゆくだらうと想像することが出来る



なら、現在の學界、歌壇にこの一卷の存在を認容してもらつていゝやうな氣がしてゐる。  
こゝに本書を推す所以のものも亦、この著者の言の中に含まれてゐるものである。

(昭和一二、五、一〇 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店  
菊判 一〇九四頁 五・五〇)

川田 順 著

### 晩 來 抄

本書は著者が實業界を引退し、老後を歌道へ専念せんがための記念に編まれた自選歌文集である。歌あり、隨筆あり、研究あり、評論あり、感想あり、詩ありといふ風に千紫萬紅、まことに面白い文集である、而も著者が自ら選擇を加へたものであれば、おそらく氏の傑作選集といつていゝものであらうし、或は世に示す自信をひそかに包藏するものではないかともおもひはかられるのである。本書はたしかに、氏の三十餘年に亘る勞作の粹を集めたものといつていゝし、この一卷を讀みつくせば、著者の全貌を理解し得るといつてもいゝとおもふ。

著者は歌人たることに限りなき歎びと自負とをもつてゐら

水原秋櫻子 著

### 現代俳句論

著者が「ホトトギス」系統の俳人として現代における鮮々たる俳人であることは、周知のことであらう。その一種清新な美しい俳句は、何かしら現代人の好みに適するものゝやうである。氏は現今俳壇の寵兒であるといつていゝであらう。氏もおそらくはそのことを自覺するものゝ如く、「ホトトギス」の山口誓子氏と轡を並べて、現今俳壇を指揮するが如き意氣を示してゐる。

本書は現代俳句論と題してあるが、現代俳句の鑑賞や作法を主として説いたものであるといへる。「本質に關する諸考察」「作法雜記」「俳句の評釋」の三篇となつてゐる。第一篇の本質論が實は最も重大なものであり、定型や季題の問題が扱はれてゐるのであるが、本書ではこれらは至つて簡單に取扱はれてをり、定型・季題に對して疑ひをもたない態度を表明してゐるに過ぎない。著者の説へる現代俳句の特色は、主として題材と表現とにおいて現はれるのである。

樂ちがたき雪溪と見れば霧かかる  
雪溪をかきくらしゆく霧絶えず

れる人である。本書にも勿論歌が最も多い。氏が竹柏園門下の逸材であり、現歌壇の異色であることは周知のことであるが、本書の歌を讀んでみれば如何なる歌人であるかよくわかる。歌ばかりでない、研究・評論・感想の類を讀んでも、氏が努力の人であり、而も猛烈な意力の人であることがよくわかるのである。實業界における氏の業績は何等知るところはないが、おもふに實業界における意力精力がまたそのまゝに歌の方面にも發露したものでないかとおもふ。歌は氏にとつてまさしく趣味ではあらうが、その作歌の努力はいはゆる趣味といふやうな生やさしいものではない。いはゆる全力的なものである。研究・評論においてもさうである。このことは讀者を壓倒するに足るものがある。よしんばその歌道において、その見解において異論のある人であつても、その精力的な氣魄と熱意とには打たれざるを得ないとおもふ。この著者に「利玄と憲吉」の著あることは宜なりとおもはせる。

本書はまさしく近來讀むに足る著といふべく、讀者は何人もそれぞれの意味において得るところ多大であると信ずる。  
(昭和一二、九、二〇 龜町區三番町一 第一書房  
四六判 三二二頁 一・五〇)

雪溪に徑はありけり踏みゆけば  
なほ高き雪溪が霧のひまに見ゆ

このやうな氏の俳句を見る人は、その題材と表現とにおいて、在來のいはゆる俳句らからざる一種清新の感を受取るであらう。俳句のいはゆる佗び・寂びを拂拭したものである。現代人の自由な美感をよび起すもの、その十七音自然詩といふことになるのである。題材は廣汎となつた。例へば「野球」「熱帯魚」まで取りいれられるやうになつた。表現においては、短歌や詩の表現に學んで語彙の豊麗・典雅・清新を心がけ、特に「調べ」を重視するのである。なほ連作などにおいては技工的・構成的な意圖が著しく現はれてゐる。

菊の香や鶴はしづかに相よれる  
白菊に立ちそふ鶴も澄みにけり  
鶴の來て翼伸べたる黄菊かな  
菊の傘鶴の佇む影さして  
菊日和夕さむくして鶴鳴けり

このやうな連作を見ると、一つの完成した美を感じるではないか。しかしながら、おそらく俳句の問題はまたこゝから出發するのではあるまいか。

(昭和一一、八、一五 龜町區三番町一 第一書房  
四六判 二八五頁 一・〇〇)



芭蕉

芭蕉の傳記又はその俳諧を研究したものは數多く刊行されてゐるが、更に齋藤清衛氏の秀れたる芭蕉傳を加へることになつた。序文によると本書は入門者のために書かれたもの、由であるが、比較的小冊子で芭蕉の生涯及びその俳諧の本質を取扱つたことは、確かに入門者にとつて便利である。しかし内容から云ふと必ずしも入門者のみの芭蕉傳ではなく、著者が充分な努力を拂つてゐることがうかがはれる。

就中、従來の芭蕉傳が等閑に附し勝ちであつたところの蕉風確立以前の芭蕉の生活に充分な考察を加へたことは注目すべきである。元來、芭蕉のこの時代の傳記は詳細に傳へられてゐない。芭蕉の生誕地、伊賀藩脱藩の原因、在京都時代の動靜、江戸出府の理由、江戸到着後の生活等の諸點は一世を風靡した俳聖であるに拘らず不思議にも正確に知られてゐない。著者はこれらの諸點の説明に從來傳へられてゐる諸説を網羅し、著者の妥當と信するところを述べ、必ずしも斷言を下してゐないのは、本書の價値を高めるものであらう。因にこの芭蕉傳中未詳の時期のあるのは、芭蕉が自らを語ることに

尠なかつたが故ではあるまいか、と著者は述べてゐる。

元來、著者は和歌及び中世國文學の研究を以て知られてをり、従つて芭蕉の研究はやゝ意外の感がある。しかし既に本會に於て推薦した著者の東海道、中仙道、東北の徒歩旅行記三部及び「東洋人の旅」を一讀した者は、芭蕉の研究は著者に打つてつけのものであると思ふであらう。現に著者は「東北の細道をゆく」に於て、芭蕉が「奥の細道」で行脚した各地に立よつて俳聖の佛をしのんでゐる。

本書は傳記と俳諧の部とに分けられてゐるが、傳記が主眼となつてゐる。恐らく小冊子にしてこれ程に充分に芭蕉の生涯を述べたものは尠いであらう。芭蕉の全面目がよく傳へられてゐる。俳諧の部は蕉風の本質を検討したもので、芭蕉の説いたさび、しをり、不易の三點を取扱つたものである。この方面の研究は類書も多く、必ずしも本書は功を加へたものではあるまい。

(昭和一二、九、一〇 中野區江古田一ノ二〇五四 樂浪書院  
三五判 二六〇頁 一・〇〇)

飯田 蛇笏 著

穢土寂光

の文章を悉くはせる、醇化された作品である。俳句的な寫生と、幽玄閑寂の境地を喜ぶ人々の好讀物である。

(昭和一一、一二、二〇 牛込區柳町二四 野田書房  
四六判 三九七頁 二・三〇)

坪田 讓治 著

風の中の子供

坪田讓治氏は幼年期から少年期にかけての子供の世界を描寫するのを最も得意とする。大人の讀む小説の中へ子供の世界をとり入れた異色ある作家である。子供に取材することは從來も多くの作家が企てゝゐるが、氏が描くのは私達の周圍に絶えず跳ねまはつてゐるあの逞しい野性を發揮する子供であつて、その點では他の作家と大分違つてゐるやうである。

例へば山本有三氏の描く少年は、いち早く人生行路難の重荷を負はされて、これを反撥して行かうとする、暗い影をひいてゐるものが多い。中勘助氏のものも、豊かな環境に伸々と育つた、素直で純な童心の世界である。坪田讓治氏は、これらの作家が未だ扱つてゐない、街上に、野原に、わめきつゝ駆けまはる子供をとりあげてゐる。

子供の生活の寫實的な描寫が大人の讀者を喜ばせる事は甚

「雲は、今日も出で、峽をたゞよひ、青空を流れて朴の梢に搖曳する。蝸虛のあるじは、眼を大事に緑青の卓蔽ひをよるべとして、想念を驅るひま／＼に、軒端から遠く、ゆく雲をながめては、出で、林間に幹を叩く。清閑の心境、ひたに、爰に安んずるのである。」

これが著者の心境といつてよい。

甲府山中人煙遠きところに山廬を構へ、悠々自適、俳三昧に耽つて、現代の隱士の面影を宿すのが、著者の姿であり、清逸の妙想、時に凝つて一書を爲したのが、「穢土寂光」である。

この書に收むるところ、「田園生活」「山郷雜記」「村山風景」「山賤菜」の數十篇、何れも著者の生活環境から生れた隨筆ならざるはない。

その、雲を友とし、雨を歌と聴く、閑靜な生活からの所産は、煩雜なる現代生活には得難い風趣を藏するもので、讀者は居ながらにして、山中の靜寂を、しみ／＼と味ふことが出来、そこに漲ぎる清冽な一脈の氣配に、感興盡きざるものがある。

また無邪氣なる村童の生活を主題とする「幼時」の十篇、山間の村落の出來事を愛情を以て描ける「小品」の九篇は、ふしぎなほど、迫眞性をもつたリアリズムの世界で、長塚節



だ大きい。この「風の中の子供」は「朝日新聞」に連載されて非常に好評を博した。近來頃に児童心理や児童の取扱ひ方等に大きな關心が拂はれてをり、さうした種類の出版が數多く、世の親の心がこの方面に活潑に動いてゐるといふやうな點にも大きな原因があらうし、又童心の美しい世界に心を打たれるといふ點にも由來しやうし、とにかく、かうした子供の世界に取材した作品が多く出てくるのは喜ばしいことである。氏のやうな終始一貫して、子供の世界ばかり描いてゐる作家が文壇に地歩を占めるに至つたのも、うなづくことが出来る。

本篇は利権争ひに關ぐ大人の世界の淡彩な描寫を背景にして、善太・三平といふ兄弟の野性と感受性の交錯した世界を描いたものである。就中三平は讀者を非常に喜ばせる。何人をも樂しませる作品である。

(昭和一一、一二、二〇 四谷區坂町七八 竹村書房  
四六判 二三八頁 一・二〇〇)

武者小路實篤 著

### 楠木正成

本書は武者小路氏の「楠木正成」である。周知の如く楠木

正成についての大家文學作品としてはほかに直木三十五、大佛次郎兩氏のものがあり、前者はさきに本協會の推薦するところであつた。本書は文字通り武者小路氏の「楠木正成」であり、前二作に並べてまた独自の面目をもつものである。氏の作風はいふまでもないが、本書の「後書き」にも書いてあるとほり、人間の心を書くことを主とするのであつて、本書について見ても個々の場面や情景を描くことよりか、正成の一貫した美しい心を書くことを主としてゐる。作者が正成になりきつてゐるといつてもいいが、正成が作者か、作者が正成かの感を、この作品でも抱かせられるのである。しかし讀みとほして作者の現はさんとした正成の美しい心がしんみりと傳つてくる。巻を終へてしづかに、あたゝかい涙をさそはれるのは、さすがに作者の筆力といはなければならぬ。

筋は藤房卿の探訪にはじまり湊川の最期にはつてゐる。二三の参考書により特に中村孝也博士の教へを受けたといはれてゐるが、大體普通の解釋に従つてゐる。戦ひの情景やその他緊張した場面もいろいろあるが、やはり正成ひとり心のうちをしづかに語る場合などの方が最も美しい。正成至誠の美は死によつて完璧をきはめる、との解釋に立つてゐるあたりも、この作者らしいものである。作者は「序」のはじめに、子供の時から正成が一番好きだつたといつてゐるし、この

作品は近頃になく全心的に出來た仕事であり、「僕は自分の一生の仕事の内でも一番會心の作の一つだと思つてゐる」ともいつてゐる。

(昭和一二、一〇、一七 小石川區音羽町三ノ一九  
大日本雄辯會講談社 四六判 三七〇頁 一・五〇〇)

福田 清人 著

### 國木田獨歩

これは國木田獨歩を主人公として、其の生涯を描いた傳記小説である。著者は東大國文科の出身で、明治文學の研究者として知られてをり、其の方面の著書としては「硯友社の文學運動」があり、中堅作家の一人である。

國木田獨歩は明治文壇の巨匠の一人で、自然主義の先驅者である。しかし彼は單なる作家である以外に、情熱に燃えて自己の描いた理想に向つて突進した人間であつた。かうした傾向は強ちに獨歩に限らず、明治の文士氣質に共通に見られた現象であるが、獨歩の如く激しい情熱を抱いてゐたものは餘り例がないであらう。かの有名な九州佐伯にをける塾生活の時代に、如何に彼が人生の眞實を掴まんとして努力したかは、有名な「欺むかざるの記」を讀めば分る。「山林に自由

存す」は有名な彼の句である。而してこの教師生活を一擲して蘇峰の民友社に投じ、續いて日露戰役の從軍記者として渡滿し、漸く彼の名は世の中に知られるに至つた。歸來後における信子との劇しい戀愛、海道の開拓に生活を打樹てんとした空知川行、田山花袋との交友、作家としての活動、獨歩社の經營、而して宿病に抗し得ず尙ほ大成を見ずして茅ヶ崎に歿するまで、誠に眞摯な一生涯であつた。

福田氏はこの不運なりし天才の生涯を克明な資料の調査、全作品の味讀の後彷彿させようとしてゐる。描寫法は恐らく鷗外の傳記小説に範をとつたものであらうか、淡々として、凡て無用の文字を却けた、簡潔な描寫振りである。必ずしもこれが成功してゐるとは云はれず、やゝ單調に流れた點もあり、又充分に獨歩を傳へたとは云ひ切れない點もないではないが、然しこの天才作家の全貌をひた押しに描いた努力と自分には、充分の敬意を拂ふべきであらう。一つの傳記小説としても、又、國木田獨歩を知る上にも、優れた一本と云ひ得るであらう。

(昭和一二、六、一 牛込區矢來町七一 新潮社  
四六判 三二〇頁 八〇〇)



パール・バック著  
新居 格譯

## 大地

これは支那民衆の深酷なる現實の生活を完膚なきまでに描いた小説である。この小説の作者パール・バックは、アメリカ宣教師の娘であるが、幼時より支那に伴はれて支那人の間に成長し、十七歳の時に一時高等教育を受けるため歸米したが、その後も宣教師の職務を帯びて支那に住し、彼女の夫ロツシング・バック氏は南京大學の農業經濟の教授であつた。さういふ關係から、バック女史が支那民衆の社會生活・風俗習慣の表裏に精通し、支那の貧農奴隸の下層生活から支那の軍閥や政治家の上層まで觀察し知悉してゐることは疑ふべくもない。この小説自身がその證左となるものである。

然し吾人を驚かせるものは、單に知識としてそれらの事に通じてゐるからではなく、支那の茫漠たる天地の中に蠢動する民族の姿を描き出した、その描寫力である。「大地」の主人公は王龍といふ一貧農である。土への強い執着力といふ人間本能を現はすことによつて、冷酷なる自然の暴威と闘つて行く善良な百姓にすぎない。これに配する阿蘭といふ元奴隸

の王龍の妻は、バック女史の筆力の強靱さを最もよく現はしてゐる。多難なる環境に圍繞されて、喘ぎながら生きて行く一貧農王龍の青年期より、巨萬の富を残して死んでゆくまでを描いたのが第一部であり、彼の三人の息子と支那の財閥と軍閥を描き出したのが第二部息子、更に若き世代の分裂する王一家を寫して因襲と新時代の噴合ふ最も新しい現實を描出したものゝ第三部分裂せる家、に分れてゐる。

大地がこのやうに支那民衆を描いた名作として、我が國の讀書階級に與へた感銘は大きい。我が邦人の知らざる支那現實の姿が始めて我等の眼前に如實に展開されたからである。支那に於ける我が戰果の輝やかしい今日、支那を知ることが吾人の急務である。支那民衆に對する親切なる案内書としてこの書を一般大衆の机上に推薦する所以である。

昭和一二、一〇、二五 第一部 三六九頁 四六判

昭和一二、一一、八 第二部 四六〇頁 四六判

昭和一二、一一、二五 第三部 三六三頁 四六判

麹町區三番町一 第一書房 各一三〇

井伏 鱒二 著

## 山川草木

これは作家井伏鱒二氏の輕妙洒脫な隨筆集である。井伏氏

は現代のわが國の作家の中でも缺けてゐるといはれるユーモラスな才能に恵まれ、その才能に相當自信を持つた作家だと思ふ。しかしかういふ作家は、日常茶飯事のことを行き當りばつたりと書くとしても、本當は自家藥籠中に精磨された素材を選んでゐるのであつて、「山川草木」といふ題がついてゐるが、人事に關するものが主である。「町内の話」や「五十萬圓氏」や「牛込鶴巻町」等の特に傑れてゐる所以である。

この本には、しかし珍らしく「旅行日記」「鳥雜記」「瀬戸内海にて」「山の宿」等紀行とまではゆかないでも、旅行氣分の濃厚なものが多く、さういふ一福の風景畫の中に定着された作者の心の裸形を感じることが出来る。特異な筆は落ちつき拂つて縦横に伸び、讀者をいつかほゞ笑ませるものがある。

こゝには時代を動かすに足る華々しさはないが、人間の生活といふものを考へさせ、冬ざれの中の人生の日溜りを感じさせる好ましい隨筆集であることをいつて置きたい。

(昭和一二、九、二七 本郡區元町二丁目三九ノ四)

雄風館 四六判 二二九九頁 二・〇〇

戸川 秋骨 著

## 朝食前のレセプション

これは秋骨氏の第何番目かの隨筆集である。氏が隨筆家として独自の文體を持し、當代有数の名家であることは、今さら言を俟たないが、現今の世に氏の隨筆に接することは、格別清涼の感を感じるものゝ如くである。書名すでに爽快なものである。この書は本書中にある同名の一篇に由來するのであつて、十八世紀後半イギリスの社交界の婦人に行はれた朝食前のレセプションを紹介し、軽く、爽かに、こだはりのない隨筆の意をよせたものではないかとおもはれる。本書中にも「をなが」といふ一篇があるが、「序言」でも「をなが」といふ小鳥があるといふ書き出しで、自分の語る聲をながの鳴聲のやうにまづけて聞くに耐へないのではないかといふやうなことをいはれてゐるが、なか／＼どうして、カツコウの如く、カナリヤの如く清澄で、爽快なのである。例によつて話題は多方面にわたつてゐるが、いまは特に「拜外と排他」「東西の見方考へ方」「トマス・モアの人物と『ユウトピア』」等々の諸篇に關聯して一言いひたいとおもふ。氏の隨筆は、單に輕妙洒脫なものといひ捨てられないものである。氏のさりげない姿の中には、一片稜々の氣骨が藏せられてゐるのではないか。氏は本書の中でもどこかで、自分からモラリストだといはれるが、自分ではそのつもりではないと、むしろモラリストといはれることに不本意の口吻をも



らしてゐられるが、根はやはりモラリストなのだとおもふ。さしあたつて以上にあげた諸篇を讀めば、とりわけそれがはつきりとうつるのでなからうかとおもふ。そのやうに改まつて堅苦しくいふことが、じつはこの本の紹介にはふさはしくないことなのだ。自由で、軽快で、おのづからの中に骨があるといつた風格ではないかとおもふ。なほ以前本誌に書かれた（小泉一雄氏の『父「八雲」を憶ふ』）といふ一文もあることを附記しておく。

（昭和一二、一二、二〇 麹町區三番町一 第一書房  
四六判 三四八頁 一・五〇）

水野 葉舟 著

### 小品集村の無名氏

そのむかし、早稲田派の文人として清楚可憐な筆をもつて鳴つた水野葉舟氏の久方ぶりに世に出た小品集である。葉舟の名はおそらく今の讀者の頭にはあるまい。おもへば小品文といふ名も、葉舟氏あたりから出て來たものゝやうにおもはれるが、一頃流行して年少者に愛好せられた記憶がある。記憶といへば、くさぐさの記憶のおもひまつはる本である。葉舟氏その人が、ゆくりなくも出遇つた古い知り合ひの感じで

あるし、この文集を讀みゆくにつれ、思ひおこすは、みな埋れてゐた遠い懐しい思ひである。

「私が下總の印旛沼と利根川とに近い場所に移住してから、今年は十四年目になります。その間におのづから土地の生活になじみ、少しづつ、自然の魂に親しんで、少しばかりの作品を書いたのがたまつて來ました。この一冊はその中の一部分です。」と、著者はこの書の「序」のはじめに書いてゐる。十四年間田舎に埋れて、相變らず自然に親しみ、觀察してゐたのだ。著者の文學はたしかに「自然」の文學である。この書の第三部は「季節（日記の反芻）」と題して八篇の文を集めてゐるが、「日記を基にして書いた季節推移の記録です。少し人に煩はしい氣を起させるかと思はれるやうに、細かな感銘をたどつて書きました。」と著者がその「序」に書いてゐるやうに、實に細かな自然觀察の記録である。その觀察眼は人間の上にもおなじやうに及んでゐるのである。第一部にあるところは「少し小説風にした作品」集であるが、田舎の朴訥な人々の間に見る一情景を、細かにスケッチしてゐるのである。全くむかしながらの自然描寫である。今の讀者にはおそらく縁遠い、肌合ひのちがつたものであらうが、いふばかりなく懐しい思ひを抱く人もあらう。かくの如き「自然」は既にわすれられた自然である。思ひ出の自然である。

われわれは今これを葉舟氏と共に思ひおこしていゝやうにおもふのである。

（昭和一二、一二、二〇 京都市河原町二條下ル 人文書院  
四六判 三六五頁 二・〇〇）

阿部 次郎 著

### 秋窓記

「秋窓記」は著者が大正十三年秋外遊から歸來後に發表したもののうち、學術的な論文と「游歐雜記」に收められたものを除いた其他の殆んど全部を集めたものであつて、隨筆集であり評論家である。

自序によると

それは普通の隨筆の如き氣輕な觀察の面白味を持たず、普通の評論の如く整然たる理路を以つて讀者を説得しようとする心構へを缺き、たゞ自ら言はむと欲するところを、半ば囁くが如く、半ば訴へるが如くに語るのみである。この自ら名くる所以を知らざる衝動が、最近の十餘年に互る私の内面を支配してゐた。さうして本書の内容は結局この衝動の折に觸れたる表現に外ならぬのである。本書を通讀するは、其處に一貫する一種の憂鬱、一種の重苦しさを感

ずるであらう。私はこの感じを象徴するものとして自ら「秋窓記」と命名するのである。

而して本書の基調をなして一貫するものは純正なるヒューマニズムの正統に據つて、時代思潮と世界文化と民族精神に正しき認識を與へんとする著者の信念の吐露であり、靜かに燃焼する情熱である。こゝにその數篇をあげて内容の一端に觸れたいと思ふ。

巻頭にをかれてゐる「日本と親くなつた話」はその異様な標題にも拘らず、最も注目すべき一篇であり、著者の信念を示すものである。

著者はこゝに淺薄なる癡癡的愛國運動に代るに、眞にわが民族の現實と歴史に立脚する正しき愛國心を説いてゐる。即ち既成日本を世界最優の文化と信じ、日本の福利のために他國を顧みないところに眞の愛國心はない。かゝる封鎖的愛國主義を却けて、日本を將來に發展せしめるがためには、外國文化の攝取同化は固より、更に世界的文化を明日に創造せんとする意志を必要とする。世界的統一的文化の理念に參することなくして、眞の愛國はあり得ない。同時にわが國の左翼運動者が働きかける地盤としての日本の現實と歴史とを認識すべき質素にして、困難なる努力を感ずることなくして抽象



的概括的なインターナショナルイズムに盲動するは、観念論の最悪なるものであるとなしてゐる。この主張は「二つの夢」「東洋」「外國文化の諸問題」の一聯の作品にも同じく基調をなすものであり、又「教養」を強調せる「新入生諸君に與ふる言葉」「新しき卒業生のために」「ある花嫁に贈る言葉」「文化の中心問題としての教養」へも連なるものである。

著者が「教養」として論ぜんとするものは、個體の特種意義に對する認識である。即ち個體が自然及び社會の全機構の焦點であり、燃焼することによつて文化的生産力として社會の進展に参加するものであることを知り、以て人類の統一的文化への意志と努力を把握することにあるとする。

以上の諸篇の外に、埃及古代文化を論じた「カイロ附近」「テーベの古都」、故人の思ひ出を語る「師友録」、力作である「俳諧と人生」「國文學と考學」等の諸篇が收められ、いづれも著者の深い教養と犀利な考察力を示してゐる。

(昭和一二、一〇、五 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店  
三五判 六二七頁 一・八〇)

木村 毅 著

### 旅と讀書と

「旅の手帳から」「書架の前にて」「簡單な自叙傳」と三部門に分れた隨筆集で、序文にも書いて居る様に、一年前に出した「青燈隨筆」に比べれば今度は少々脂粉の氣を帯びたものである。

旅に關する隨筆は著者の外遊、主として滯歐中のものが多く「ドイツケンズ記念の店を守る少女」「ピム君の俳句論」「ロシイ・マイ・ガール」「スイスの娘」「春の巴里」等のものであるが、著者の社交、ロンドンに於ける著者の「マイ・ガール」、ダンスの初経験など軽い旅日記である。其他三原山、島原半島、藝備の春等の旅行記も加へられてゐる。

書架の前にて——は著者の明治文學に關する所見を述べたもので「明治時代點描」「明治文學研究の三階段」「福澤先生と明治文學」「二葉亭の英文」等々である。それに自分の簡單なる自叙傳を最後に加へたもので、全般を通じ軽い肩のこらない、又どこを讀んでも、知らず知らず讀み續けられる、味のある讀物である。

(昭和一二、一一、一五 神田區鍛冶町一ノ一 双雅房  
四六判 二九〇頁 一・五〇)

雪嶺 三宅雄二郎 著

### 人の行路

本書は久しぶりに見る雪嶺氏の文集である。かゝる文章は何といふべきであらうか。隨筆といふべきか、論文といふべきか、はた評論といふべきか知らない。しかしやはり一種の隨筆といふべきであらう。而して氏独自の文體であることはあまりにも有名である。「人の行路」では「人」が直ぐ理解せられるに反し、『行路』が餘り固苦しく、肉の生煮に類するが、ピフテキの如きは生煮が却て宜しいとなつてゐる。(序)この文すでに、その独自の文體を充分に匂はせてゐるのである。

おそらく現今の若い人々には親しみ薄いものであらうが、相當年輩の人々には懐かしいものであらう。氏の文章は處世智の文章といふべきものであらうが、一種の叢智にまで達したものといつていゝであらう。老いて倦むところを知らず、益々廣く豊かに、人生智を蓄積せられるのである。それが物により事にふれて、恰も蜘蛛の糸を吐き出すが如く盡きず吐き出されるのである。題目の数も無慮百、大方二・三頁の短い文章を成してゐるが、與へられた題も多いといふ「有産者生活と無産者生活」「現代の安心立命」「自由と不自由」「青年

の生きる道」「破壊の後に來るもの」「素直で強い人間弱い人間」「日本民族の自信」等々、題目を見渡しておのれの好むところを讀んでみればよい。訥々として語る老熟の思想には、一種いふにはれぬ滋味がある。それを讀んで鼓舞激勵を身にうけるといふ底のものではなくて、あくまでも芳醇な茶をすゝめるの類である。讀む人によつては汲めども盡きぬ味があるであらう。何處を讀んでみても、古今東西にわたる博識にはおどろくであらう。「人類及び世界の動き」「汝の國家を知れ」「日本主義の眞髓」等、終の數篇を讀んでみるだけで、識見の廣く遠大であることに今時一驚を喫するほどである。近來の論壇はあまりにも近く現實的なことにのみ離隔しすぎてゐることを今更に感ずるのである。

(昭和一二、五、二二 芝區芝公園五號地 實業之世界社  
菊判 五二六頁 三・〇〇)

和辻 哲郎 著

### 面とベルソナ

面とベルソナといふ書名を見たとき、實はそれが何を意味してゐるのかわからなかつた。

しかし、隨筆集だといふことは想像されたし、和辻氏の



書かれたものなら兎に角、読んで見ていゝと思つたので、早速一本を求めて読んで見たのであつた。そして例によつて、一句一句に悉く感服させられながら最後の頁まで熱心に読むことが出来た。

面とベルソナといふ書名は、こゝに集められた二十八篇の隨筆中の最初的一篇から來てゐるので、面とは伎樂面・能面などのお面のことであり、ベルソナとはラテン語の矢張り劇に於ける面を意味したのが、轉じて劇に於ける役割を意味することとなり、従つて劇中の人物を指す言葉となり、それが更に人間生活に於けるそれぞれの役割を示す語となり、行爲の主體、權利の主體としての人格の意味になつて來たものといふ。こゝに即ちベルソナといふ言葉が以上の如きものろの意味に轉じて行くところに、和辻氏は人の顔面や伎樂面やお能の面がそれぞれの様式と仕方、肉體や生きた人を肢體として獲得して、已れに従はせる主體的なるものゝ座、人格の座たる意味を持つことを理解してゐるのである。

本書に集められた短篇は、人形芝居や自由劇や繪畫等、藝術に關するものが比較的多くを占めてゐる。その他岡倉先生や寺田さんの思ひ出や、書評や、紀行文や、學生檢舉事件、所感や、いろいろのものが含まれてゐるが、全體を通じて和辻氏の日本文化に對する情熱がこれ等の短篇を生み出したもの

といふことが出来やう。

われわれの住む世界は、ことに文化の世界は汲めども盡きぬ意味に満ちてゐる。しかしその意味は、深く見、深く考へる人に出會はなくては、已れを現はにすることが出来ない。といつて和辻氏の如き、廣く且つ深き洞察力はもとより常人に望むべくもない。たゞわれわれは本書中のもろもろの短篇に於て、和辻氏の洞察力によつて、わかりやすく解明されたところを通じて、日本文化の有つ深い意味に接することが出来ることを甚だ嬉しく思ふのである。苟くも日本の文化に關心を持つものに、一讀を薦めてよい本であると信ずる。

(昭和一二、一一、二〇 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店  
四六判 二九七頁 一・六〇)

賀川 豊彦 著

### 黎明を呼び醒ませ

著者は散文詩風の「序」の終で次のやうにいつてゐる、「太古、日本海は沙漠であつた。近代に至つて、その沙漠がまた日本の靈魂に復活した。早魃に私の眼の涙まで蒸發した。お、沙漠の暗闇に黎明を告ぐる乙女星スピカの昇る日は何時か。私は凍えつつ、沙漠の端に黎明を待つてゐる。鶯よ、雲

雀よ、早く新春を督促しろ。沙漠の端の闇の中に、獨り立つてゐる私を憐れんでくれ。」と。なほまた本書の巻頭に「黎明を呼び醒ませ」といふ、これも散文詩風の一編がある。それらが本書全體の基調をなすものであらう。

本書に收まつてゐる文章は實に多種多様なものである。著者は人も知る如く、實行の人であり、信念の人であり、宗教家であり、社會運動家であり、日本人であり、かつ世界人である。東奔西走席暖まる暇なきかと思へば、靜かに天文学の書に読みふける人である。氏は本質的には詩人なのだと思ふ人もある。本書はそれら一切の人である著者の、時にふれて書き記した長短幾多の隨想・隨筆・記録の類の集りである。本書を読めば、著者は詩人であるにはあまりに實際家であり、宗教家であるにはあまりに社會人である、との感を深くするであらう。しかし、そこにこそ氏独自の人格と領域があり、本書も幾多變轉極まりない文筆の中に、何か一貫する多面的動的な著者の面目を窺ひ知ることが出来て、興趣を覺えるのである。

「懺悔僧としての徳富蘆花」「武蔵野の魂の記録」「徳富蘆花氏の思ひ出」「小説『富士』等これらはすべて蘆花氏について書いたものである。豊彦と蘆花、この對照、すでに面白いではないか。そして何かしら一味通ずるものを感じるではない

か。「西大阪は嘆く」、これはあの昭和九年秋の關西大風水害の記録である。新聞記事のほかこのやうな記録があつたであらうか。われわれは著者のやうな人からもつと／＼細密な記録を残しておいてもらひたい氣がする。「新天文学の方向」「天文学から見た新天地創造論」「物質に對する新しい考へ方」「物質を凝視する瞬間」等々はすべて一聯の關係ある文章であるが、讀者の中には氏によつて天文物理学に關する文章を興へられることを意外とする人もあるであらうが、氏のそれら科學の愛好は、謂ゆるアマチュア的愛好といふものではなくて、すべて神へ連るといふ意味をもつものであることを覺らなければならぬであらう。とにかく一種特異の記録として推奨に値するものである。

(昭和一二、一一、二〇 龜町區三番町一 第一書房  
四六判 三三八頁 一・五〇)

關根 秀雄 譯

### 選 モンテ・ニユ隨想錄

關根氏は昭和十年「モンテ・ニユ隨想錄」全三卷二二三頁を譯出して公にし文藝懇話會賞を獲得したのであつた。



本書はその中から「最も現代日本人に読んで戴きたいと思ふ所約五百頁を、抜抄したものである。」「嘘つきに就いて」以下三十四篇收つてゐる。

本書の巻頭には「はしがき」と十五頁に亙る「モンテニエの根本思想」といふ著者の解説がついてゐる。この解説は頗る懇切な理解に充ちた好論文であつて、讀者は本書を読むに非常な助けとなるであらう。「はしがき」には、「原書は、四百年前、しかも異朝の人に、書かれたものである。けれども、我等は、宛も今日現存の一自由人の手記の如くに、何等の豫備知識なくとも、之に味だし活用することが出来るであらう。否、現代の日本人には、和漢の古典以上に多くの共鳴を以て、親炙せらるゝことと思ふ。」と書いてある。

本書のやうなものは、必ずしも、第一頁から順を逐うて読んでゆく必要のないものである。偶々開いたところを読んでみ出し、読みたいとおもふところを開いて読んでよい。讀み出すとさりげなく長々と語りつゞけるのであるが、一見くどくて退屈なやうであり、讀みゆくその間に一種いふにはれる味の満ちてゐることを知るのである。譯文も「わしが」とか、ときには「御座る」といふやうなことを使つて、古風を出さうとつとめてゐるやうであるが、何となく適切なやうにおもはれる。

解説によれば「児童の教育に就いて」「人食人に就いて」など重要な位置を占めるものゝやうであるが、この二篇だけについて見ても、モンテニエの思想の先驅的重要性を察することが出来るのである。彼はまさしく、十八世紀における科學的精神並に自然尊重の思想の先驅をなすものであつたとおもはれる。

本書を讀んでも今さらに感じることは、眞理は常に新しいといふことである。十六世紀におけることばが、まさに今日に聞くが如く新しいのである。現代日本の知識人が座右に具ふべきことを希望する。

(昭和一二、一、二〇) 神田區小川町三ノ八 白水社  
四六判 四八三頁 二〇〇)

昭和十三年三月二十五日印刷 頁數百七十七  
昭和十三年三月二十八日發行 定價金二十錢

編輯者 鐵道弘濟會印刷場  
發行所 鐵道弘濟會印刷場  
代售者 日本書館協會  
東京市神田區區會三丁目四番地文部省内  
發行者 鐵道 日本圖書館協會  
振替東京二四一八一番

集選クッパ・ルアパ

# 大地



現在世界で一番問題となり最も多く讀まれてゐる小説は『大地』だ!!

映画「大地」だけを見て満足されてゐる方があつたら眞にお氣の毒です。「大地」を讀まねばほんとうの「大地」は解りません。

新居 格  
深澤 正策

## 第一書房豫約

東京市麹町區三番町 振替東京六四二二三

支那を如何にすべきか? この問題を解く重要な鍵は先づ第一に支那を知る事だ。支那を知る唯一の原は『パアル・バツク選集』全七冊あるのみだ。今や『大地』は書物と、映畫と、演劇に、そして『大地』に感激した讀者自身の感嘆と其等の口から口への推薦が全日本に潮の如く氾濫してこれを讀まない人は話しにならぬ人だとまで評判されるに至つて来た。従つて我が第一書房は、正月あけを待つて一齊大増刷を續行したにも拘らず出来る片ツ端から豫約賣切れ、いつも申込みに應じ切れぬ有様は誠に遺憾だつたが愈々超大増刷敢行、速に入手せられよ!

大地 第一部は支那農民を、第二部は支那軍閥を、第三部は支那のインテリゲンチヤを描く雄大な傑作小説である。

母 正宗白鳥氏は「近頃最も感動した小説」と激賞して居られる。支那の「女」といふべき「大地」につゞく大作。

母の肖像 母と娘とが斯くも美しい愛情で結ばれてゐたら!! これは眞實のみが語り得る眞珠の如き魂の記録女性の歴史。

戦へる使徒 支那を救ふために一生を捧げし開拓者の苦闘、清純、全く眞實に堪へない人格者の生活。パツクウ文を讀く。

東の風西の風 支那十流の家庭、開拓生活の内幕、新興思想の相剋がその主題となつてゐる。「大洪水」其他の短編を添ふ。

全卷出揃 各册分賣  
一册一圓三十錢



圖說

# 世界史話大成

仲小路彰生著

全十一卷

- 第一卷 原始篇 自然人類史 (第二回配本刊既)
- 第二卷 創世篇 世界神話宗教史話 (第八回配本刊既)
- 第三卷 興亡篇 世界政治史話 (第七回配本刊既)
- 第四卷 科學篇 世界科學文明史話 (第三回配本刊既)
- 第五卷 思潮篇 世界思想文化史話 (第五回配本刊既)
- 第六卷 藝文篇 東西詩歌文學史話 (第六回配本刊既)
- 第七卷 社會變遷篇 古今人類生活史話 (第四回配本刊既)
- 第八卷 戰亂篇 世界戰爭史話 (第一回配本刊既)
- 第九卷 藝術篇 繪畫音樂建築史話 (第九回配本刊既)
- 第十卷 教育篇 世界教育體育體系史話 (第十回配本刊既)
- 第十一卷 總觀篇 東西民族兩大批判檢討 (最終配本刊既)

## 世界史話大成を推薦す

從來の世界歴史的著書の多くは、歐米各國の史家が彼らの國家、若くは民族の宣傳書であつた。だから歐米が主體で東洋其他は從屬的にすぎなかつた。

著者仲小路彰氏は、二十年の長い間たゞ黙々として世界史の研究に没頭し、近來の非常時局から日本民族の動向を世界史上に展開せんと志し人類の生活を譬へば「戰亂」「科學」「思潮」「藝文」「宗教」等々を中心とし、縦から十の部門に分ちて叙述し、その中に、日本及日本人の役割を鮮かに點出して日本文化の地位を世界史上に語り、最後に東西兩文明の嚴正批判としての「總觀篇」をもつて結語する計畫であるが、没落しゆかんとする西洋文明の挽歌と、人類生活に新らしい福音を齎らんとする東洋の指導的民族たる日本人の高邁なる精神を打ち鳴らす哲人著者の囑諭は、出版界の偉觀であり、その明快にして深刻なる叙法に加ふるに珍奇なる名畫寫眞等の配合は、從來の翻譯的史書と全く趣きを異にしたる、斷然他の追隨を許さない良史書である。

定價 一冊 貳圓五拾錢 (菊版上製)

送料 一冊 十四錢

東京芝罘平町二虎ノ門會館

發行所

高志書房

電話芝・〇七三二、一六三六  
振替 東京一三三、六二四

東大教授  
理學博士

加藤武夫 鑑修

理學博士

渡邊 貫編輯

# 地學辭典

四六判縱二段六號本體  
 橫組總頁二〇二六頁  
 組込圖版二〇〇〇個  
 別葉銅版九度刷地圖一葉  
 定價拾圓・送料卅三錢

本邦斯學の最高峯を總動員し、前後五ヶ年の日子を費して世界に誇り得る本辭典の完成を見たことは、弊書院は勿論本邦斯學界の誇とする所である。爾來三ヶ年理想的な地學の大辭典として夙に學徒の信頼を博し、廣汎に普及を見つつあることは誠に欣快に絶へない。

本辭典の收容範圍は地質學・岩石學・礦物學・古生物學・自然地理學を初め、殆ど總ゆる關係學科を網羅してその語彙實に三萬五千に達し、各項目毎に英・獨・佛三ヶ國の術語を附加し、又これ等三ヶ國語よりなる總索引は學徒の絶讚措く能はざるものである。敢て本辭典を江湖に推奨する所以である。

六辭典從來の裝幀は、隨筆製であつたが、時節柄その材料入手の不圓滑にして使用困難なるため、之を精クロス紙に改め、定價も拾圓に改正した。

東京市神田區  
 東河二ノ十區  
 古今書院  
 電話 東京三三三〇四番  
 電話 神田三三五番



# 良書推薦

文部省及日本圖書館協會推薦書

京城帝大教授  
法學博士  
尾高朝雄著 訂法哲學

四六上四〇四  
定價二・〇〇  
送料・一四

佐藤信衛著 近代科學

四六上三六〇  
定價二・〇〇  
送料・一四

大正大學教授  
塩入亮忠著 傳教大師

四六上五八〇  
定價二・〇〇  
送料・一四

圭室諦成著 道元

四六上二八〇  
定價一・二〇  
送料・一〇

大日本報德社  
佐々井信太郎著 二宮尊徳傳

四六上六五〇  
定價二・三〇  
送料・一四

室伏高信著 南進論

四六上三三八  
定價一・二〇  
送料・一〇

商工大區  
吉野信次著 日本工業政策

四六上三五〇  
定價二・三〇  
送料・一四

九州帝大教授  
波多野鼎著 訂改經濟學入門

四六上二四八  
定價一・六〇  
送料・一〇

東京帝大教授  
經濟學博士  
土方成美著 國民經濟讀本

菊判上二四〇  
定價一・五〇  
送料・一四

東京帝大教授  
法學博士  
穂積重遠著 訂新民法讀本

菊判 三五〇  
定價一・二〇  
送料・一〇

農學博士  
鈴木梅太郎著 榮養讀本

菊判 三三〇  
定價一・二〇  
送料・一〇

東京帝大助教授  
航空研究所員  
小川太一郎著 新航空讀本

菊判上五〇〇  
定價一・八〇  
送料・一四

文學博士  
佐佐木信綱著 萬葉讀本

菊判上二九〇  
定價一・八〇  
送料・一四

高濱虚子著 俳句讀本

菊判上三四八  
定價一・八〇  
送料・一四

東京市京橋三ノ四  
振替東京一六番  
日本評論社

# 千倉書房 好評重版圖書

東京京橋第一相互館  
振替・東京九七八  
電話京橋 三七一五  
八八七九

白柳秀湖著 民族日本歴史 (建國編)

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

白柳秀湖著 民族日本歴史 (王朝編)

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

白柳秀湖著 民族日本歴史 (封建編)

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

白柳秀湖著 民族日本歴史 (戰國編)

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

白柳秀湖著 民族日本歴史 (近世編)

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

白柳秀湖著 明治大正國民史 (初編)

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

白柳秀湖著 明治大正國民史 (次編)

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

白柳秀湖著 明治大正國民史 (中編)

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

白柳秀湖著 明治大正國民史 (終編)

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

白柳秀湖著 明治大正國民史 (大正編)

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

前田 晁著 日本古典物語

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

柳田 泉著 東洋古典物語

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

工藤直太郎著 西洋古典物語

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

前田 晁著 日清・日露戰爭史話

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

渡邊幾治郎著 日清・日露戰爭史話

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

渡邊幾治郎著 人近代日本軍事史

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

渡邊幾治郎著 日本戰時外交史話

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

渡邊幾治郎著 明治天皇と明治の建設

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

田中惣五郎著 指導者としての西郷南洲

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

江原小彌太著 すべて吾によし

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

内山孝一著 生命力といふもの

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

本莊可宗著 不惑の人生觀

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇

江原小彌太著 禪

四六上三二〇  
定價一・七〇  
送料・一〇



# 相模書房刊行書目録

彌野 生子著 秋風帖 送料・ 定價・ 三〇	宮澤 義著 銀杏の並木 送料・ 定價・ 二七	錦木 花村著 灰皿の煙 送料・ 定價・ 二〇	岡本 堂著 思ひ出草 送料・ 定價・ 二〇	伊々 園著 續團菊以後 送料・ 定價・ 二〇	伊々 園著 團菊以後 送料・ 定價・ 二〇	藤島 治郎著 匠人談義 送料・ 定價・ 二〇	岸田 刀著 薨 (いらか) 送料・ 定價・ 二〇	岸田 刀著 過去の構成 送料・ 定價・ 三〇	直木 彦著 十二松堂閑話録 送料・ 定價・ 二五
以下 圖書 目録 々々 進刊 呈行			* 近刊書		吉岡 生著 來るもの、爲に 送料・ 定價・ 二〇	吉野 次著 青葉集 送料・ 定價・ 二〇	里見 淳著 忙中閑語 送料・ 定價・ 二〇	岡邦 雄著 街頭評論 送料・ 定價・ 二〇	廣瀬 士著 イタリヤ全史 送料・ 定價・ 二五
			野上 豊一郎著 隨筆集 (寫眞挿入)	鎬木 清方著 隨筆集 (挿畫寫眞挿入)					

## 相模書房

ルビ橋本日四ノ二通區橋本日  
番一八九・〇八九橋本日話電  
番〇八四〇三一京東替振



# 洋書目録法の理論と實際

パチエラ・オブ・サイエンス マスタ・オブ・アーツ 大佐三四五著

第一編 概論	菊判	バクラム装
第二編 目録記入の基礎知識	10ポイント	横組
第三編 著者名一般	本文	547頁
第四編 書名一般	定價	5圓50銭
第五編 出版事項及び形態事項一般	日本圖書館協會 會員に限り	5圓
第六編 註記事項一般	送料	市内・6銭
第七編 各種目録カード記入法		内地・22銭
第八編 定期刊行物		臺灣・47銭
第九編 特殊圖書		朝鮮・62銭
第十編 貴重圖書		滿洲・60銭
第十一編 各種印刷目録	官廳・圖書館・公私團體以外の 御注文は前金に願ひます	
第十二編 カードの排列		
第十三編 現代目録界の展望		
第十四編 目録記入の實際		
第十五編 比較目録法		

發行所

社団法人 日本圖書館協會

東京市麴町區霞ヶ關三ノ四 文部省内  
振替口座 東京 24181番

御注文に關する電話は 下谷(83)389番  
帝國圖書館内 日本圖書館協會出版部宛に願ひます



◀◀ 新時代の叢書 ▶▶

# 大日本圖書

新刊六冊入・題名ス・本各冊約三百頁

定価各冊一圓 全圖 定價各冊一圓  
送料金十錢

最新論理學綱要 五高校長 十時彌	現代の海軍 海軍少將 匝瑳胤次	現代の陸軍 陸軍少將 伊藤政之助	國防論 陸軍少將 宇山熊太郎	女性之道 文學博士 下田次郎	婦人世間道場 文學博士 春山作樹	哲學と文學との間 文學博士 桑木殿翼	佛教の精神 文學博士 常盤大定	皇室と日本精神 文學博士 辻善之助
(以下續々刊行)	儒教の精神 文學博士 高田眞治	日本文學の精神 文學博士 久松潜一	日本文化と佛教 文學博士 辻善之助	優生と結婚 醫學博士 大島正滿	日本の鳥類 農學博士 内田清之助	日本の魚類 醫學博士 田中茂穂	社會病理學 醫學博士 杉田直樹 <small>不良少年篇(一)</small>	社會教育概論 日本教育協會 小尾範治

東京市銀座一座丁・目一・振替東京二九一番

## 大日本圖書株式會社

特價

3月5日—5月10日

全國書店一齊

模範佛和大辭典  
十大家共編 特價 8.00 送料 .31 定價 9.00

標音佛和辭典  
山本直文編 特價 2.20 送料 .15 定價 2.50

白水社和佛辭典  
丸山順太郎編 特價 3.80 送料 .21 定價 4.30

新佛和熟語辭典  
德尾俊彦編 特價 2.70 送料 .15 定價 3.00

佛和法律經濟商業辭典  
工藤肅編 特價 3.00 送料 .15 定價 3.50

標音露和辭典  
岩澤丙吉編 特價 2.20 送料 .15 定價 2.50

白水社露和大辭典  
滿鐵編 原裝 特價 10.00 送料 .57 (定價 11.00)  
縮冊 特價 7.50 送料 .45 (定價 8.50)

ソウト略語辭典  
佐藤通男編 特價 1.30 送料 .16 定價 1.50

# 新佛和辭典

女子學部 井上源次郎 陸軍士官學校教授 田島清共編  
學者的真心と現代人の神經を以て編纂せる最新中辭典！  
清なる語彙を豊富に供給して現代の要求に端的に應へる佛語の貯水池である。  
初學者から専門家まで必携すべき掌中よく十萬餘語を收むる學界折紙つきの劃期的佛和辭典である。

語數十萬餘を収録  
ポケット型・855頁  
總革裝・文字金箔押  
特價 3.50  
送料 .15 定價 3.80

附錄  
★ 79種の不規則動詞變化表  
★ 720餘の常用略語集  
★ 佛國地圖 ★ 巴里名所地圖

# 獨和言林

九州帝大 助教授 佐藤通次著

特製 特價 5.00 送料 .33 定價 5.50  
並製 特價 4.00 送料 .33 定價 4.50

東京神田駿河臺下

振替東京33228 電話神田 3598 白水社



◀◀ 書叢の代時新 ▶▶

# 大日本圖書

頁百三約冊各・本美裝スーロク鶴・入函判六四新  
 賣販てに店書名著國全 圖一金冊各價定  
 錢十金料送

最新論理學綱要 五高校長 十時 彌	現代の海軍 海軍少將 匝瑳胤次	現代の陸軍 陸軍少將 伊藤政之助	國防論 陸軍少將 宇山熊太郎	女性の道 文學博士 下田次郎	婦人世間道場 文學博士 春山作樹	哲學と文學との間 文學博士 桑木嚴翼	佛教の精神 文學博士 常盤大定	皇室と日本精神 文學博士 辻善之助
(以下續々刊行)	儒教の精神 文學博士 高田眞治	日本文學の精神 文學博士 久松潛一	日本文化と佛教 文學博士 辻善之助	優生と結婚 理學博士 大島正滿	日本の鳥類 農學博士 内田清之助	日本の魚類 理學博士 田中茂穂	社會病理學 醫學博士 杉田直樹 <small>一不良少年篇(一)</small>	社會教育概論 日本教育協會 小尾範治

番九一二京東替振・目丁一座銀市京東

## 大日本圖書株式會社

特價

3月5日—5月10日

全國書店一齊

模範佛和辭典  
十大家共編 特價 8.00 送料 .33 定價 9.00

標音佛和辭典  
山本直文編 特價 2.20 送料 .15 定價 2.50

白水社和佛辭典  
丸山順太郎編 特價 3.80 送料 .21 定價 4.31

新佛和熟語辭典  
德尾俊彦編 特價 2.70 送料 .15 定價 3.00

佛和法律經濟商業辭典  
工藤 肅編 特價 3.00 送料 .15 定價 3.50

標音露和辭典  
岩澤丙吉編 特價 2.20 送料 .15 定價 2.50

白水社露和大辭典  
滿鐵編 原裝 特價 10.00 送料 .57 (定價 11.00)  
縮冊 特價 7.50 送料 .45 (定價 8.50)

ソ左卜略語辭典  
佐藤通男編 特價 1.30 送料 .15 定價 1.50

# 新和佛中辭典

女子學部 井上源次郎 陸軍少將 田島 清共編  
 學者的真心と現代人の神經を以て編纂せる最新中辭典！  
 清なる語彙を豊富に供給して現代の要求に端的に應へる佛語の貯水池である。  
 初學者から専門家まで必携すべき掌中よく十萬餘語を收むる學界折紙つきの劃期的佛和辭典である。

語數十萬餘を収録  
 ボケツト型・815頁  
 總革裝・文字金箔押  
 特價 3.50  
 送料 .15 定價 3.50

附錄 ★ 79種の不規則動詞變化表  
 ★ 720餘の常用略語集  
 ★ 佛國地圖 ★ 巴里名所地圖

# 獨和言林

九州帝大 助教授 佐藤通次著  
 特製 特價 5.00 送料 .33 定價 5.50  
 並製 特價 4.00 送料 .33 定價 4.50

東京神田駿河臺下

振替東京33228 電話神田 3598 白水社



文學博士 深作 安文先生著 [大日本圖書館協會推薦]

# 今日に處するの道

菊判上製函入  
紙數三四〇頁  
定價 二、八〇  
送料 一、四〇

我國體。思想問題を論じ、政治と公民教育に關して宏大なる意見を開陳し、現代生活を批判し且つ反省し、更らに修養上より見たる現代日本、及び青年に對する幾多の訓話を試みたるものにして思想國難の叫ばるゝ今日に如何に處すべきかを明示せるものである。

東京高師 由良 哲次先生著 [最近刊]

# 歴史哲學研究

菊判上製函入  
紙數五五〇頁  
定價 四、八〇  
送料 二、二〇

本書は現今哲學思想界の關心の中核たる歴史哲學の體系的研究にして、日本精神の本質たる國史教育の原理の哲學的基礎づけをなせるもの。斯道待望の快文字たり。

奈良女高師 德田 淨先生著 [大日本圖書館協會推薦]

# 萬葉集撰定時代の研究

菊判上製函入  
紙數四〇〇頁  
定價 四、〇〇  
送料 二、二〇

日本文化の最高標準たる萬葉集は凡ゆる角度より検討されてきたが、本書は其の残された今一つの觀點に起ち萬葉集に解剖のメスを振はれたるもの。一度び出づるや學界注目の的となり、新村出博士の帝大新聞に講師を寄せられたる名著たり。親しく御誦讀を乞ふて巴まぬ。

# 終

大谷 武一先生著 學校體操の全

新教育 體操 般的解説書に

價三、五〇 送、一四の寶典。

森 秀先生著 全體操教材の

體操教材指導の實際 指導の理論と

價四、〇〇 送、一四實際とを明示

佐々木 等先生著 要目中の全球

學校 球技 技を遺憾なき

價三、五〇 送、二二に解説敷衍

互理章三郎先生著 全世界に放射

聖訓と國民 國民唯一の道

價一、五〇 送、一〇解する。聖訓を奉

和田信二郎先生著 皇國の本然の

皇國の姿 姿を鏗刻せる

價三、二〇 送、一四本書こそは萬

三品 彰英先生著 建國神話を二

建國神話論考 方面より論考

價三、〇〇 送、一四せる眞摯なる

小野 正康先生著 新らしき國學

日本學の根本問題 を樹立し基礎

價二、四〇 送、一四づけたる明快

石山 脩平先生著 現代教育の要

新學習指導要論 望を完全に滿

價二、八〇 送、一四し得る。其是

東 京 市 神 田 區 一 目 黑 書 店 振 第 二 八 〇 座 東 九 京 番